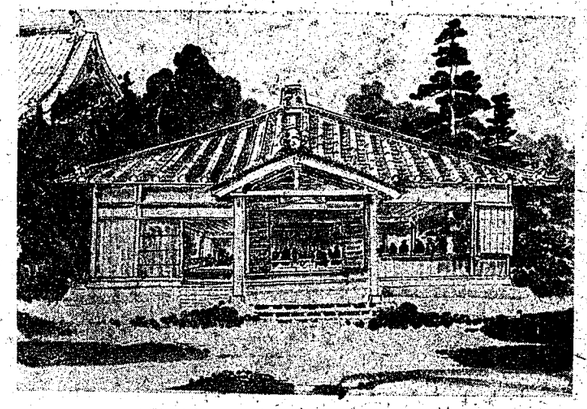
創立九十周年記念



第四十號

和歌山縣立耐久中學校

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書 資料番号 9

昭和十七年度

耐　久

第四十號

和歌山縣立耐久中學校

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

校訓

三綱領

眞健美

十二箇條

一、尊嚴ナル皇室ヲ崇敬シ常ニ聖旨ヲ奉體セヨ。
一、金甌無缺ノ國體ヲ擁護シ國運ノ發展ニ努メヨ。
一、敬神崇祖ノ念ヲ厚クシ父母ニ孝養ヲ盡セ。
一、敬虔謝恩ノ誠ヲ致シ悅ンデ師長ノ敎ヲ受ケヨ。
一、信念ヲ堅固ニシ正シク强ク麗ハシク自己ノ天禀ヲ伸暢セヨ。
一、質實剛健ヲ旨トシ堅忍持久專心事ニ當レ。
一、心身ヲ鍛錬シ强健ナル身體ト潑溂タル精神トヲ養成セヨ。
一、規律ヲ守リ責任ヲ重ンジ各其ノ本分ヲ完ウセヨ。
一、勤勞ヲ愛好シ創造工夫ヲ尙ビ絕エズ研鑽ニ努メヨ。
一、禮節ヲ重ンジ趣味ヲ養ヒ品位ヲ高尙ニセヨ。
一、朋友ヲ親愛シ互ニ切磋琢磨セヨ。
一、社會人トシテノ自覺ヲ高メ共存共榮ノ實ヲ擧ゲ進ンデ大國民ノ氣宇ヲ養ヘ。

稲むらの火の館所蔵 渋谷家文書 資料番号 9

第一校歌

一、たゝふる波も那耆の海　たなびく雲や生石山
わが學びやは礎を　嘉永の昔こゝに置き
耐久學舍の名と共に　幾年月を過ぎにけり

三、三世に輝くのりの道　德を修むるもとゝして
慈愛の心たゝへつゝ　撓まず倦まず身をきたへ
智能をひらき國のため　人のためにもいそしまむ

三、學びの庭に集ふなる　わが友どちよいざ勵め
はげみ進みて久しきに　耐ふとふことを忘れざれ
道義の山は高くとも　眞理の海は深くとも

勅語

國本ニ培ヒ國力ヲ養ヒ以テ國家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ而シテ其ノ任實ニ繫リテ汝等青少年學徒ノ雙肩ニ在リ汝等其レ氣節ヲ尚ビ廉恥ヲ重ンジ古今ノ史實ニ稽ヘ中外ノ時勢ニ鑒ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長ジ執ル所中ヲ失ハズ嚮フ所正ヲ謬ラズ各其ノ本分ヲ恪守シ文ヲ修メ武ヲ練リ質實剛健ノ氣風ヲ振勵シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ

昭和十四年五月二十二日

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕カ衆庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

抑々東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト釁端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ビ相提携スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟未ダ牆ニ相鬩クヲ悛メス米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剰ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ武備ヲ增强シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和通商ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ增大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衞ノ爲蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ

皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名御璽

昭和十六年十二月八日

各國務大臣副署

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

皇后宮御歌

なくさめむことのはもかなたゝかひの
にはをしのひてすくすやからを
やすらかにねむれとそ思ふ君のため
いのちさゝけしますらをのとも
あめつちの神ももりませいたつきに
いたてになやむますらをの身を

目次

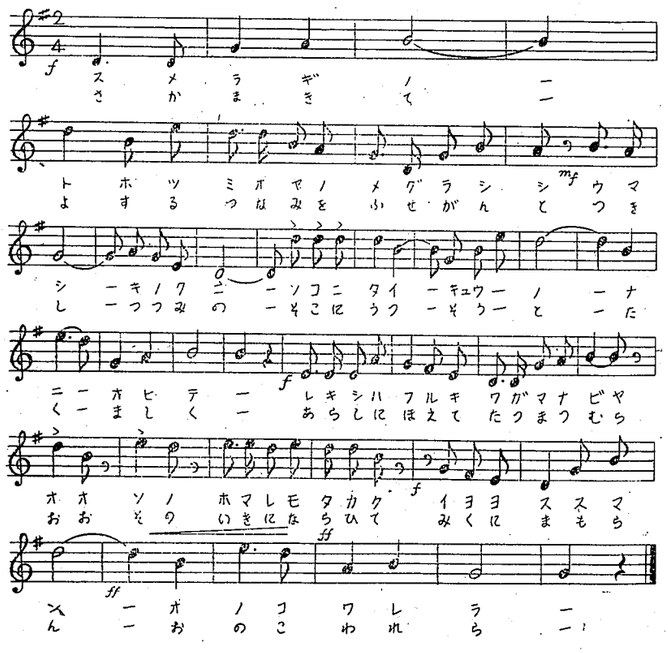
表紙　カット「脩文」
扉　カット「練武」
三綱領十二箇條、第一校歌
勅語（青少年學徒ニ賜リタル）
詔書（宣戰ノ大詔）
皇后宮御歌
第二校歌
口絵
卷頭言……一
式辭及祝辭……三
學校長式辭、縣知事告辭、文部大臣祝辭、來賓祝辭、校友會長祝辭、父兄會長祝辭、祝詞祝電、生徒總代祝辭
記念講演
獨逸の復興と勝利……土岐政藏氏……一五
大東亞建設と青年の覺悟……田中武雄氏……二五
寄稿
文武両道……香川直勝氏……三一

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

在職當時を追憶して……廣瀬實造氏……三二
清流吉野の畔より……佐藤安一氏……三四
文苑……三七
祝歌、和歌、俳句、詩、文叢、寄稿……七六
記念行事記事……九三
創立九十周年記念式典成立經過、記念式記事、表彰式記事、祝賀會記事、
記念講演會記事、記念体育大會記事、先賢巡歴展覽會記事、興亜館に於ける
校友英靈祭祀と遺品、展覽會記事
記念事業……一〇〇
グライダー班創設、圖書充實事業、映寫機購入、自彊寮の記、馬術班の創設
校報……一〇九
學校暦、學徒報國隊編成、臣道實踐組織、職員一覽表
附錄……一三三
耐久中學校沿革史年表、舊職員名簿、創立九十周年記念寄附者芳名
大東亜戰史鈔……一四一
編輯後記……

第二校歌

作詞　佐藤安一先生
作曲　戸山陸軍軍楽隊



一、すめらぎの遠つ御祖の
めぐらしゝ美し紀の國
そこに耐久の名に負ひて
歴史は古きわが學舍
おゝその譽も高く
彌々すゝまん男の子われら

二、逆巻きて寄する海嘯を
防がんと築きし堤の
そこに鬱蒼と逞ましく
嵐に吼えて立つ學舍
おゝその意氣に倣ひて
御國護らん男の子われら

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

第二校歌制定事情

○先年縣學務當局より校歌も文部省の檢定を受くる要ある旨指示あり歌詞及歌曲を提出せし處歌詞の一部は修正せられ且つ歌曲は改作せよとの達示あり。

永年歌ひ馴らされたる校歌の歌曲を改作する仁全く之を破り去るも同樣なるにつき、從來の校歌はそのまゝとし寧ろ第二校歌を新作するを可とすとの議の下に之を制定せり

○歌　詞――尋き傳統と天下稀に見る景勝とを以て特色とする耐中校歌には十分之を昂揚發揮するの要あるを以てその歌詞の原稿は學校に於て之を作り、更にその添削を斯道の大家和高商校長花田大五郎先生に依頼することゝせり。依つて昭和十五年十一月先づ學校長原稿を作成し國漢受持教員に意見を徵しかくて學校としての原稿を得たるを以て同月中旬直ちに花田先生に修正添削を依頼、その後昭和十六年一月一日、二月十一日紀元節、四月學年始業に發表を期して屢々催促を續けた結果、公務多忙中特に五月創立記念日に發表し得る樣大修正を加へて返送せられたり。

○歌　曲――依て直ちに同五月十三日東京陸軍戸山學校に作曲方依頼、同八月出來、九月新學期より練習開始の運びを見たるものなり。

創立者

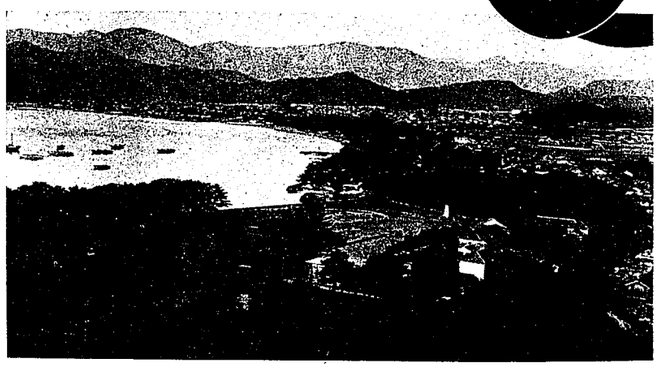
濱口梧陵

岩崎明

濱口容所

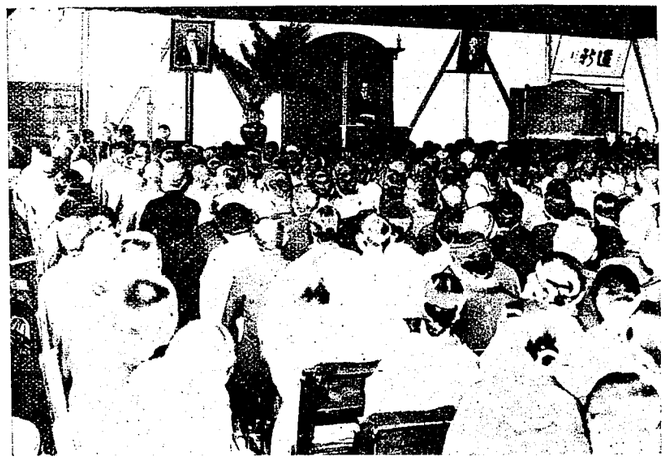
現校長

瀧田謙治



校舍全景

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9



記念式

祝宴會

歴代校長

三代
近藤壽治

二代
香川直勝

初代
寶山良雄

五代
酒井榮太郎

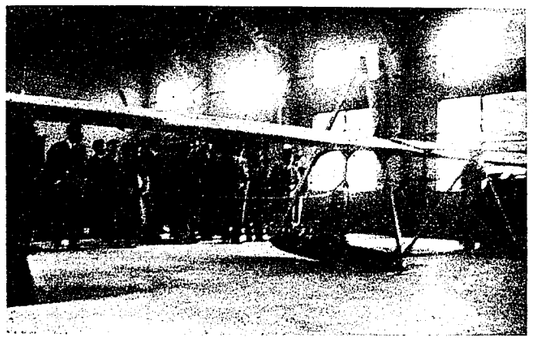
四代
松扉得悟

八代
佐藤安一

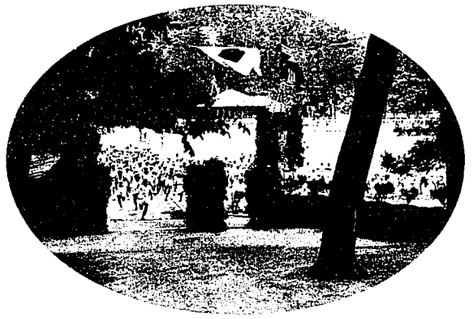
七代
廣瀬實造

六代
瓜生兵吉

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9



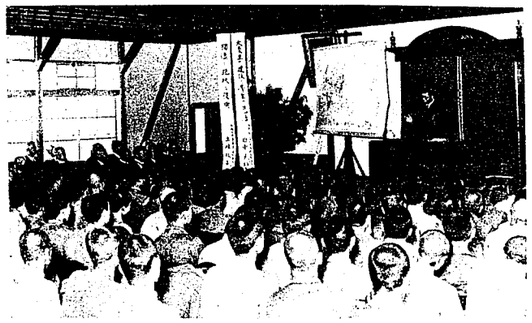
グライダー



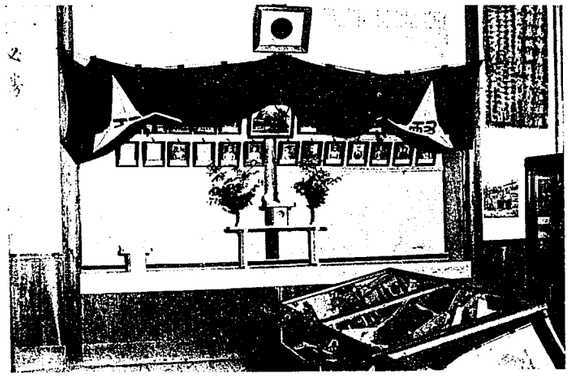
マラソン大會

角道大會

鼎靈祭

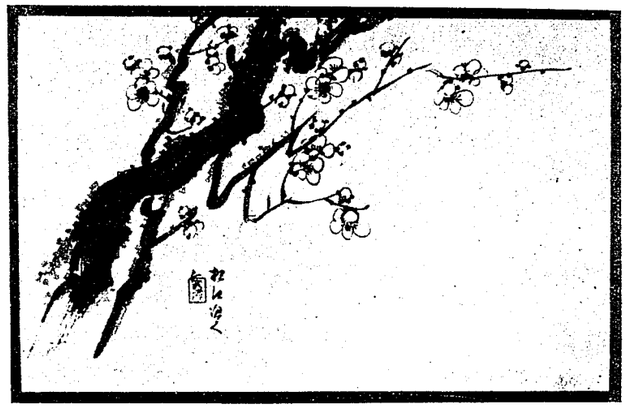


記念講演

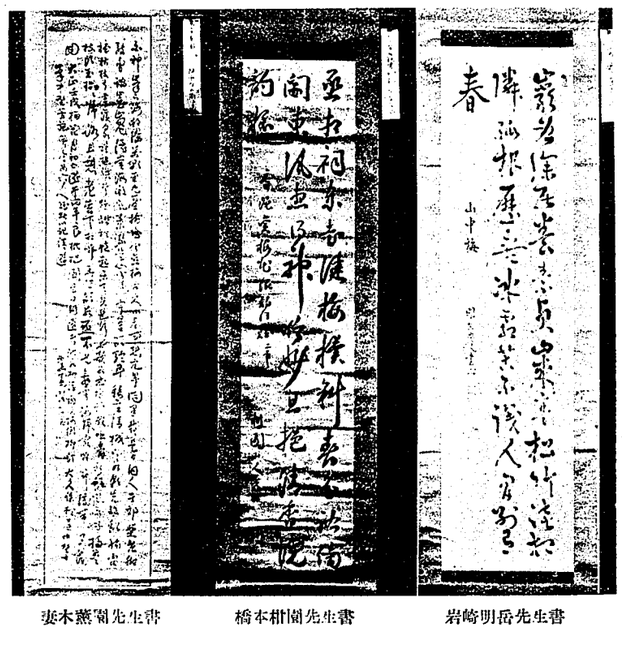


興亜室

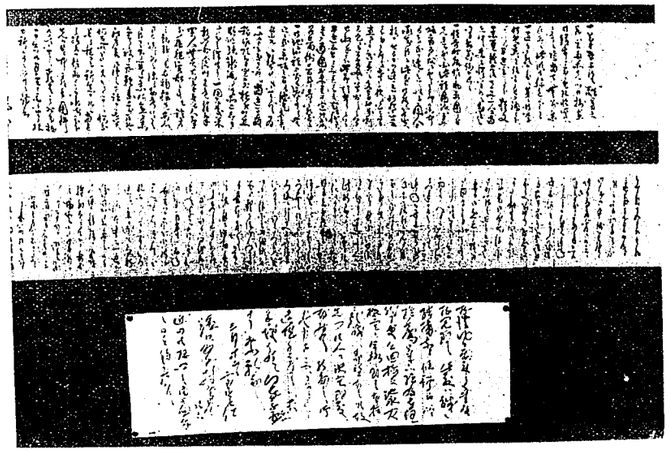
稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書 資料番号 9



蕭生先所容



妻木藤蔭先生書　　橋本柑園先生書　　岩崎明岳先生書

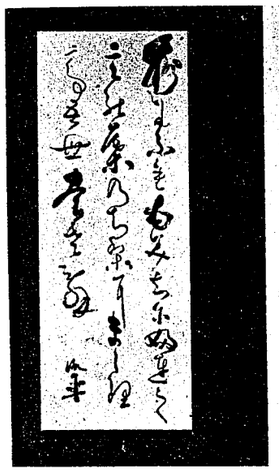


上　梧陵先生書翰
中　容所先生書翰
下　寶山良雄先生書翰

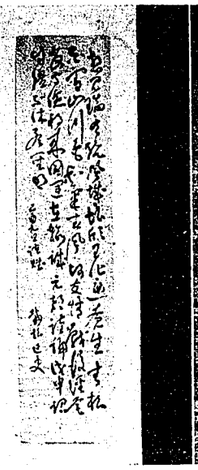
先賢遺墨展覽會

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

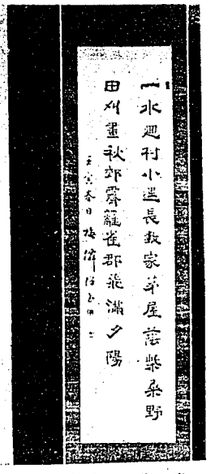
（對幅三）　菊地海莊先生書



野田四郎梅僊先生書



寶山松裁先生書



海上胤平先生書

卷頭言

卷頭に寄す

學校長　瀧田謙治

「天子様へ孝行忠義を盡すは、子や家來のきつとあたりまへにて、忠孝の爲には命惜しまず、……萬一の節は……銘々鐵砲打習ひ、棒使ひ方等心得、きつと男役の間に合ひ候事、日々營みの間むだ遊びせず、明暮油斷なく相勵み、日本氣性の勝れたる處、夷人等に鄰かすため」（廣村崇義團主意書）の申合せがされたのは嘉永四年實に九十一年前の事に屬する。

先づ村内の壯丁を集めて、外國船渡來の事情と目的とは語られ、帝國の危急を說いて國民の覺悟と奮起とは促されたのであつた。

○

如上の理想實現の方法として、其の外容は甚だ振はなかつたにせよ廣村田町の一隅に稽古場は設けられ、衷心國を思ひ邦家の前途を憂ふる愛國者先覺者として、異國船渡來に備へんため先づ以て鄕黨に於ける子弟の敎育から始められ人材の養成に着手せられた。

劍法を敎へて士氣の振作に力め、自身稽古場に下り立たれて槍術は敎授される。夜は夜とて智德の開發學問の奬勵に精進されたのであつた。今を去る九十年の往時、卽ち嘉永五年の當時の壯なる時相を想ふ次第である。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

○

濱口梧陵翁晩年其の支那經營論に曰く「……我が國と隣接し我が國と最も密接の關係を有する支那を歐洲人の手に委せんは、我が國の恥辱なると共に、我が國運を危うするものなり。……但し支那を分割占有するが如きは至難の事に屬するを以て、妄に分割占有すべからず。先づ支那を滿洲、北清、四川湖江、及び南清の四大域に分ちて考慮するに、我が國人が最も力を致すべき地は先づ滿洲なるべく、我が國人自ら滿洲を經營して、露國の南下に對する防衛をなし、更に我が國の勢力を此處に扶植すべきなり。」と。

學創められてより春風秋雨星霜を累ぬる正に九十。支那事變は進展して大東亞戰爭へ推移するに至つた昭和十七年といふ年の晩春、茲に本校創立九十周年の記念式典は擧行せられ、實に感慨無量なりと言はざるを得ない。

○

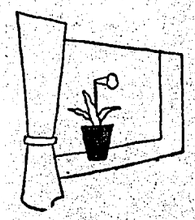
名にし負ふ耐久學舍、能く其の久しきに耐へて今日に及び、以て愈々其の容を整へ其の實を備へて將來無窮に生々發展せんとしてゐる。今茲に一時期を劃し其の始に反り本に報い、先賢の德を慕ひ往時を偲ぶ。即ち其の由つて來るところを思ひ、使命を自覺し、自ら戒めて益々發奮努力し、創學の耐久精神に徹して先人に應へ、御奉公の一念に生きんが爲に外ならない。

○

創立九十周年記念の式典は嚴肅盛會裡に完了し、記念事業も亦大方各位の絶大なる援助と献身的努力とによつて着々進捗中である。

今茲に此の意義深き記念すべき數々を蒐錄して本記念號を發刊するに際し、特に十年後、百周年を迎ふる日の輝かしき日本の姿を併せ想うて心躍り、いよ〳〵其の責任の重大さを思ひ、內外、形式內容の充實せられざるべからざるを心中深く期する次第である。

（一七・一一・一四）



九十周年記念式典

式辭

本日茲ニ本校創立九十周年記念式ヲ擧グル當リ長官閣下ヲ始メ多數貴賓各位並ニ校友父兄諸賢ノ御臨場ヲ忝ウシマシタコトハ本校ノ誠ニ光榮トスルトコロデアリマシテ深ク感激イタシテ居ル次第デアリマス。而シテ茲ニ意義深キ記念式典ヲ擧ゲ各種ノ記念事業ヲ催スニ至リマシタニ就イテハ校友會父兄會並ニ有志各位ノ一方ナラヌ御援助御盡力ニヨルモノデアリマシテ此ノ点特ニ深甚ナル謝意ヲ表スルモノデアリマス。抑々本校ハソノ創設ノ極メテ古クソノ由緒ノ誠ニ深キニ於テハ全國稀ニ見ルトコロデアリマシテ今日九十年ノ校史ヲ誇ル所以ノモノハソノ由來スルトコロ實ニ深イモノガアルノデアリマス。幕末多事ノ際一代ノ英傑梧陵先生ガ人材養成ノ急務ヲ痛感セラレ、同志濱口東江、岩崎明岳ノ兩先生ト相謀リ廣村田町ノ地ニ稽古場ナルモノヲ開カレタノガ抑々ノ起源デ、實ニ嘉永五年ノ昔ノコトデアリマス。翁ガ早ク內外ノ情勢ヲ達觀セラレ、眞ノ皇國民ノ錬成ニ向ツテ非常ナル決意ヲ有シテ居ラレタコトハ、翁一代ノ御事業ガ明カニ之ヲ物語ツテキルノデアリマス。即チ翁ハ實ニ身ヲ以テ子弟後進ニソノ向フベキ道ヲ示サレタトイフベク、常ニ時代ノ先覺タルノ抱負ト熱トヲ以テ終始セラレタノデアリマシテ本校創立ノ精神ハ已ニ此處ニ明カナモノアリト確信スルモノデアリマス。

其ノ後明治二十五年ニ耐久社ト改稱同三十九年廣村西濱ニ校舍ガ新築セラレ只今ノ本館並ニ左右ノ教室ガ當時ソノママヲ傳ヘテ今日ニ及ンデキルノデアリマス。續イテ明治四十一年組織ヲ改メ和歌山縣私立耐久中學校ト改稱、當時ハ校主トシテ濱口

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

容所先生ノ獻身的經營ガアリ校長寶山先生ノ崇高ナル教育精神ノ昂揚ト相俟ツテ名聲天下ニ嘖々タル時代ヲ迎ヘタノデアリマス。歴代先輩各位ノ撓マザル御努力ニヨリ校運ハ年ト共ニ開ケ、大正九年ニ至リ縣營移管和歌山縣立耐久中學校ト改稱サレテ爾來今日ニ及ンダノデアリマス。創始正ニ九十年顧ミレバ幾多ノ變遷ガアリマシタガ此ノ間創設以來ノ恩人濱口家ヨリハ絶エズ多大ナル御援助御庇護ヲ忝ウシ、地方有志ノ方々カラモ亦熱誠ナル御後援ニ預リマシテ、校運益發展隆昌ニ向ヒツツアルハ誠ニ慶賀ニ堪ヘマセン。而シテ此ノ由緒深キ學園ニ學ビコノ創立精神ヲ体得シテ世ニ出デ、今ヤ國家須要ノ人材トシテ活躍セラルヽ方々ノ多キヲ思フ時今更ソノ由來スル所遠ク且深キヲ思ヒ、一入先賢諸氏ニ對シ欽慕ノ情堪ヘザルモノガアルト同時ニ吾々職員生徒一同此ノ尊キ傳統ヲ維持シ、益々先德ノ發揚ニ向ツテ努力邁進センコトヲ期シテキル次第デアリマス。今年九十周年ヲ迎フルニ當リ朝野諸賢ノ多大ナル御援助ト先任校長ノ抱負盡力トニヨツテ多年ノ要望タル學級增加ノ實現ヲ見、更ニ滑空班ノ創設、圖書室ノ充實、中絶久シカツタ端艇部ノ復活計畫等ヲ始メ意義深キ各種ノ記念事業ヲ以チマシテ此處ニ一大飛躍的發展ヲ遂グルコトニ相成ツタノデアリマス。而シテ今ヤ我ガ國ハ大東亞建設ヲ目指シテ一大躍進ノ途上ニ在リ洵ニ雄大ナル皇謨ノ下一億一心トナツテ天業翼贊ニ邁進シツヽアルノデアリマス。茲ニ本校九十年ノ歴史ヲ顧ミ創立以來今日ノ發展ニ盡サレタル幾多先輩各位ノ御努力ニ感謝スル共ニソノ心ヲ體シ益々傳統精神ノ發揚顯現ニ努力ヲ致シ以テ邦家教學ノ要旨ニ副ハムコトヲ深ク期スル次第デアリマス。茲ニ御臨席ノ諸賢ニ對シ從來ノ御厚意ヲ謝スル共ニ、更ニ今後一段ノ御支援御鞭撻ヲ賜ハラムコトヲ御願ヒシテ止ミマセヌ。以上蕪辭ヲ陳ネテ本日ノ式辭ト致シマス。

昭和十七年五月九日

和歌山縣立耐久中學校長　瀧田謙治

告辭

本日茲ニ耐久中學校創立九十周年ノ式典ニ列シ聊カ所懷ヲ述ベテ祝意ヲ表スルヲ得マスコトハ私ノ最モ欣快トスルトコロデアリマス。

畏クモ曩ニ宣戰ノ大詔ヲ拜シ爾來五箇月大稜威ノ下戰果ノ赫々タル方ニ史上空前ノ驚異デアリマシテ一億國民ノ責務愈々重大ナルヲ痛感サルル際恰モ本校創立九十周年ヲ迎ヘ茲ニ本校創立ノ精神ニ思ヲ致シ之ガ興隆ニ寄與セラレシ先輩學友ノ靈ヲ弔ヒ輝ク明日ノ建設ヲ期セラルヽハ意義洵ニ深ク慶祝ニ堪ヘナイトコロデアリマス。本校ハ嘉永五年濱口梧陵翁等先覺ノ偉人相謀リテ文武ノ修錬ヲ重ネ幕末維新參劃ノ人材育成ヲ期シテ創立セラレタノデアリマス。爾來星霜ヲ經ルコト九十年時ニ校運ノ消長ハ免レナイ所デアリマシタガ概シテ蕩々タル向上ノ一途ヲ辿リ多大ノ貢獻ヲ致サレマシタコトハ一ニ關係各位ノ浚我熱誠ノ然ラシムル所デアリマシテ洵ニ感佩ニ堪ヘナイ次第デアリマス特ニ明治後半ヨリ大正初期ニ及ブ間嘖々タル校名海内ニ遍ク遠ク他府縣ヨリ笈ヲ負ヒテ來ル者尠カラズ幾多名士ノ足跡ヲ印シマシタコトハ燦トシテ長ク耐久校史ニ光彩ヲ添フルモノデアリマス。思フニ教育ノ根本ハ人ニアリ師ニアリマスコトハ多言ヲ要セズシテ既ニ明カナルトコロデアリマス。本校ハ創立者ノ類稀ナル人格ヲ根柢トシテ長キ傳統ト歴史ノ誇ニ輝ク校風ノ樹立ニ努メ文武兩道師弟同行ノ創立精神ヲ以テ貫徹シ教職員生徒父兄一體トナツテ我國教學ノ殿堂ヲ建設サレツツアリマスコトハ洵ニ欣快ニ堪ヘナイ所デアリマス。時ニ頭上ニ敵機ノ窺フアリ大東亞建設洵ニ雄大ナレドモ前途又實ニ多難ナルモノガアルノデアリマシテ皇國ノ興隆ハ一ニ繋ツテ今次戰爭ノ必勝完遂ニアルノデアリマス。而シテ國家隆昌ノ負荷ノ大任ハ青少年學徒ノ雙肩ニアルノデアリマシテ青少年ノ大イナル名譽デアルト共ニ重大ナル責務タルヲ痛感スルノデアリマス。宜シク此ノ機ニ於テ校友師弟長幼位序ヲ正シ協力一體トナリ益々校運ノ進展ニ努メ以テ歴史的聖業ノ達成ヲ扶翼シ奉ランコトヲ切望スル次第デアリマス。茲ニ一言述ベテ告辭ト致シマス。

昭和十七年五月九日

和歌山縣知事正五位勳四等　廣瀬永造

祝辭

本日茲ニ和歌山縣立耐久中學校創立九十周年記念祝賀式ヲ擧行セラルルニ當リ一言囑スルトコロヲ述ベテ祝辭ニ代フ。惟フニ本校ノ前身タル和歌山縣私立耐久中學校ノ設立ハ明治四十一年ニシテ更ニソノ源ニ溯レバ實ニ嘉永六年濱口梧陵翁ノ廣村ニ於ケル稽古場ヲ以テソノ濫觴トス。爾來コヽニ九十年時勢ノ變遷ニ伴ヒ校運時ニ消長ヲ免レザリシト雖モ設立者タル濱口家ノ犧牲的努力ト歴代當事者ノ協力提攜トニ依リ漸次堅實ナル發展ヲ遂ゲ地方文化ノ中心トシテ幾多有爲ノ人材ヲ出シ國運ノ進展

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 9

ニ寄與セントコロ極メテ大ナリ。而シテ濱口梧陵翁ノ人格的感化ト私立耐久中學校初代校長寶山良雄氏ノ薫督經營トハ本校ノ歴史ニ特筆スベキトコロニシテ隱微ノ間ソノ教育精神今ニ傳ハルモノアルハ偉ナリト謂フベシ。

今ヤ御稜威ノ下皇軍ノ奮鬪力戰ニ依リ早クモ西南太平洋一帶ノ敵ヲ掃蕩シ國民齊シク感奮興起總力ヲ結集シテ興亞ノ大業完遂ニ邁進シツツアリト雖モ戰局ノ前途尚遼遠ニシテ內外倍々多事多端教育ノ刷新振興ニ須ツコト愈々切ナリ此ノ秋ニ方リ茲ニ本校創立九十周年ノ盛運ヲ迎ヘテ記念祝賀式ヲ擧行シ先人ノ德ヲ頌シテ報本反始ノ至情ヲ披瀝シ彌々創立精神ヲ顯揚シテ將來ノ發展ヲ期セントスルハ意義深ク洵ニ慶賀ニ堪ヘザルナリ冀クハ教職員各位生徒諸子皇國ノ歴史的使命ト本日ノ式典ノ意義ニ鑑ミ師弟一心彌々各自本分ノ存スルトコロニ精進シ以テ國運隆昌ノ根基ニ培フアランコトヲ。

昭和十七年五月九日

文部大臣　橋田邦彦

祝辭

本校ハ開校茲ニ九十年彌々興隆シテ本日記念ノ盛典ヲ擧行セラル。洵ニ慶賀ノ至ナリ。抑々耐久學舍ハ鄕國ノ先輩ニ於テ幕末世相ノ混沌タルニ鑑ミ憂國愛鄕ノ熱情ヲ以テ嘉永年間之ヲ創設シ專ラ鄕黨子弟ノ爲ニ文武兩道ノ研磨ニ資セントセシモノナルガ明治ニ入リテハ中等學校トシテ主力ヲ文教ニ置キ明治三十九年文部省ノ認可ヲ得テ時代ノ進運ニ應ジ來リタル所逐年功績擧ガリ後縣營トナリ今日ニ至レルモノナリ。而シテ其間累代高德有能ノ校長及ビ諸先生ヲ仰ギテ其薫陶芳シク依テ國家有爲ノ人士ヲ輩出セシコト枚擧ニ遑アラズ。斯クテ本校ノ聲明ハ期セズシテ四隣ニ昂揚セラルルニ至レリ。邦家ノタメ欣幸ニ堪ヘザルト共ニ泉下ノ諸先輩又以テ瞑スベキナリ。

今ヤ御稜威ノ下皇軍ノ勇武ハ汎ク太平洋ノ陸海空ヲ制壓シテ米英ノ慴伏期シテ俟ツベク大東亞建設ノ大理想ハ着々顯現セラレントス寔ニ感激ノ極ミナリ。斯ノ時ニ當リ人材ノ要請愈々緊切ナルモノアリテ教育ノ使命益々重大ナルヲ感ゼシム。茲ニ於テカ我ガ耐久中學校ニ脈々トシテ傳統セル盡忠報國ノ日本精神ハ高度ニ發揮セラレ以テ國運ノ進展ニ寄與セラルルコト一層深厚ナルベキヲ期待シ擧校一團ノ健祥ヲ祈ツテ遏マズ。

聊カ蕪辭ヲ連ネテ以テ祝辭トス。

昭和十七年五月九日

濱口儀兵衛

祝辭

本日縣立耐久中學校創立九十周年記念式擧行ニ當リ、席末ニ列シ一言祝意ヲ表スルハ洵ニ光榮トスル所ナリ。惟フニ九拾年ノ星霜ハ時代ノ推移ニ於テ文運ノ發達甚ダシキ今日本校ガ創立ノ當初ニ回想スル時、實ニ隔世ノ感ナキ能ハサルナリ。其ノ起源ガ嘉永五年偉人濱口梧陵時勢ニ鑑ミル所アリテ廣村田町ニ稽古場ヲ創設文武ノ道ヲ修講セラレシニ初マリ、其學風耐久社ト稱シ學舍ノ名聲ハ天下ニ汎ク當時其局ニ當レル人士ガ如何ニ善ク謀リ善ク治メテ責務ノ實施ニ努メラレタルカハ蓋シ想像ニ餘リアリ。明治四十一年中學校令ニ準シ私立耐久中學校ト改稱シ大正九年校主濱口吉右衛門氏等ノ崇高ナル淨財ヲ得テ縣營ニ移管セラレ爾來歴代ノ校長職員諸氏ニ其ノ人ヲ得、常ニ組織ノ改善ト內容ノ充實ニ努メ醇厚ナル學風ハ日ニ張リ月ニ興リ本校教養ノ趣旨ヲ體シテ廣ク社會ニ出デ斯界ノ重鎭トシテ銳意邦家ノ爲貢獻スル所大ナリ。今ヤ我國ハ戰時下ニアリ悠久二千六百年脈々トシテ我大和民族ノ血管ニ流レ來ツタ君國ニ殉ズル大和魂ハ御稜威ノ下皇軍ノ赫々タル大戰果トナリ東天ニ旭日ノ昇ル感ヲ覺ユルト雖モ尙節義廉恥ノ志操ヲ涵養シ、戰鬪ニ增產ニ皇國不敗ノ體制確立ヲ要請スルハ極メテ緊要事ナリ。眞ニ一億一心教養ニ實力アリ時局ヲ認識セル人材ヲ待望スルヤ誠ニ切ナルモノアリ。冀クハ本校職員並ニ生徒諸子ハ光榮アル歴史ニ鑑ミ一大覺悟ヲ以テ使命ノ重大ナルヲ省ミ夙夜教養研修ニ努メ國家ノ要望ニ副ヒ內ハ以テ錦上花ヲ添フルニ至ラシメ外ハ以テ範ヲ全國ニ示サレンコトヲ。一言以テ祝辭トナス。

昭和十七年五月九日

縣會議員　二澤永信

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

祝辭

風薫ル本日茲ニ本校創立九十周年記念式典ヲ擧行セラレソノ末席ニ列スルヲ得マシタ事ハ私ノ最モ光榮トスルトコロデアリ且ツ慶祝ノ至ニ堪ヘヌ次第デアリマス。

懐ヘバ安政三年吉田松陰先生ガ松下村塾ヲ開カレ僅カ十坪足ラズノ荒屋デ尊王ノ大義ヲ講ゼラレ幾多明治維新ノ元勳ヲソノ門カラ生出シマシタガソレニ先立ツコト四年嘉永五年ニ本縣ノ先覺者否我ガ國教育界ノ先覺者タル濱口梧陵翁等ニヨツテ既ニ本校ノ前身耐久社ガ創設セラレタノデアリマス。當時ハ黑船ノ來航ニヨリマシテ海内騒然物情紛々タル有様デアリマシタガ梧陵翁ハ夙ニ江戸ニ出テ諸名士ト交リ常ニ海外ノ事情ニ意ヲ用ヒ渡航シテ親シクソノ政治文物ヲ知ラウトシテソノ志ヲ得ズ翻ツテ學校ヲ興シ文武ヲ勵マシ人材ヲ養成スル事ヲ以テ急務トシ耐久社ヲ開カレマシタ事ハ全ク松陰先生トソノ軌ヲ一ニシタモノデアリマシテ、シカモ松下村塾ニ一歩先ンジテキルニ於キマシテハ梧陵翁ノ先見耐久社ノ由緒ハ誠ニ無雙トイフベキデアリマス。ソシテソノ後耐久學舍トナリ私立耐久中學校ヲ經テ縣立ノ現在ニ至ルマデ繼承實ニ九十年ソノ間多クノ名流傑士ヲ輩出シテキル過去ヲ考ヘマス時、本校ハ全ク天下ニ冠絶スルモノト言ハナクテハナリマセヌ。尚且ツ本年四月瀧田現校長ヲ迎ヘ校風益々揚リ學級増加ノ實現ヲ見本校ノ前途マタ洋々タルモノアルハ本縣教育界ノ爲ニモ誠ニ喜バシキ限デアリマス。

アヽコノ比類ナキ歴史ヲ戴キ且ニ松籟ヲ開キタ之ニ濤聲ヲ耳ニシテ常ニ梧陵翁ノ偉績ヲ永遠ニ物語ル長堤ヲ望ム此ノ清明ノ境ニ文武ノ修錬ニ力ムル生徒諸子ノ幸何モノカ之ニ過グルモノガアリマセウカ。

時恰モ有史以來ノ時局ニ直面シ教フル者學ブ者共ニソノ責務ノ重大ナル事ヲ痛感スルノデアリマス。願ハクハ職員各位愈々一致團結シテ教育報國ノ實ヲ擧ゲラレ生徒諸子マタ相責メ相補ケ以テ聖恩ニ應ヘ奉ルヤウ皇國民トシテノ錬成ニ努力セラレンコトヲ希ツテ已ミマセヌ。

茲ニコノ意義深キ盛典ヲ慶賀シ縣下中等學校長ニ代リ聊カ所懐ヲ述ベテ祝辭トイタシマス。

昭和十七年五月九日

和歌山縣立箕島商業學校長　喜多村利雄

祝辭

若葉薫ル本日ヲトシテ茲ニ耐久中學校創立九十周年ノ式典ヲ擧グルニ當リ郡内町村長ヲ代表シ謹ンデ祝意ヲ表スル次第デアリマス。

抑モ本校ハ嘉永ノ昔國家内外ノ情勢極メテ多難ナルノ時濱口梧陵翁ハ興國ノ基ハ教育ニ在リトノ炯眼ニヨリ耐久社ノ名ノモトニ本校ヲ創立セラレタノデアリマス。爾來校運日ニ進ミ郡内ハ素ヨリ汎ク縣下ノ子弟ハ笈ヲ負ウテ本校ニ學ビ克ク創立ノ精神ヲ体スル幾多有爲ノ人材ガ輩出シ今日社會ノ各部面ニ活躍シツツアルノハ獨リ郡内ノ喜ビタルノミナラス國家ノ爲洵ニ慶賀ニ堪ヘザル所デアリマス。今日國家非常ノ時局ニ當リ益々人材ヲ求ムルノ時本校九十年ノ永キ歴史ヲ回顧スルノ祝典ヲ擧ゲラルルハ洵ニ意義深キコトト思フノデアリマス。願ハクハ本校職員生徒ハ素ヨリ郡民一体トナリ克ク創立ノ精神ヲ体シ一ハ國家ノ期待ニ添ヒ一ハ本郡發展ニ貢献スルノ有爲ノ人材ノ輩出センコトヲ祈ル次第デアリマス。茲ニ一言述ベテ祝辭ト致シマス。

昭和十七年五月九日

有田郡町村長代表　田栖川村長　河内清吉

祝辭

本日和歌山縣立耐久中學校創立九十周年記念式典ヲ擧行セラルヽニ當リ私此ノ席末ニ列スルノ光榮ヲ得マシタコトハ寔ニ欣快ノ情ニ堪ヘマセン。茲ニ謹ンデ滿腔ノ祝意ヲ表スル次第デアリマス。惟フニ本校ハ幕末天下騒然タルノ時先見ノ明透徹セル先覺者ノ憂國ノ至誠逝リテ創立セラレタルモノニシテ爾來星霜茲ニ九十周年ノ光輝アル歴史ヲ築イタノデアリマス。其間幾多ノ變遷ヲ經タリト雖モ脩文錬武ノ創立精神ハ其ノ名モ高キ耐久ト共ニ脈々トシテ一貫シ幾多有爲ノ人材ヲ育成シテ祖國ニ捧ゲ以テ今日ノ隆昌ヲ致シタノデアリマシテ邦家ノ爲寔ニ慶賀ノ至リニ存スル次第デアリマス。翻ツテ我ガ有田郡ニ於テハ學制頒布以來幾多小學校ガ創立セラルヽヤ、各々本校經營ノ成果ニ學ビ其ノ教ヲ請ヒ以テ邦家教育ノ伸展ニ努力シ來ツタノデアリマス。本校亦自校ノ使命ヲ果スト共ニ常ニ之ト相提携シテ率先連絡指導誘掖ノ勞ヲ吝ムコトナク鄕土教化ノ中心トシテ育英ノ道

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 9

ニ盡瘁セラレタルハ齊シク鄉黨ノ認メテ感謝スルトコロデアリマスト共ニ其ノ美果ハ蔽フベカラザル盛事トシテ我等ノ最モ誇トスルトコロデアリマス。

今ヤ皇國多事多難ナリト雖モ顧古ノ一大飛躍ノ秋ニ際會シテキマス。本日ノ盛典ニ臨ミマシテ愈々みたみノ使命重大ナルヲ痛感致シマスト共ニ本校創立者ノ尊キ憂國ノ意圖ニ思ヲハセテ新タナル感謝感激ノ念ニ燃エル次第デアリマス。

希クハ本校傳統ノ精神ヲ堅持シテ愈々校風ヲ昂揚シ益々校運ノ隆昌ナランコトヲ祈念シテ祝辭ニ代ヘル次第デアリマス。

昭和十七年五月九日

有田郡國民學校代表　裏辻佐右衛門

祝辭

本日耐久中學校創立九十周年ノ記念式典ヲ擧行セラルルニ當リマシテ私モソノ席末ニ列スルノ光榮ヲ得マシタノヲ深クヨロコビトスルモノデアリマス。惟フニ嘉永五年我ガ國ノ內外共ニ危急存亡ノ秋ニオキマシテ本村ノ大先覺者デアリマス濱口梧陵濱口東江翁並ビニ岩崎明岳翁等ノ卓識ニ依リ地方人士教學ノ必要ヲ唱道セラレマシテココノ風光明媚ナル廣村ノ地ニ耐久學舍ヲ創設セラレタノデアリマスルガ爾來幾變遷ヲ經テ縣立ニ移管サレマシタト雖モ鄉土人ノ當校ニ對スル思慕ノ情ハ吾ガ校トシテノ親シミヲ持チ我ガ先賢ノ德ヲ憬仰スルニ慈父ヲ以テシ當校創設ノ精神ハ今尙嚴トシテ校風ノ上ニ存スルノヲ欣快トスルモノデアリマス。創設以來茲ニ九十年縣下廣シト雖モ未ダカツテソノ古キヲ護ラズ創設ノ精神ノ存スル所愈々ソノ重キヲ加ヘツツアルノデアリマス。其ノ間幾多ノ知名ノ士ヲ出シ今次事變以來靖國ノ神ト稱ヘラレル軍神ヲ出シ尙且ツ大陸ノ野ニ山ニ海ニ空ニ活躍ヲツヅケツツアル士ヲ出シタノデアリマス。

而シテ敎學ノ衝ニ當ラレル職員各位ハ日夜勵精ソノ校風彌高キニ努力セラレ、今日稀ニ見ル薰化ヲ樹立セラレタノデアリマス。新綠ハ旭光ニ映エ生活發展ノ姿ハ將ニ古キ歷史ト傳統ニ生キル耐久中學校ノ前途ニ比スベキデアリマス。

今ヤ我等ハ大東亞戰ノ眞只中ニアリ波濤萬里ノ洋上ニハ興亞ノ日章旗ガ燦トシテ翻ツテ居リマスガコノ有史以來ク國難タル人士ヲ輩出セシメルコトガ今日ノ盛典ヲ迎ヘタ當校ノ重大ナ責務ダト存ズルノデアリマス。今日コノ榮アル盛典ニ列スル光榮ヲ得マシタノデ聊カ蕪辭ヲ述ベマシテ祝辭ト致シマス。益々當校ノ發展ヲ祈ツテ止ミマセン。

昭和十七年五月九日

廣村長　岩崎楠二郎

祝辭

春光熙々トシテ生氣天地ニ盈ツルノ秋本校校齡滿九十ヲ迎ヘ茲ニ本日ヲトシテ祝賀ノ記念式典ヲ擧ゲラル洵ニ昭代ノ一大慶事ニシテ又實ニ地方文化振興ノ一大瑞機タリ眞ニ恭賀ニ堪ヘザルナリ。

惟フニ本校ハ嘉永五年國士濱口梧陵翁時勢ヲ達觀シ憂國ノ至情抑ヘ難ク人材育成ヲ以テ刻下ノ急務トナシ學舍ヲ建テテ親シク子弟ノ薰化鍊成ニ竭シタルニ創マルトイフ。

爾來幾多ノ變遷消長アリタリト雖モ其ノ立發ノ精神ニ至リテハ綿々トシテ儼存シ歲ヲ閱スルコト九十有一年實ニ本邦稀ニ見ル最古最尙ノ校歷ヲ有スルハ蓋シ皇國斯界ノ一大至隆ナリト謂フベキナリ。

宜ナル哉歷代ノ學校當局ハ齊シク校祖創業ノ精神ヲ体シテ軀身努力終始一貫シテ光アリ敎職ノ諸賢又協心戮又鋭意學校中心ノ活躍健鬪其實績ヲ揭ゲツツ勢アリ地方人士ノ期待信望又日ニ厚ク常ニ偉大ナル後援ヲ得テ力アリ、加フルニ同窓先輩ノ諸士出デヽ地方鄉黨ノ中堅トナリ將又國家社會ノ權威トシテ愈々旺ナルヲ臻シ以テ今日ノ盛運ヲ見ルニ至レルハ皇國ノ爲メ欣慶措ク能ハザル所ナリ。

夫レ樹養フ所アレバ則チ根本固クシテ枝葉繁ク棟梁ノ材成ル水養フ所アレバ則チ泉源壯ニシテ流派長ク灌漑ノ利博シ是レ豈ニ啻ニ樹ト水トノミナランヤ校祖ハ夙ニ皇國青年ノ心田開拓ヲ重視シ、純眞豁達ヲ經トシ質實剛健ヲ緯トシ專ラ實力ノ錬成ニ力メ國家有爲ノ材タラシメンコトヲ期シ以テ校是トナセリト云フ。之レ則チ皇國敎化ノ要諦ニシテ歷代此ノ校是ヲ守リ親シク青年薰化ノ實ヲ揚ゲ愈々肇國ノ本義ニ則リ皇謨翼贊ノ大道ヲ培ヒテ餘念ナク以テ今日ノ大ヲ成スニ至リシナリ。輪奐必ズシモ壯ナラズト雖モ師弟ノ精魂一德一體毅然トシテ風ヲ成シ母校同窓又渾然一如ニシテ一大家族ヲ成シ正氣全校ニ滿チ大雅ノ風尙又四方ニ薰ズ。嗚呼是レ本校ガ特ニ有スル眞健美ノ極致ニシテ傳統九十年ノ校風燦トシテ敎國ノ上ニ輝キ耐久永遠ノ祥運期シ

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

テ待ツベキナリ豈ニ欣然タラザルヲ得ンヤ。然リト雖モ刻下我國ハ有史以來未曾有ノ大難局ニ直面シ一億一心奉公ノ至念ニ燃エ健鬪勇躍以テ大義ノ實ヲ揚グベキ最強最張ノ秋ナリトス然レバ則チ本日ノ盛儀ハ一ハ以テ創業先德ノ鴻績ニ酬イ、一ハ以テ地方文化進展ノ上ニ淬礪ノ誠ヲ竭シ恭シク神威ニ應ヘ聖慮ニ副ヒ奉ランコトヲ期セザルベカラザルナリ。不肖幸ニ曾テ本校職員タリシ故ヲ以テ此ノ盛典ニ列スルヲ得光榮極リナシ、茲ニ謹ンデ本校ノ彌榮ヲ壽ギ以テ今日ノ祝詞ニ代フ。

昭和十七年五月九日

舊職員　松扉得悟

祝辭

本日茲ニ朝野貴顯ノ賁臨ヲ仰ギ母校九十周年記念ノ祝典ヲ擧行セラル。

我等嘗テ此ノ痒校ニ學ブニ諄々トシテ校史ノ遙ケキヲ說カル。而シテ此ノ佳典ニ列スルヲ得タリ感慨無量言フベキヲ知ラズ。抑々我校ノ創立ハ嘉永五年ノ古キニアリ時方ニ內ニ維新ノ大業ヲ萠シ外ニ米露ノ我ヲ窺フアリ、誠ニ內ニ積ミ外ニ備フル時ナリシナリ。此ノ秋憂國ノ志士濟口梧陵翁ハ同志東江明岳二先生ト地ヲ南海ニ臨ムヲ選ビ育英ノ事業ヲ興サル誠ニ大志鴻圖ト云フベキナリ。爾來其ノ志ヲ承ケ其ノ業ヲ繼ギ今日ニ到ル。而シテ現時亦內ニ翼贊ノ大業確立セントシ外ニ妖氣ヲ拂ヒ八紘ヲ掩ヒテ上ノ宇トナサントス。而モ當時我ニ砲口ヲ擬シタル洋夷ノ國ハ却リテ我ガ國威ノ前ニ慴伏ス。ア、何タル快事カ地下ナル梧陵先生モ亦快哉ヲ叫ビ給フハ必定ゾ。既ニ蕪草ハ刈リ地ハ拓カレタリ。今ゾ創立ノ大精神ヲ華ト咲カセン今コソ其ノ實ヲ邦家ニ獻ゲム。是天下ノ期スル所ナリ。吾等幸ニシテ同窓ノ席ヲ汚ス。以テ責務ノ一端ヲ擔フヲ喜ブ。本日ノ盛典ニ列シ慶祝ノ念ヲ禁ズル能ハザルト共ニ自ラモ相勵マシ以テソノ本ニ報ユルアラントス。

一言述ベテ祝辭トナス。

昭和十七年五月九日

耐久中學校校友會長　久保清太郎

祝詞

本日茲ニ耐久中學校九十周年記念ノ式典ヲ擧行セラルルニ當リ席末ニ列スルヲ得タルハ無上ノ光榮トスル所ナリ。

抑々本校ハ嘉永ノ昔內外ノ物情騷然タルノ秋梧陵、東江、明岳ノ三先覺ニヨリテ創立セラレタル稽古場ヲ濫觴トシ爾來時勢ノ推移ニ伴ヒ幾多ノ變革ヲ經テ今日ノ隆運ヲ見ルニ至リタルモノニシテ此間固ヨリ多少ノ消長アリタリト雖モ而モ修文練武以テ國ニ盡スノ創立精神ハ脈々トシテ貫流シ明眉ナル環境ト當事者ノ獻身的努力ニ依リ幾多有爲ノ人材ヲ輩出シ國家社會ニ貢獻シツヽアルハ眞ニ慶賀ニ堪ヘザル所ナリ。

今ヤ帝國ハ肇國ノ大精神ニ基キ世界新秩序ノ建設大東亞共榮圈ノ確立ニ邁進シツヽアリテ內外ノ情勢ハ本校創立ノ當時ニ髣髴タルモノアリ子弟ノ敎育ヲ本校ニ託セル吾等父兄タルモノ須ク此ノ崇高ナル創立精神ニ則リ國家ノ要望ニ對ヘ得ベキ人材ノ養成ニ協力シ九十年ノ祝典ヲ更ニ百年ニシ之ヲ二百年ニシテ子々孫々本校ノ榮譽ヲ永遠ニ繼承シ校運ノ進展ニ寄與スベク一段ノ努力ヲ輸サズンバアル可ラズ、聊カ所信ヲ陳ベテ祝辭トス。

昭和十七年五月九日

縣立耐久中學校父兄會長　川口彌兵衛

祝辭

遙カニ創立九十周年記念式典ヲ祝シ校運ノ御隆昌ヲ禱ル。

昭和十七年五月九日　和歌山縣立新宮中學校長　坪野賢三

謹而貫校創立九十周年記念式ノ御盛典ヲ祝シ奉ル。

昭和十七年五月九日　縣立和歌山高等女學校長　谷口久雄

傳統ニ輝ク耐久中學校創立九十周年記念ノ御盛典ヲ祝シ校運ノ益々御隆昌ナランコトヲ遙ニ祈ル。

昭和十七年五月九日　德島縣立美馬高等女學校長　佐藤安一

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

祝辭

本日茲ニ長官閣下ヲ始メ貴賓各位ノ御臨場ヲ忝ウシ校友父兄各位ノ御來場ヲ得マシテ本校創立九十周年ノ祝典ヲ擧行サレマスコトハ生等六百ノ健兒一同衷心ヨリ光榮ト歡喜ニ存ズル次第デアリマス。殊ニ國ヲ擧ゲテ大東亞戰ノ眞只中ニアルコノ時ニ於テカウシタ盛儀ヲ擧ゲラレマスコトハ偏ヘニ御稜威ノ然ラシムルトコロト國民的感激ニ燃エマスト同時ニ直接御協力下サイマシタ多クノ方々ニ對シテ誠ニ感謝ニ堪ヘマセン。

抑々本校ハ今ヲ去ル九十年ノ昔時恰モ幕末騷然タルク際當時既ニ時勢ヲ達觀サレタ英傑濱口梧陵先生ガ濱口東江、岩崎明岳ノ兩先生ト相謀リ廣田町ニ學舍ヲ建テラレタノガソノ源デアリマス。而シテソノ期スルトコロハ眞ニ國ヲ愛スルノ士ヲ養成サレントシタノデアリマス。スベテノ事ハソノ始メガ大切ダトハ生等ノ日頃敎ヘラレマシタトコロデスガ我等ガ學舍ハカクノ如ク今ヨリ殆ド一世紀ニ近キ昔ニ於テ既ニ皇國民ノ錬成ヲ目標トシテ建テラレタノデアリマシタ。カクノ如キ光輝アル創立精神ヲ持チマス生等ノ歡喜ハ眞ニ絶大ナルモノガアリマス。爾來幾星霜地モ三轉シテ現在ノ地ニ移リ校史モ亦幾變遷今日ニ至リマシタ。ソノ間當局ノ方々ハジメ地方ノ有志ノ方ノ御高配御援助ニヨツテ濱口容所先生カラ歷代校長先生ソノ他ノ諸先生ガ身ヲ以テ御盡力下サイマシタソノ結果多クノ國家有爲ノ人材ヲ輩出致シ遂ニ今日ノ如キ盛時ヲ見ルニ到ツタノデアリマス。アヽ悠久九十年ノ歷史高遠雄大ナル創立精神光輝アル傳統生等六百ノ健兒ハコノ由緒アル學舍ニ學ブ身ノ感激ヲ今更ナガラ感ズルノデアリマス。而シテ又一度思ヒヲメグラシテミマスト今ヤ帝國ハ大東亞戰ノ眞只中ニアリ校祖濱口梧陵先生ガ創立當時愛ヒヲ致サレマシタ外敵擊滅ノ爲ニ蹶然立ツテキルノデアリマス。コノ秋生等健兒六百一人一人ハ立ツテ祖國ノ急ニ思ヒヲ致シ本分ヲ恪守シ以テ梧陵先生ニオ應ヘ致サネバナリマセン。

榮アル九十年ノ歷史ト傳統トヲ守リ御臨席ノ皆樣ノ御指導御援助ニ依ツテ生等六百健兒ハ校長先生ハジメ諸先生ノ御薫陶ヲ受ケテ立派ナ皇國民ニナル覺悟デアリマス。イササカ生等覺悟ヲ述ベテ祝辭ト致シマス。

昭和十七年五月九日

和歌山縣立耐久中學校生徒總代　和中次郎

記念講演

獨逸の復興と勝利

土岐政藏

一

母校の創立第九十周年記念祝典に際し、記念の講演を申上げる事は私の光榮とする處であります。私は十年前八十周年記念祭に於ても記念講演をなしましたので、二回もこの光榮に浴する事は同窓の方々に對してもいさゝか相すまない心地がするのでありますが、今回は實は他に講演者が豫定されてあつた樣で、その方が御都合が惡くなつたので、急に私にこの講話をなす樣にとの委員からの命令がありました。夫で私として一寸當惑したのですが、同窓の方々が先般來本記念祭の爲に連日寢食を忘れて御盡力下されるのを拜見しては、只々母校の爲に微力を致さねばならないと存じまして、敢てこの壇上に立つた次第です。今日幸ひにも一時御出演を危まれた田中武雄先輩が御出席になりまして後程諸君に御話をなされますので、私はその露拂ひとしていさゝかの御役を果したく存じます。暫く御淸聽を御願ひ申します。

二

私の今日のお話の題は只今校長樣から御紹介の通り「獨逸の復興と勝利」と云ふのでありますが、第一次歐洲大戰後、手も足

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 9

も出なくなつた獨逸國が、勇猛奮起して僅に二十年にして國力を恢復し、今回の大戰に赫々たる勝利を見つゝあるが、この間の消息を御話し申上げ、非常時局に直面せる我等のとるべき態度に就て他山の石としたいと存じます。

御承知の通り第一次歐洲大戰は一九一四年(大正三年)に始つて一九一八年に終つたのでありますが、獨逸國は戰鬪に勝つたに拘らず國内の休制整はず、物資が不足し、物價が騰貴し、ユダヤ人の策動あり、共産黨の横行あり、加之、食糧不足に惱まされ、國民は飢餓に瀕し、遂に戰敗國となり、ヴェルサイユ條約によつて、領土の一割三分は割讓を餘儀なくされ、植民地の全部を失ひ、從つて人口は舊領六百五十萬人、植民地千二百萬人を失ふ事となりました。又重要なる資源として、小麥三割、馬鈴薯四割、石炭六割、鐵八割をとられ、船舶も九割迄奪はれ、海軍は全滅、陸軍は十萬以下に制限され、加之賠償金として三十年間に千三百二十一億圓を完納せねばならぬ事となりました。この媾和條件は英、佛の思ふ通りになつたのでありますが軍事的には全く丸腰となり、領土や資源を奪はれ、經濟上の基礎的條件は全く根柢から覆された事となり、國民は奮激し切齒扼腕したのでありますが、國力の精根盡きて再び立つ能はざるに至つてゐたのであり、國内に革命が起つて如何ともする能はなかつたのであります。

尙いけなかつた事には國論不統一と申すべきか、國民は右翼社會主義派と、左翼社會主義派とに分れ、この中間には中央黨を始めとして多數の政黨あり、至る處流血の慘事を呈するあり、又一九二〇年頃から例のインフレーションが起つた。之は革命によつて民主々義者の素人の政治家が天下をとつたものであるから財政に破綻を來したが、新政府が賴みにするのは紙幣の增發であつて、印刷機械の運轉に期待するのみであつた。晝夜兼行で紙幣を印刷し發行する、物價が昂騰する、紙幣の印刷で追付かんので、紙幣や切手の金額の上に大々な數字の印刷をする樣になつた。一九二三年には物價は所謂天文學的數字を呈するに至つた。銀行預金を持つた人々はその預金はみんな無價値のものとなつた。主人に死別した或未亡人は、主人の生前の契約に從ひ保險金の受領に保險會社に行つた處、受取つた金よりも電車賃の方は高かつたとか、二人の兄弟が父から五千マークづゝ分けて貰つてゐたが、兄は律義で之を預金してゐたが、弟が之で酒をのんでしまつた。處が兄が折角の預金はインフレーションの爲に失つたが、弟の方はビン代が相當の貨幣に變つたと云ふ挿話があります。こんな笑ひ事でない悲劇が至る處あつた。尤もインフレーションによつて一時的な景氣が來ます。併し夫は本當の景氣ではなくてアルコール中毒患者が酒をのんで

一時的の興奮を得るのと同じ樣で、その後に來るものは恐ろしいのである。こんな風船玉の樣な景氣が何時迄も續く筈はないのである。

幸ひにして一九二三年十月にレンテンマークが樹立され、今迄の十億マークを一マークとなし、やつと安定の域に達し、その翌年更に貨幣制度は確立し落付を見せたのである。この間外貨輸入の途も開け、賠償問題も幾分緩和し、獨逸の經濟は稍々芽を出しかけて來た。その後數年は雌伏、忍從の時代は續いたのである。軍事的には丸腰となつたので、經濟的に國力を伸張せんと努力した。

處がこの頃は戰後の反動時代で、世界的に不景氣はだんだんと深刻になるのであつた。交戰國は何れも戰後の反動から非常な不景氣に陷つたのであるが、米國では實業家連中は率先して戰後の整理に當つたので、景氣の恢復は稍々早かつたのである。其處で獨逸の實業家達も渡米して米國の繁榮の原因を調査研究し、之を參考として景氣恢復策を考へたのであるが、こゝに產業統制によつて獨逸經濟の難局打開を企てたのである。この運動を產業合理化運動と稱へてゐる。この運動は產業合理局の考案に從つて、一業種が一團となつて亂れた產業戰線を整理せんとしたのであるが、行つた事の主なるものは、①材料の研究、②規格の統一、③作業工程の改善、④熱と動力の經濟の改善、⑤科學の奬勵と研究機關の利用、⑥事務の計畫化、⑦原價計算の整備、⑧競爭回避による浪費の節約、⑨作業の專門化、⑩勞力の節約等であつた。

斯の如くして戰後の經濟混亂の後始末がやつと軌道につたのであるが、この所謂產業合理化の結果、失業者は六百萬人を數へるに至り、加之爲政者が農業政策を誤つた爲に外國の安價な食糧が國内に氾濫し、獨逸農民の衰亡日に甚しく、民族の血の源泉たる農民層は崩壞に瀕したのである。

三

この疲弊の後を受けて、ヒツトラーの率ゐるナチス黨が天下をとつたのは、一九三三年の一月であるが、今少しヒツトラー自身について、並にその黨の生成より發展に至る經路を話して見たい。

アドルフ、ヒツトラーは一八八九年四月二十日オーストリアの西端ブラウナウ Braunau と云ふ村に生れた。その父は、南

稲むらの火の館所蔵 渋谷家文書 資料番号 9

ドイツの一介の水呑百姓の子であつた。志を立ててウイーンに至り手細工を習つたが、之に滿足せず二十三歳の時刻苦勤勉の上稅關の小官吏となつた。自分が立身する事が出來なかつたので、その子のアドルフを立派な官吏になる樣に敎育せんとしたが、ヒツトラーは之に反して畫家たらん事を望んだ。この時は人生の方針の岐れ路にある十二歳の頃であつた。處が十三歳の時この父が急病でなくなつた上、ヒツトラー自身は可なり重い肺患にかゝつてゐたので實科學校を退學せねばならなくなり、その母は醫師と相談の末この子を官吏にする事を斷念し美術學校へ入學させようと決心したのであつた。處が不幸にも二年後の十五歳の時に、この母も病氣の爲死んで終つた。そしてこの病氣の爲に僅かな貯蓄も使ひ果してしまつた。十六歳に全財産である行李一個を持つてウイーンに行つて美術學校の入學試驗を受けたが、幸か不幸か之に失敗し、永年持つて來た志望は水泡に歸した。この時から五年ばかりは文字通りの苦難の連續であつて、大工の徒弟となつたり、ペンキ屋の職人となつたりしたのであつた。當時を顧みて曰く「自分の見習大工、ペンキ職人としての自活の五年間は、悲慘と苦痛そのものであつた。苦勞によつて得たパンも飢を凌ぐに充分ではなかつた。この飢こそは一刻も私の傍を離れなかつた伴侶であつた。この時に買つた書物は、この烈しい飢を忍んで買つたものである。一度オペラに行くとその後數日間は飢がつきまとつた。私はこの殘酷な伴侶と闘ひ通したが、この時代に嘗てなき程の勉强をなした。」ヒツトラーの社會問題に對する眼識はこの時代の苦勞の賜であらう。卽ち當時のウイーンは素晴しい富者と甚だしい貧乏とが對立して、殊に下層社會の道德的頹廢が烈しかつたので、彼はその原因を國民的誇りの缺乏にありとなし、社會問題の解決と國民精神の鼓吹との關係を認め、「健全なる社會」を建設する必要を痛感したのである。

彼は二十歳頃になつてやつと一人前の製圖家となり、稱々生活に餘裕が出來たが、不相變社會問題に興味を持續しながらも藝術家としての希望を捨てないでゐた。次で一九一三年の時、ミュンヘンに來たが、この地の氣分は非常に氣に入つて、生活苦と戰ひながらも藝術家としての精進を積んでゐたが、この頃は彼の一生を通じ最も安泰な時であつたと云はれてゐる。

一九一四年に第一次歐洲大戰が勃發して、獨逸に動員令が下つた。ヒツトラーはオーストリアに國籍があつたが、八月三日に獨逸軍に從軍の志願をなし、許されて戰線に送られた。西部戰線に送られる途中、獨逸國の守りたるライン河を渡るに際し「我々はこのライン河を敵國から死守せねばならぬ」と決意した時、無上の感激が胸に迫つたと云つてゐる。

彼は戰線に於て幾度か傳令として活躍したが、一九一六年十月七日リンムの戰で負傷をしてベルリン郊外の陸軍病院に入院した。ここでユダヤ人と共產黨員とは祖國にとつてペスト菌であり寄生虫である事を知つた。

一九一七年三月、再び戰線に立つた。その年には尙勝利の希望が若干あつたのである。處が一九一八年夏、俄然戰局は不利となり、勝利の望みを放棄せねばならなくなつた。この秋、戰線にゐた彼は、イギリス軍の使つた毒ガスの爲に眼をやられ、失明に瀕した爲に、ボンメルンの衞戍病院に送られたが、不思議にも視力が恢復したが、その時彼の眼にうつつたものは獨逸國の崩壞であつた。十一月中旬休戰となり、彼は尙病院にあつて牧師から獨逸帝政の崩壞と共和國の成立をきいた時、非常に憤激したのであつた。その時に云つたのは次の事であつた。

「私は母が死んで棺を送つて以來泣いた事はなかつた。青年時代に運命は苛酷であつたが、却て私は之に對し頑强であつた。永い戰爭の間に戰友が相次いで倒れるのを目擊しては、自分の苦痛を訴へる事は非惡だと考へた。毒ガスの爲に失明の懸念に慄いてゐた時、「汝より不幸なものが澤山ゐるのに何故に女々しく泣くのか」と、良心の苛責は私の耳朶を打つたのであつた。私はぢつと苛酷なる運命を忍んで來た。だが今と云ふ今、どうして泣かずにゐられようか、この祖國の最大の悲運に際會して、今こそ一切の個人的苦惱が何でもない事を知つた。一切が無駄となつた。あらゆる犧牲も窮乏も飢渴も、二百萬人の死も總ては無駄となつた。之こそ一國の破廉恥な裏切者の仕業である。」

斯の如く獨逸は共產黨の手に陷ちた事は彼にとつて耐へ難い汚辱であつた。こゝで彼は自己の使命を知り、自己の個人的幸福を顧つた過去を一切淸算し、終生政治家として立つ決心をなしたのであつた。

一九一八年から一九一九にかけて軍隊に勤務してゐたが、共產黨の跋扈の爲に不愉快な日が續いたのであつた。處が或日職務上の使命を以て當時新に編成された「ドイツ勞働黨」の會合に臨席し、たまたまその一幹部の「利子奴隷制の打破」と云ふ演說をきいて多大の感動を受け、直に之に入黨し、このさゝやかな運動を大衆運動に育て上げる事を決意した。この時の黨員は彼を加へて七名しかなかつた。この黨こそ彼の只今率ゐる「國民社會主義ドイツ勞働黨」卽ちナチスの前身である。彼は間もなくその首領に推された。

この小政黨が活動を開始した當初は全く慘めなものであつた。演說會を開く毎に彼自身立看板を書き招待券を配布したが、

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 9

聽衆は集らなかつた。併し彼等の不屈の努力は次第に効を奏し、聽衆も次第に殖えて來た。ヒットラーは稀に見る雄辯家であ
る事が判つた。一九二〇年二月二十四日の演說會でやつと始めて百名の聽衆を得た。この席上で例の二十五ケ條の綱領を發表
し聽衆に多大の感銘を與へ、こゝで始めてヒットラーは政治的に認められるに至つたのである。この二十五ケ條の內主なるも
のを擧げて見る。

1、民族自決權を基礎として一切の獨逸人は團結する事。
2、他國民に對する獨逸國民の平等の權利を要求し、ヴエルサイユ條約の破棄を要求する。
3、獨逸國民たり得るものは獨逸人のみとす。ユダヤ人は獨逸人たる事を得ず、外國人として取扱ふ。
4、國家の行政と立法との權利は獨逸國民のみに附與す。各種の官公吏の職は獨逸國民のみに與へる。
5、國家は國民の營業と生活との安全保護を第一の義務とする。國民の生活困難となる時は外國人を放逐す。
6、開戰以後移住せし外國人を放逐す。今後の移住を禁止す。
7、國民は心身を健康ならしむる義務を有す。個人の活動は全体の利益と衝突すべからず。
8、一切の戰時利得の沒收を要求す。
9、高利貸、買占人等公民に對する犯罪者を極刑に處す。
10、國民敎育制度の根本改革、貧困子弟の敎育の國庫負擔。
11、母子の保護、幼年勞働の禁止、体操及びスポーツの義務制による身体の鍛錬。
12、傭兵の廢止、國民兵役の完成。
13、新聞紙の統制
　A、獨逸人による獨逸語新聞。
　B、非獨逸人の新聞に對する金融上の援助を禁止す。
14、不勞所得の廢止。
15、私益に對する公益の優先。

尙他に項目はあるが之を省略する。この綱領を揭げたる後に「黨指揮者は之等條項の實施貫徹の爲必要とあらば生命を捧げ
る事を辭せず」と固き決意を示してゐる。右の項目は各國の政黨に例を見る樣に單なる空手形に終らせる事なく、政權をとつ
た後に於てもその實現に努力してゐる事は尊敬すべき事である。

彼の政治思想は彼の波瀾に富んだ生活から出てゐるものと思はれる。卽ち彼の愛國心の强烈なるは、彼の幼時、ブラウナウ
に於ける愛國書店の主人が一八〇六年佛國の爲に銃殺された物語をきかされてゐた。又民族意識の强いのは、幼時の生活を獨
墺國境に送つたので、國境をなくして同じ民族が同じ國家に統一されん事を常に希つたのである。尙社會問題に透徹した意見
を持つてゐたのは、十五歲にして生活苦と戰ひ、社會諸制度の不備不合理を痛感した爲である。最後にウイーンの生活によつ
て墺、洪國の樣に、多數民族の集合は烏合の衆であつて、墮落の因である、獨逸國は同一血液、同一言語、同一文化の純粹な
る獨逸民族によつて結合されねばならないと云ふ信念を得たのである。

一九二〇年から黨旗として現在使つてゐるハーゲンクロイツを用ひた。この旗の地色の赤は、綱領の社會主義的性質を表は
し、白は國民主義的性質を示し、卐は反ユダヤ主義を表徵したものである。

一九二一年から一九二三年まで、賠償問題がやかましくなつて、國民が憤怒し、賠償反對を標榜するナチス運動に投ずるも
の次第に多くなつた。併し尙この時代は他の政黨との對立鬪爭時代であつた。一九二三年にはミュンヘンにバイエル政府首腦
者と共に國民假政府を樹立したが、裏切者の爲に失敗し、捕へられて禁錮五年に處せられた。併しその翌年十月には出獄し
た。彼の有名なる自傳「我が鬪爭」はこの獄中記である。

一九二八年五月の總選擧に議會に初めて十二の議席を得て、之から始めて議會鬪爭をなす事が出來た。

一九三〇年に賠償問題についてヤング案を受諾するか否かで國論は沸騰したのであるが、ナチスは之に大反對をなした。ナ
チスのヤング案反對は國民から非常な人氣を得て、九月の總選擧には五五七の議席に對し、一〇七の議席を獲得するに至つ
た。この年は、米國の株式市場の暴落に端を發する恐慌は世界的となつて、獨逸に最も强い影響を與へ、不景氣のどん底とな
り失業者六百萬人を數ふるに至つた。ブリューリングを首班とする內閣は無力であつて、國民は右翼國民主義か左翼共產主義
か、何れかを選ばねばならぬ立場に置かれた。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

一九三二年にヒツトラーは大統領の選擧に出馬してヒンデンブルグに敗れたが、その年の七月の總選擧には、二三〇の議席を得て第一黨となり、ゲーリングは議長となつた。

一九三三年一月卅一日、シュライエルの後を受けてナチス黨は組閣したのであるが、この時早くもヴェルサイユ條約の破棄を聲明した。三月五日に國民に信認を問ふ爲に總選擧を行つたが、ナチス黨は絶對多數を得たのである。僅か十四年の間に七名の黨員しかなかつた微弱なる政黨は最大の政黨となつたのである。

仝年四月二日にポツダムに議會を召集し、ヒツトラーは始めて首相として演說を行つたが、「吾に四ケ年の時日を與へよ」と宣言し、產業四ケ年計畫を立て、その說明に、「四ヶ年間に獨逸農民を窮乏から救ひ、且つ失業を徹底的に克服せねばならない。之はあらゆる經濟振興の前提である。政府は獨逸國經濟救濟の偉大なる使命を有すると共に、他面に國家及び地方團体の行政及び財政の改革の任務を有する。この目的を遂行する爲には國家は强い連帶關係を有せねばならない。」と言明した。

四

以上でヒツトラーの生ひ立と、政治的經過について略述したが、之を以て天才的な偉大なる政治家である事が判る。幼時の艱難は彼を玉と爲したのである。而して彼は政治家として國民に約束せる事は必ず實行する人であると云ふ事も判る。

さてこの產業四ケ年計畫に於ては、從來の合理化の名の下で行はれた切詰政策を萎縮政策なりとし、この窮狀を救ふ爲には積極政策をとらねばならぬものとし、產業を振興し、人々に仕事を與へる政策をとつた。その爲には極めて巧妙なる金融政策を立て、多くの公共設備が建設され、失業者が次第に吸收され購買力が增進し、一般に非常に明朗を加へて來た。

この間「指導者原理」「全体主義」の諸原理を基礎とする諸法令、一黨國家の具体化を目標とする諸法令、勞働体制、農業統制、貿易統制に關する諸法令等、多數の法令が續々と發布され、益々國內体制が强化された。

この四ケ年計畫の結果は大要次のものであつた。

1、六百萬の失業者は百萬人に減じた。
2、農民の收入は戰前より增加した。
3、國民所得は四割も增加した。
4、中產階級と手工業者に活氣が出て來た。
5、市町村の財政がよくなつて赤字が減じた。
6、兵役の義務制を實施した。
7、鐵道の復舊、自動車道路の建設が行はれた。
8、州政府を解消し國家を統一し、ナチス黨旗を以て國旗となした。
9、政黨の對立は一切なくなつた。

之を要するに以上の產業四ケ年計畫は歷代內閣の失政の淸算であり、人体に譬へて云ふと極度に疲勞した狀態からの恢復であつた。夫が着々効を奏したのであつた。

一九三六年九月九日のニユルンベルグの黨大會に於て、ヒツトラーは更に第二次產業四ケ年計畫の實施を聲明し、十月十八日この實行をゲーリング元帥に委任した。この第二次產業四ケ年計畫は第一次のものの單なる繼續ではなく、前の消極的なるに對し今度は積極性を大に帶びたるもので、その目標とする處は、①軍需生產力擴充と、②國內自給自足の確立であつた。卽ち再軍備の完成と高度國防國家の確立を志したもので、全く來るべき戰爭の用意と申してよいのである。その具体策としては第一に勞務を統制し、國家的に見て適材を適所に用ふる事に努力し、以て能率の增進を期し、第二に原料の管理を行つて、獨逸自身の化學工業と機械工業とによつて一切の必要原料を獨立せしめる爲に、資源の開發、輸出入の統制、鑛山の開發强制、廢品の回收を行つた。第三に戰爭に附物の物價の騰貴を防止する爲に、一九三六年十一月二十六日に價格停止令を出したり、官註文品の價格形成命令や、簿記を統一せしめ、原價計算方法を統制した。以上の方策は總て第一歐洲大戰に得たる苦き經驗によつて立てたものである。

右の如く戰爭に入る前に軍備は勿論、國內体制を充分に整頓し、物資の自給を計り、經濟を統制して物價の騰貴を豫防し、充分の計畫と準備とをなした上で立つたのである。尙一九三九年秋、戰爭に入るや仝國民の奮起を促して曰く「兵士が戰線に於て戰ふ時に何人も戰爭によつて儲けてはいけない。兵士が戰爭で死ぬるのに何人も銃後でその義務を廻避してはいけない。」

稲むらの火の館所蔵 渋谷家文書 資料番号 9

と。而して之を法文化したのは戰時經濟命令である。之によつて「戰爭に有害なる一切の行爲」卽ち戰爭の遂行を妨げる一切の行爲は、禁錮、懲役より死刑に至る刑罰を課することとし、各項目について規定を設けてゐる。又民族毀害者處罰令を發布して、①戰爭の爲に開放された家屋に侵入して掠奪したものは死刑、②空襲、燈火管制中に、生命、肉体、財産に關し行はれた る犯罪には十五年以上、死刑に至る刑罰を課し、③放火の如き國の抗戰力を減殺したるものは死刑と云ふ風に、どの國にでも見る處の一部の不心得者に嚴罰を以て臨み、その絶無を期したのである。更に獨逸國に於ては戰前に已にパン、肉類、コーヒー、牛乳、石鹸、石炭、被服等について消費統制を行つてゐたが、戰爭に入りてその範圍が擴大された事は勿論である。食糧その他必需品の統制を戰前、尙ものの不足しない間に行つたので、國民は之によつて安心して消費を節約する事が出來た。普通の國でやる樣に應急的な窮乏策でなく、豫備的な貯藏對策であつた。

更に近頃我國に於ても、よく流行する青少年の勞働奉仕の本家は（一說に日本の天理敎の日の寄進は本家であると云ふ人もある。）獨逸であつて、一九三五年六月から之を義務制となし、十八才から二十二歳まで青少年を隊組織し、自動車道路の建設や荒地、湖沼の埋立開墾をし、食糧增産をなし、又一部ナチス自動車奉仕團は軍隊の輸送にも奉仕した。

五

以上の如く戰前から戰爭初期にかけて完全なる戰時体制を作りあげ、國家の總力を戰爭遂行に向ける体制を整へたが、總てがヒットラーが中心で上下之に協力して今日に至つたのである。之によつて充分の準備と自信を以て戰を進捗せしめ、優秀なる戰術と科學兵器とを以て極めて勇敢に戰つて來た。將兵には我大和魂に匹敵する獨逸魂を持つてゐる樣であつて、至る處之を發揮してゐる。開戰後僅か二ケ年にしてオーストリア、チェツコ、ポーランド、ノルエー、デンマーク、オランダ、ベルギー、フランス、バルカン地方を屈從せしめ、約二億の人口を以て對英、對ソの作戰に從事する事となつた。已にソ聯に對しても猛攻を開始してゐるが、今後尙英國に對しても勇敢に戰ふ事であらう。戰局は獨逸にとつて最後の勝利を斷言する事は勿論出來ないが、東亞の日本と提携呼應し、英、米、ッを打倒し、東亞共榮圈に對し西歐の共榮圈の確立に邁進するであらう。

六

以上私は、獨逸國に於ける前大戰の敗戰後、臥薪嘗膽二十年にして今日の大をなすに至つた經路を略述したが、この內には吾々も爲政者も大に參考とすべき事の多きを覺えるのである。今や我國は大東亞建設の途中にあり、皇軍の力闘奮戰至る處赫々たる戰果を納め、版圖は已に本土の何倍かとなり、眞に御同慶の至りであるが、今後の仕事は絶大なものである。只々賴むは自力である。他人の褌で相撲をとつた米、英の敗因をよく考へねばならない。

我が祖國の興隆は諸君の双肩にある。自重自愛を望んでやまない。母校耐久中學校はあと十年で世間に比類なき創業百年を迎へる事となる。その頃は諸君はどんな活動を國家の爲にしてゐられるであらうか。思へば賴もしき限りである。

大東亞建設と青年の覺悟

田中武雄氏

只今御紹介をいたゞきました田中であります。何と御挨拶してよろしいものですか――今朝この祝賀會の式場に入つた時、今から丁度三十二三年前の思出が私の頭に浮んでまゐつたのであります。今此の榮ある本校に學んでゐられる、實に瀑刺たる諸君の壯容に接しまして何ともいへぬ懷しさを感ずるのであります。（場內を見渡してなつかしさう）私は隨分今日まで公私に亘る生活に於て、又學校その他に出て度々お話も致してまゐつたのですが、今日程感激致した事はないのであります。

私が今から三十何年前、丁度皆さんと同じ年輩の頃は、大變な腕白者で、その寄宿舍でも注意人物の方でありました。（笑聲）和中から本校に轉校してまゐりました當時、寄宿舍で逆立ちをすれば、「あ、又田中が逆立ちをやつた」といふわけで、一一先生に屆けられるやうな狀態でありました。その時分から今諸君が帽章につけてゐられる、眞健美の徽章をつけて寶山先生の御薫陶をいたゞいたのであります。余りに懷しいものですから、先刻土岐先生の御講演の間、橫着して高垣君（前校友會長、田中氏と同級）に案內して貰ひましたが、當時この講堂のあの邊が丁度私の四年生の時の教室であつたと覺へて居ります。それからあの校庭で野球もやりましたが、實に原始的な野球をやつたものであります（笑聲）さやうな譯で、一石一草、山河悉く何ともいへない感慨で眺められるのであります。今日母校が九十年の星霜を經て、年々校運隆昌この祝典を擧行せらるゝこと

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

は、耐久中學にとりまして誠に欣びに堪へない所であります。

數日前、私が參りまして何かこの御慶びの席に話をするやうにと、校長先生はじめ五人の方が東京に參られ、是非にといふので、この機會に懷しい皆様にもお目にかゝりその後の學校も見たく、序に私は從來職務上の關係から、滿洲支那等大東亞の各地に關係致して居りますので、これらに就いて「大東亞建設と青年の覺悟」といつた題目で戰感の一端を申述べてみたいと存ずるのであります。

只今世界は、各國全人類を擧げて惱みの眞たゞ中に飛び込んで居ります。言ひかへれば現在までの舊き秩序が崩壞して新しき秩序が生れ出ようとしてゐる。英米中心の勢力、これが崩れて新しい廣域の國家群が世界に幾つか盛り上つて來る。この惱みは世界再建の陣痛だとも言ひ得るものでありませう。然らば舊來の秩序とは一体如何なるものであるかといふに、英米を中心して世界の所謂先進國が、自由通商の制度を立前として、自分の所で工業を興し未開の土地から原料を取つて來て加工し、それを又高く賣りつける。のみならず今日は日本の制壓下になつたが、この大東亞について見ましても、日本以外の支那、ビルマ、印度、マレー、スマトラ、ジヤバ、濠洲等は、殆ど英米その他存在の意義のないやうなポルトガル、オランダの如き何等實力なき國々に依つて占領せられてゐる。その支配下の領域であるからこの狀態で未來永劫にゆかうといふのであります。即ち實力のない者が、印度濠洲カナダ等實力支配の外にある地域をも自分の勢力下であるかの如く振舞つてきた、この自由通商の制度、これが今日までの世界舊秩序だつたのであります。

ところが段々諸國が進歩してまゐりますし、殊に日本の如きに至つては、國柄は古いのみならず非常に國運が勃興し科學が進歩して、從來の秩序のまゝで續けることが到底不可能になつて參つたのであります。英國はその領土殆ど日の沒するところなしと豪語する程植民地を多く持つて居り、米國または自分の本國を始めとしてカナダはその勢力下にあり、物資と人口の關係よりいつて、極めて樂な狀態であるにも拘らず、一方日本の如く又獨乙伊太利の如く、その人口と物資の關係に於てどうにもならない優秀民族がある。この土地の狹い所謂持たざる國と、充分廣い土地を有する持てる國との不均衡といふものが段々はげしくなつて來た。のみならず支那は日本と朝鮮を通じて地續きであり、日本とは極めて密接な關係にあつたのであるが、この日本の興隆が、支那自身のためといふよりは、英米自身の都合が惡くなるといふ理由口實がら、支那をして抗日侮日排日

の勢を助成せしめてまゐつたのである。日本はかねてより支那に對する制覇、南方に對する制覇の野望を抱いてゐたとし、これを以て持てる國と持たざる國との爭といふ人もあるが、日本は今決してさやうな低い理想の下で動いてゐるのではない。八紘一宇の精神、肇國以來の精神であつて、昔から國家に宿る生命である、――これを　今上陛下二千六百年の今日大いに宣揚せられんとして立上つたといふのが、今日の日本の姿なのであります。故に先刻より申した舊い秩序即ち一二の强國の、いはれなき狀態を永く維持せんとすることは、世界全人類の爲め妥當でないから今日かやうな狀態になつたのであります。

然らば今後の世界はどうなるか、それは恐らく四つの大ブロックに分れてゆくのではなからうか。大体今日世界は、廣大なる地域を單位とせる共榮圈体制になるといふ傾向にあるのでありまして、小さな地域ではなく、廣範圍な自給自足を爲し得る地域を必要とするのであります。國防經濟の觀点よりしてもいきほひ廣域が必要になつてくる。これが恐らくは數個の國家群によつて成立つてゆくのではあるまいかと考へらるゝのであります。

歐洲に於ては獨蘇戰局の推移にもよるが、假りに獨乙がロシアを壓迫してゆくものと致しますれば、結局獨伊を中心とした國家群が結成される。次は南米をアメリカが率ゐてこれを一体として米洲ブロック。亞細亞は日本を中軸として、之に配する滿洲支那を以てし、これを强度結合地帶とした大きな範圍で、これは廣ければ廣い程都合がよいのでありますが、（笑聲）その範圍は先づ日本の南進基地たる台灣の台北にコンパスの脚をおき、南洋のヤルート島最東端に他方の脚をおきましてこれを半徑とする圓を描くと、大体濠洲印度の眞中邊を通り、ロシアを少し通る。相當の範圍になつてくるが、これが先づ適當なものと考へる。（壇上の地圖を追うて話される）獨ソ戰局が如何やうにならうとも、日本海を自由にするためには、沿海洲ウスリー以東或はバイカルこの邊一体は、日本民族の優秀性を維持しつゝ入れてゆくべきではなからうかと考へるのであります。併しこれには自ら段階がありまして今直ぐさうなるといふのではない。これには諸君が余程しつかりしてゐなければならぬ。一つに懸つて諸君の力に在るのであります。兎に角大東亞ブロックは日本を中心として出來上る。これで三つ。今一つはソ聯獨自に或程度の存續を保つてゆくのではあるまいか。若し獨乙の攻勢が非常に强力になる時、挾擊を受けるやうになり日本も忙しくなるかも知れない。併し今後獨ソの關係が如何に進展するかは分らぬことであるし、今日ソ聯印度に關するお話は禁ぜられてゐるのでこれ位で止めるが、先づ將來の世界は以上四つのブロックになることは間違ひないところといつてよからう。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

さて英米が、ベルサイユ條約、國際聯盟、軍縮會議等を引出して舊來の秩序を維持しようと努めてきたが、これは悉く失敗に歸し、好むと好まざるとに拘らず現在世界は數個の國家群にリードされつゝ分割されようとする形勢になつてきてゐる。然らば日本は今後如何に向つてゆかねばならないか。

日本の八紘一宇の精神は　神武天皇の昔から國家に宿れる生命であり理想である。それが只今　今上陛下の御宇に及んで顯現され全世界に光被されんとしてゐるのであります。そして我々は相當の苦難に逢着してゐます。食糧の問題からいたしましても、軍事資材その他の点から致しましても相當な苦難に直面してゐる。之を打開する爲には眞に一億一心、今うんと頑張らねばならぬといふ時に立至つてゐる。而して建國以來の理想、國体の精華を發揚する以外にその道はない。

今朝奉讀されました教育勅語に

「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」

と仰せられ、又その冒頭には

「我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ茲ニ存ス」

といふお言葉があります。實に日本が今日まで發展せる所以は、上　天皇の御稜威を仰ぎ奉り、億兆心を一にして皇運を扶翼し奉つてきたことに依るものでありまして、これが國体の精華であります。而して「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」といふ言葉が今日ほど必要な時はないと存ずるのであります。

今日はすでに前線銃後の區別がなくなつて、東京に居つても空襲を受けるやうな時代であるから、この御言葉に添ひ奉る決心を一億擧つて固めてゆかねばならぬのであります。併し我が國に於ては、或は獨乙の如く、或は英國ソ聯の如く事態が切迫して居らぬ爲か、官民共にどうもまだその氣魄が足らぬ。世界は今百八十度の轉換をしようとして居り、日本も亦大東亞の中心にならうとする秋であるから、國民の氣構へも亦變へてゆかねばならぬ。この点他の國ほど情勢が切迫せぬ所爲か、有難いといふ觀念に乏しい。物が足りない資材が足りないといふ事については、相當考へてゐるやうであるが、國民全体の氣構へを一新してゆくといふ大切な点が最も足りないのではなからうか。大東亞建設といつてもそれはやはり人に在る。この人を——

日本國民が今後大東亞建設の偉業を完遂するに充分な人を養成してゆかねばならぬ。物の足りないのはピンと來るが、人間の心構へに對する關心が不充分であるといふことが、何といつても先決問題である。

從來われわれ日本人は自由主義個人主義を一掃しなければならぬと叫ばれて來たが、それには色々方法もあらう。一体日本は明治以來どうしてきたか、日本國民は如何なる教育を受けてきたか。明治維新の始め丁度梧陵翁が出られた前後、日本は外國から嚇かされたのであります。そのために憲法發布前後いやそれ以前から要人を外國に遣り、外國の絢爛たる文物に驚かされて唯々開國して西洋文明を取入れねばならぬといふ事に汲々としてゐたのであります。その目標が治外法權の撤廢といふことに在つて、何でもかでも眞似してゆかうとした爲に、日本人の思想の中に非常な罪惡といふか、さう言つたものが入つてきた。東京邊にゆくと凡べてが外國流である。自分も外國へ行つて參りましたが、米國へ行つてよくも日本がこれ程米國の眞似をしたものだと驚いたものであります。從つて學校などにおきましても大學の教育は人格の錬成、國体觀念の養成といふ方は、これを兼ねて學問をやるといふ具合に大變間違つた教育をやつてきた。又私立學校の宗教的な學校では、教育勅語とお祈りと何方が尊いのか分らぬといふやうな大變ふざけた教育をなしてゐるものがあつたのであります。女學校などでも、これからの日本人は横文字の一つ位は出來なければいけないといつたやうな考から、極く最近までさうして來たのであります。又自分の家の父でも母でも、パパとかママとか呼ばせてゐた、家は國の中軸である。それに平然として許してゐたのであります。今日は、錬成々々と激しい錬成訓練が行はれるやうになりましたが、當時は今日程にはなかつたのであります。從つて今日は人物の錬成をやりかへなければならぬやうになつてゐる譯であります。

我々が大東亞を建設するには何といつても人であります。共榮圏内のゴム、石油、鐵、米、これを如何やうに置き換へてゆくか、異民族を日本が果して本當に盟主として抱へてゆけるかどうか、凡べて人である。我國はすでに朝鮮台灣の經驗よりしてこれが成否に貴い經驗を有つてゐるのであるから、これを抱へてゆくにも吾々は充分の費質を具へてゆかねばならぬ。朝鮮でも台灣でも、日本人は大まかで私共が從いてゆけるといふ懐しみを有してゐるかといふに、どうもさうではない。一体日本人は氣宇が小さい。この惡印象を一掃してこれらの異民族を率ゐてゆくだけの教養と訓練を經なければならぬ。そして皇國日本の建國以來の生命を吹込んで八紘に光被せしめるのは、一つに新しき青少年諸君の雙肩にかゝつてゐるのであるから、君ら

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

は君等に渡されたこの貴き使命達成の爲に努力を致し、國運の隆昌を圖つてもらひたい。

私が只今內原で訓練してゐる義勇軍の若者一萬數千人が毎年渡滿するのでありますが、これら高等小學校を出たばかりの青少年の連中が、父祖の血潮の染んだ彼の地に骨を埋めることが、至尊に對し奉る御奉公と考へ、默々として努めてゐるのであります。今互に學窓に學ぶ人、直ちに社會に出る人、立場々々は違ふが、殉國決死の覺悟を以て皇運を扶翼し奉るべき時期であるから、どうか諸君は先代の後を承けて大任を雙肩に荷つてゐるものと思ひ、全力を擧げて努力邁進せられたい。

諸君は、眞健美の理想をかざし極めて風光明媚にして而かも傳統に輝く本校に學ぶのであるから、實に仕合せである。時勢も眞に國運を賭して戰つてゐる肇國以來の聖業翼贊の秋であります。時勢に鑑みしつかり心を定めて學業に精勵せられたい。朝來の疲れと存ずるので余り長いも如何と思ひ、諸君の前途を祝福し、國家の爲に御健闘を祈つて終りたいと存じます。（拍手）

（文責在記者）

附記　同氏はこの記念講演より歸任後間もなく朝鮮總督府政務總監の要職に御就任、雄躍任地に赴かる。秋正に大東亞建設の途上、一億國民の同氏に期待するところ洵に大なるものあり。而して朝鮮に於ける徵兵令の施行、義務教育制度の實施等着々日頃の抱負經綸の實現せられつゝあるは周知の所、我々は邦家の爲同氏の御健闘を心より祈つて止まぬ次第である。

文武兩道

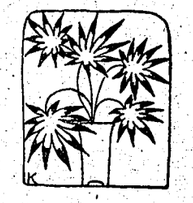
香川直勝先生揮毫

二代校長　香川直勝先生には、記念號編輯に當り左記書翰と共に特に上揭の書を寄せられたり。

日頃先生のモットーとせらるゝ所、修文練武は實に學徒の本分なり。則ち掲げて座右の銘とし、併せて先生の御風懷に親炙せむと欲する所以なり

（前文省畧）　御依頼の懷舊談も小生老耄記憶減退霧を隔てて見る如き觀あり一向にまとまらず候に付其方は井原君に御依頼し小職のモットと致居候文武兩道の四字拙筆なれども別紙に認め置き候間若し御利用下さるゝ所あらば左樣願度存候……

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9



寄稿

在職當時を追憶して

七代校長　廣瀬實造

世にも稀なる創立九十周年、校運益々隆昌慶祝の至り先づ以て冒頭に於て衷心よりお悦び申上げます。記念式に關する通知に接した時は、他に出張することに決定して居つて變更致しかね當日缺席の已むなきに至り實に殘念でした。其の後係の方のお勸めもあり、せめてもの心遣りに禿筆を呵し在職當時の追憶二三を左に。

一

私は昭和六年より同十三年に至る八ケ年在職しましたが、此の期間を通じ偉大なる創立者に對する景仰、崇高なる創立精神に對する感激誠に切なるものがあり、不敏ながらも至誠を捧げ心血を注いで學校經營に當り、大いに修養させていたゞいたことを感謝し、今や大東亞戰爭下　明治天皇御陵下に於て教育に從事する身として一入其の感を深くして居ります。

校訓三綱領「眞健美」「正しく強く麗はしく」は今猶肝に銘じて居り、當時もぢつて切りに「眞劍味」を强調し三星章精神の發揮を念願したこと、梧陵祭・容所祭など獨特の行事、何れも貴き追憶であります。

二

私は某事件のあつた直後赴任しましたので、いはゞ學校としての非常時に際會しました。職員生徒諸君はよく之を認識して創立精神に本づき協心努力したことは、今や振返つてみて感謝に堪へない所であります。

現在は學級增加といふ景氣のよい話を耳にしますが、當時は反對で、寧ろ學級整理あるひは學校の廢合など口にせられる程で、應募者は在職前期或る年の如き七十名內外といふみじめなこともありました。元來中學校としては十學級が最小限度であつて、それ以下のものは稀にありますが、中學といふも名のみで其の實は失はれ破壞されるので、當時は之が防止の爲陰に陽に多大の苦心がありました。僅か數年前のことですが全く隔世の感があります。

三

那者灣頭の景は深く印象づけられてゐます。特に日夕彼の偉大なる業績、防浪堤、防潮林に接しては、明媚なる風光の中に光賢の德を稱へたものであります。又誠に麗はしいことには、當時村當局中心となり有志の方が相謀り感恩碑を建設せられ、同時に校地に隣接した處は面目一新、忠魂碑を中心に小公園となりました。實は以前此の場所は雜草生ひ茂り附近農家の藁が亂雜に積み重ねられ、塵捨場でもあり學校の入口正面としては實に見るに堪へず、且つ火の心配もあり學校としては多年困惑して來たのですが、村當局の理會ある英斷の下に附近農家の諒解成り、こゝに聖地出現、一番きたなかつた處が一番きれいになつたのは誠にありがたいことです。

四

防浪堤、防潮林は誠によく出來てゐて現代の專門家も驚嘆してゐるのですが、元來津浪を防ぐには緩衝地帶を要し現校地はそれに當つてゐるので、學校としては萬一に備へて置くことが緊要であります。當時和歌山測候所指導の下に研究を重ね、湯淺署・串本署などと連絡を保ち、又一面屢々避難演習を行ひました。尤も縣並に村當局の配慮により運動場の前に防浪堤が一部出來多少之を緩和することになりました。其の後防浪堤築造の進行振りは如何でせうか。

彼の昭和九年の大暴風の時には、幸ひ校舍の倒壞を免れましたが、高潮の爲め運動場一面海と化し海水は玄關先に及び、小舟がテニスコートに漂つた程でした。前方の防浪堤が出來たとしても絶えず相當の警戒を要することと思ひます。

五

以前には村道が玄關先を通つて居つて教育上多大の支障があり迷惑を感じて居つたのですが、これ亦村當局の理會と英斷に

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

より變更され、正門を設け三木野球部長を中心に有志者の力によつて出來たスタンドと連絡して校地の區切り体裁が稍々整つて來ました。其の他特別教室、屋内体操場の改築、物置の設置並に由緒深き記念館建設さては西南部荒地を開拓して實習地とし護岸工事を進めるなど思出されてなつかしい。次の佐藤校長時代には有志の寄附により立派な溫室が出來たさうですが、前からの念願が實現して何よりの事です。

本館の改築は多年の懸案で私在職後期相當に話も進みましたが、偶々事變勃發、延期の已むなきに至りました。一日も速く之が實現するやう祈つて居ります。

耐中は全く自分の内のやうな氣がします。一木一草思ひ出の種子です。右の外形式内容に亘りいろ〳〵思出すのですが少々遠慮のあることもあり餘り長くなるから差控へます。耐中には立派な創立精神があります。これにふさはしい立派な人材の輩出が耐中の生命です。九十周年を迎へこゝに一時期を劃し更に一大躍進されるやう遙かに祈つて居ります。

清流吉野の畔より

八代校長　佐藤安一

世界史上未だ曾て見ざる大規模大作戰の下に、赫々として驚異的戰果を收めつゝある大東亞戰下、歴史と傳統に輝く耐久中學校は本年創立九十周年を迎へ、學級增加の盛運に際會したことは、一入意義深く洵に慶祝に堪へない次第であります。

このめでたい祝典に參列し得なかつたことは私の非常に殘念に思つてゐる所でありましたが、今回記念雜誌編纂係の方から御案内をいたゞきましたので、敢て拙文を省みず誌上を拜借して御挨拶旁々回顧の一端を申述べさせていたゞきたいと存じます。

在職十有一年、幾多の美しい背景と尊い傳統とを以て特異の存在をなしてゐる耐久中學校は、私に取つては眞に終生忘れ得ない深い印象と强い感銘とを與へられてゐます。私の教育的生活は耐久中學に於いてその終止符を打たれることを喜んでゐたのでありました。

三十七歳から四十八歳までの十一年間、凡庸の私には孔子の所謂不惑の境地は悟られませんでしたが、心身共に最も活動を樂しみ得る年代を極めて愉快に過し得たことは、全く内に於いては人格高潔なる廣瀨校長先生の御指導と、熱誠なる職員各位の心からの御協力、外に於いては濱口御兩家、先輩校友各位、生徒父兄、地方有志諸彦の理解深き御後援と御厚誼とに依るのでありまして茲に各位に對し衷心感謝の意を表したいのであります。

夢の如く流れ去つた十有一年、思ひ出は走馬燈の樣に廻つて盡きないものがありますが、その中でも前回擧行せられた創立八十周年記念祝典の催しの數々は、約十年といふ長い歳月をさしはさんでゐるとは思はれない程の鮮やかさを以て、まざ〳〵と記憶に甦つて來ます。

昭和六年滿洲事變勃發以來、我が國は日本本來の姿に立ちかへり今日の大東亞建設にまで進展すべく苦鍊緊張の連續でありました。その間、畏くも宮城前廣場に於いて御親閲拜受の光榮に浴し、優渥なる勅語を賜はつたことや、紀元二千六百年の聖歳にめぐり合せて記念の諸行事、諸事業に慶祝の誠を表したことや、大東亞戰爭宣戰の大詔を拜した時のことなどは誠に千載一遇、畢生の大感激であります。

學校行事としては縣下連合野外演習、恒例生石登山（晝間、或は夜間）、大遠泳、百粁踏破を目指しての和歌山往復强行軍等、時には不慮の天候等のため苦い試錬に遭遇したこともありましたが、常に耐久健兒の意氣を以つて師弟相勵ましつゝやり徹し今ではすべてが美しい樂しい思出となつてゐます。

五十年後の鬱蒼たる大山林を夢みつゝ數年前から着手、嚴寒酷暑と戰つて造成し來つた學校林も豫定の計畫は本年度に完成せられることでせう。

昭和六七年頃、財界不況の影響も受けて入學志願者僅に六十餘名、學級減少の聲喧しかつた時の事とて學校長以下職員總動員で和歌山市方面へ入學勸誘に出かけた當時と學級增加の現在とを思ひ合せて、時勢の變遷とはいへ實に今昔の感に堪へません。

その間終始一心協力、喜憂苦樂を共にせられた職員各位（既に遠隔の地に轉任せられた方も多々ありますが）一人一人の懐しい顔が、多數卒業生及在校生諸君の濃淡とり〳〵の元氣潑剌たる顔と共に、今あり〳〵と眼前に浮んで來ます。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

更に昨年來、九十周年記念事業、學級增加等のため一方ならぬ御盡力を願ひ、又厚顏しくも推參して格別の御高配御芳情を辱うした學校關係並に地方有志皆樣方の溫容は日夕臙裏に往來してゐるところでありまして、茲に更めて深甚の謝意を表する次第であります。鄉關を出でゝ二十餘年、行雲流水にもいひ知れぬ親しみを感ずる懷しの故山に再び擁かれて、老父を慰めつつ親戚故舊を訪ね竹馬の友と語らひ、鄉黨子女の敎養錬成に精進せる自分の、ともすればゆるみ勝な懈怠の心に激勵鞭撻を加へて下さるのは、何時とはなしに現れて來る皆樣方の御壯容であります。

劍の靈峰を仰ぎ吉野の淸流を瞰下して、こゝ華の丘學園（當校は小高き丘上にあり、櫻、つゝじを滿載してこの雅名を附す）より遙かに耐久中學校の御隆昌、並に皆樣方の御淸祥、特に生徒諸君の、先輩に劣らぬ奮勵大成を祈つてゐます。

（昭和一七、八、八日夜）

文苑

祝賀

五年　森田正種

一、那耆の浦曲の臭まりて
　學舍こそは懷しき
　嘉永の昔礎を
　いよ〳〵榮えて今日はしも
二、梧陵の御德仰ぎつゝ
　巢立てる人も榮ありて
　古き由緒を偲びては
　久遠の榮願はなむ
三、眞健美を象徵し
　希望は燃えて朝夕に
　聖の御代の惠享け
　健兒の胸も高鳴りて
　小波寄する松原の
　我等育む母校ぞや
　こゝに定めて幾世々を
　迎ふ創立九十年
　淸き濱邊の風を浴み
　御國の爲に盡されつ
　名も耐久のその如く
　祝ふ開校九十年
　三星輝く男の兒らの
　心を鍛へ身をぞ練る
　今日しも祝ふ學び舍の
　創立こゝに九十年

○

五年　川口眞治

一、黑潮の寄する渚に生ひ立ちて
　集ひてこゝに聲高く
二、老松の叫びに遠きその昔の
　熱き血潮に涙して
三、かしこきや若きみ民に賜はりし
　三星章の夢淸く
　剛健を知れる男の兒らが
　和すは母校の古き歌
　古き歷史を繙けば
　かざす母校の古き旗
　大詔勅おろがみて
　守る母校の永久の榮

○

五年　東盈夫

一、橘かほる學園に
　馥郁の香に包まれて
　歷史は長き九十年
二、百花の燃ゆる學園に
　橘の花散るもとに
　歷史は榮えり九十年
三、綠樹影こき學園に
　麥隴かほる春の日も
　歷史は古き九十年
　祝ふ五百の健兒らが
　憧憬の日に血潮湧く
　祝ふ希望の健兒らが
　尊き春の血に生きん
　祝ふや若き健兒らが
　胸に懷古の涙湧く

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

俳句

學び舍のふるきに映ゆる若葉かな　徳次 (5)
春風や祝創立の太い文字　幸雄 (5)
式典の庭しづかなる松の花　清隆 (1)

若葉雨

五年　川口眞治

豫定表讀書と更へぬ若葉雨
警報解くサイレン消えて朧月
月影に梅の若葉の小搖れかな
朧夜の友は親しくあれぞかし

春雷

四年　小槇清嗣

春雷の震はげしき芭蕉かな
春宵やざわめく廊のおぼろなる

若梅

四年　箱柳眞治

春雨や軒にたゝづむ家燕
汗ふけば若梅落ちし上り板
征く兵の敬禮さつと麥青し

沙魚の秋

南條利尚

大鈴の赤き紐たれ堂若葉
配り苗皆倒きて甚御時
甚の月かけて濱木綿咲ける濱
神苑の玉砂利眞夜の月にぬれ
苔なきて那者の古江は沙魚の秋

宮跡

嶋原星湖

さゝやかな宮跡わびし松青く
竹林院洩れ灯に浮ぶ池の鯉
吉水のせゝらぎ悲し秋時雨
大峰の行者の鈴に秋雨けぶる
秋たちて千早の瓦ちゝろ鳴く

水仙花

古谷正

淡雪に濡れて光れり水仙花
赤松の肌に春の雨しとゞ
庭石に子蟹遊びて梅雨に入る
水盤に蟹の子入れて子等の梅雨
巨大なる要塞砲や雲の峯

軍艦

九鬼絜

軍艦貯油槽(タンク)薄暮色の暑き街
いたどりの花を踏みつゝ太郎坊
炭運ぶ馬つはぶきの花踏みぬ
寒空をふるはせて二機南指す
水漬きたる船かたむきて春江かな

五月の海

掛川光風

この夕も和ぎて冬海有難く
青桐の庭一ぱいにつくる影
白鷺は五月の海に染まざりき
南の國を思へり星流る
子の寢息きゝつゝ長き夜を讀みぬ

芥子の實

樋口昇

招魂の碑は片濡れて香ゆらぐ
散るとなくいつか芥子の實あらはるゝ
梅雨荒れて蠅一匹のひそみかな
太刀魚の光りに井戸の水そゝぐ
車一つ置き忘られて蚤靜か

春陰

河内貞幹

春陰の山しぐれ來て郷に入る
潮の香や松蟻わたる廣座敷
宿浴衣吉野の夜をうそ寒く
花茶屋の一夜一夜は露けかり
芋山や子を負うて入る齒朶の丈け

短歌

九十周年

三年　橋本清隆

學びきて九十周年式典を大東亜戰の最中に迎ふ
空かぎる松群高く見つゝあれば嘉永の昔思ほゆるがな
春雨の音しておつる松むらの校祖の墓に詣で來にげり

二年　大谷泰一郎

君よ歌へ我も歌はむ耐久の九十周年の壽ぎの歌
一年をこの學び舍に過しけり三つの調を心にしめて

五年　芝崎理和

產土神のみ園はいとも靜かなりたゞ五月雨の打つ音はして

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

青葉して神の御園の朝まだき拍手の音こだませるかも

五年　川口眞治

潮こえ寄る海風にわれ抗し號令調整擇はりあげぬ
選ましき潮の香り身にみちぬ號令せむと胸をはりしに

四年　小槇清嗣

戰況のニュース入れり聽くわれはダイアル强く右に廻しぬ
松山の風に吹かれて山の池は青々としてさゞ波の立つ

詩

若人

五年　龜井千蓉

青々として
春の息吹を示すクロバの上に
リーダーを片手に
我等のグループは集ふ
限りなき青空に
青春の夢をはせ

鑑々たる黑潮の聲に
若人の幸を思ふ
新生の綠滴るゝ校庭に
青空高くのびるボールを逐つて
快く唸るラケットの振動
我等は潑剌たる一時を樂む
雄國の雲
悠遠として過ぐる生石の麓
黑潮の匂ひかほる那青灣頭に
悠然として聳ゆる吾が學舍
時代の先驅梧陵翁が
遠き嘉永の代に礎をおき
希望に生きる吾等若人の
平和なる理想の鄕として
既に日を閲すること九十年
友よ高らかに誇れその傳統を
檣頭高く飜へる軍艦旗
黑潮の漂りわが艦艦のゆくところ
椰子の葉茂る常夏の國
わが日章旗の進むところ

見よ、世紀に絶すこの戰果
そして燦たる皇國の勝利に
我等は感激と決意を胸にひめて
明日の抱負を語るのだ
友よ開けあの嘲嘵たる喇叭の響を
眞・健・美を音にこめて
高らかに吹き鳴らす喇叭の音を

月光

五年　川口眞治

疲れに汝は若さめて
眠れる巷照らすなり
千切れとびかふ黑き馬に
幸なき運命いつまでぞ
すゝり泣く北風の音は遠くして
汝は永遠の過客なり
夜の精を服せし汝がその面は
鋭き理性に磨かれし
廻ぐる想ひはパルテノンの神殿に
はた柱下なる賢哲の唸きに
されど默として語るなく
ヴィーナスも白く凍てたり

祝九十周年

五年　西鎭男

一、みどりの松に白い砂
海原青く波をよせ
そよ風松をわたりゆく
風光明媚な耐久の
健兒だ我等はこゝにあり

二、嘉永の昔國難の
眞中に建てり我が耐久
我等の校祖梧陵翁
名にふさはしい學舍の
健兒だ我等こゝにあり

三、歷史は長き九十年
隆々榮え國外に
名をとどろかせ三星章
歷史をになひて耐久の
健兒だ我等こゝにあり

五年　芝崎理和

生石颯を身にうけて
時代は嘉永幕末の

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

先覺梧陵先生を
精神傳へて今茲に
二、巷の桑枯よそに見て
校風守る健兒らが
骨ては私立耐久舍
魂は代々に傳へきて
三、今や東亞の決戰下
校祖の精神火と燃えて
國に報ゆる雄心の
共に覩ひて進まなむ

校祖と仰ぐそのかみの
九十周年迎へたり
名も耐久の一すぢに
古松の操君見ずや
時の文相訪れし
九十周年迎へたり
集ふ健兒の肉(しし)は
修文練武日にはげむ
誓ひは堅しいざさらば
九十周年迎へたり

文叢

創立精神

四年　嶋田壽宏

幕末、紀州の一角に呱々の聲をあげた本校の創立こそは、恰も、濱に碎ける波の音が四邊の靜寂を破つて響き渡るかの如く、大いなる反響を呼び起し、校祖梧陵先生の遺德を慕つて集り來る者、獨り本縣のみに限らず、滿天下の志ある者は笈を負ひて來り學んだ――その當時が、わが耐久の黃金時代であつたといふ。時去りて、こゝに九十年、我校の、青年に勝るその意氣は、人をして永遠の生命体を思はせる。

そして、その生命は、耐久社當時の學則の中に「學問ノ要ハ安民ニアリ、安民ノ要ハ修身ニアリ、先五倫ヲ明ニシ道藝ヲ學、大雅ノ風ヲ存ヘシ云々」とあつて、本校創立の精神は已に嚴としてこの時より存して居たのである。永遠の生命は傳へて現在に及び更に未來を通じて貫流する、それが本校の尊さなのである。本校に學びし幾多の先輩が、すべて社會の師表として、大いに活躍せられつつあるのは、實に本校に傳る創立精神の崇高さを物語るものである。

歲月は流れて一世紀を經んとする今日、本校創立の精神はいよ〳〵光を增さんとしてゐるのは、その根本の尊さにある、そして、それが本校九十年の歷史を作り、生徒を訓育した母体であつた。

今日、創立九十周年の式典を擧行せらるるに當り、本校創立の古をかへりみて、益々本校創立眞精神を發揚し、以て奉公の誠を捧げ、負荷の大任を完くせんことを期する次第である。

創立九十周年紀念日を迎へて

四年　原　照

我が學びやは礎を
嘉永の昔こゝに置き
耐久學舍の名と共に
幾年月を過ぎにけり

創立九十周年の輝く紀念日を迎へ、我が校歌の一節は一層幽玄に莊重さを加へて、四方に木魂した。歌ふ者希望に滿ち溢れ、聽く者すべて追憶を蘇らした。我々は人生の花――青年時代に、この耐久に學び、そして今、創立九十周年の記念に巡り合せた。この歡びこそ、深く心に銘すべきものである。

顧みるに、幕末の「黑船來る」時、濱口梧陵翁が、東江、明岳の二氏と相謀り、紀州有田の一角に、青年錬成のために稽古場を創設されたのが、天下に比類なき傳統に輝く耐久中學の濫觴なのである。

梧陵翁は文武兩道によつて村の若者達を錬成せむと努められた。そして眞健美なる三綱領を根本精神とされた。その後、寶山校長先生の御薫陶により、自治のまなびやとして、天下の模範校となつたのである。爾來、幾多の盛衰があり、變遷はあれども、眞健美の創立精神を根幹とする我が校風は、年と共に發揚されてきたのである。

斯くの如く、我が校の歷史を回顧する時、我等は實に大なる責任のあるのを感ずるではないか。傳統に輝く健實なる校風を益々發揚させて、創立者を始め幾多先賢先輩の期待に副ひ得るか否か、一に我等の雙肩にあるのだ。

我等はこの意義深き創立九十周年紀念日を迎へて誓つて校風の維持發揚に努め、大東亞戰爭完遂に邁進しつゝある今日、世界の指導者となるべき皇國民として益々錬成に努めなければならぬ。

創立九十周年記念式

四年　西尾夏生

五月九日、此の日は忘れる事の出來ない我が校の創立九十周年記念日でありました。一年も前から望んでゐた日でした。偶然にも此の日出度い記念式の行はれる年にめぐり合はした僕達は何んと惠まれた生徒でありませう。

やがて式が始らうといふ時いかめしい衣服に身をつゝんだ人々がしづ〳〵と式場へ入つて來られました。先づ君ケ代合唱によつて式が始められました。嚴肅な空氣が部屋一杯に漲つてゐる中で新校長瀧田先生から今日迄の耐久中學校に關するお話を伺つて、この榮ある中學校に入學してゐた事を心から喜ばずには居られませんでした。何れの名士の祝辭を伺つても創立者梧陵翁の色々の苦心がよみがへる樣に書かれてありました。午後は耐中の先輩田中武雄・土岐政藏二氏の講演會が有り、かうして第一日は終り、第二日目は縣下中等學校相撲大會、第三日目は記念マラソン競爭が有りました。又その三日間にわたり先賢名士の遺墨展覽會が有り記念行事は目出度くこゝに終了しました。多年の望みで有つた所の記念式は立派といふ言葉を殘して逝つてしまひました。九十年。九十年。この喜びを心にひそめて、この礎を力にして、益々發展させるのは僕達の役目です、さう思ふと心の底から目に見えない力が湧いて來ます。しつかりと、眞面目に一歩々々を踏みしめて我が校の名をあげよう。

我が校の誇

四年　堤　善胤

湯淺灣にのぞむ樂しき學園、新鮮の氣漲る學窓、我が耐久中學校の

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

誇を見よ！

我が校の第一の誇とするものは大都會を離れた靜かな所にあることである。前に大阪あり後に靜かな村々を控へて大都會の名殘と、田舍の餘波とがゆるやかに合する所に立つ學園である、都會の騷音もなければ田舍の時代後れもない。

大阪・東京の全國に其の名聞える中學の如く、勇名聞えずと雖も他に我が校の樣に九十年の歷史を誇る學校があらうか。都會のにぎやかな所にある學校が靜かに勉强する我が校と比する事が出來ようか。都會の學生は埃だらけだ、都會の臭味が浸込んで居る。我等の頭は新鮮な空氣と暖い日の光によつて惠まれて居る。我が校は北海道の果の如き僻地でもない、又都會の工場に挾まれた學校でもない、こゝに學べる學生を見よ！默々として力强く修養に勉强に運動に努め、都會の文化に後れず田園の風情を味ひつゝ平和に學び、語り育ちつゝあるではないか。その空氣を見よ！大阪の煤煙はこゝまで來ない、校舍はよく日が當る、この惠まれた日光と空氣の强い力によつて育つ我が耐久健兒を見よ!!

たとへ其の校舍がハイカラなコンクリートでなくとも、この懐しい古びた校舍は九十年の長い歷史を守る換へ難い城廓である。その中には先輩諸兄の血と淚の結晶によつて築き上げられた尊い歷史、美しい戰史が秘められてゐる。

櫛風沐雨こゝに九十年、松の緑に彌映ゆる今日の榮光に感激を新たにして、決戰下學徒の本分に邁進しようではないか。

興亞室

四年　横貫高廣

「君行つて來たのかい」「うん」とにやりと笑つて答へた。自分は心を、おどらせながら靜かに重い戸を開けて入つた瞬間自分の心が何者かにさらはれる樣な氣がした。正面の紫幕につゝまれた十數柱の英靈の前に立つた時十數年前、我校に學ばれし先輩が今二十數才を一生涯として君國の爲に父母を置き妻子を顧みなくて欣然護國の華と散られたことを思ふと自分の頭が自から下がらざるを得ない。

中央の陳列棚に血に染まつた軍服、彈丸の跡のある軍刀、雙眼鏡、日章旗が激戰を物語つてをりありし日の父母への便りを拜觀する時目頭の熱くなるを思ゆる。

突然「どうぞこちらへ」と先生に案内されて遺族の六十近い老母が入口に立つて居る。傍に孫であらうか白いエプロンをして戰闘帽子を無造作に被つた男の子が老母の袖をもつてあたりを見はして居る。「有難うございます」と云つてとぼ〳〵と正面に進んだ「○○さんですか」「はい」「こちらの方にお祀りして居ます」と云はれて老母が我が子の姿を見出したか手を合はせて拜んだ。自分はこの崇高な瞬間肅然として襟を正した。

右側の窓際の方に歩を運ぶと美しい支那人形、紙幣、繪ハガキ、ポスター等が我が若人に叫びかけて居る。自分は崇高な感に打たれながら室を出ると遺族の人が續々と入つて行つた。

青葉の薫る五月の空に校舍の瓦がそゝりたち輝いて居つた。

實行

五年　中島昭

古人は信長と秀吉と家康の性質を時鳥に譬へて言つた。信長は「鳴かざれば殺してしまへ時鳥。」家康は「鳴かざれば鳴く迄待たう時鳥。」之に反して秀吉は「鳴かざれは鳴かしてみよう時鳥。」前の二者は夫々不可能な事を不可能とし、又積極的に事を實者に移さうとしなかつた。秀吉は不可能な事を不可能とせず、又家康の如く消趣的でなく烈々たる意氣を以て實行した。されば尾張の一百姓の息子と生れ、轉々流浪の後、盜賊の頭に拾はれ、其の頭と約束するに刀を盜むことを以てした。盜賊の頭の物を盜むのだから、信長なれば要らないと言つて了つただらう。家康ならば呉れる迄待つただらう。だが秀吉は實行した。雨の夜に傘を立て頭の立つた際を見て刀を奪んだ。秀吉程の明快な頭は信長・家康にもあつただらうが秀吉程の實行力はなかつた。此の明快なる頭、旺盛なる實行力あつたればこそ信長の草履取を振り出しに千成ひうたん、遂に天下に名を成したのである。信長も家康も天下に名をなしたが、彼等は名を成すべき名門に生れてゐた。又文祿・慶長の役の如き、南方地方印度迄入貢を促した實行力、當時の三千世界は震へ上つたのである。が此の旺盛なる實行力も天命だけは抗し得ず遂に逝き彼の雄圖は半ばにして滅びた。斯くの如く實行力のあるかなきかにより雲泥の差が生ずるのである。信長や家康程の名門に生れ頭腦の明快なる者に加ふるに秀吉程の實行力があれば、現在我々の見る歷史は如何程變化せし事か、驚くべきは實行力なり。實行力あれば不可能は無いのである。

實行

五年　芝崎理和

實行すると云ふ事の極めて重要なる事は言を俟たない。如何なる立派な計畫、卓拔せる意見を抱いて居ても之を實行しなければ何にもならない。一体我々受驗生の通例陷り易い弊として兎角プラン、プランに終つてしまふ事がある。プランを立てたら必ず之を實行せねばならぬと云ふ事は誰でもよく知つて居る事であり、計畫を立てる時は誰もがそういふ覺悟をするのであるが、然も之が實行されずに終るのは何故であらうか。自分は意志の力が足りない爲だと思ふ。確たる精神力がなければ事は行はれるものではない。故に實行するには意志の力が大いに必要である事がわかる。

次に實行するには精密な計畫を立てねばならぬ。行きあたりばつたりの實行は何ら意味をなさない。綿密なプランを立て、確乎たる意志力を以て之を實行すれば必ず相當な結果が得られる。

「不言實行」「知行合一」といふ言葉がある。知る事は容易であり多くの者は知つて居る。然し之を爲し得る者は少い。はづかしい事であるが自分も五年になつてから、二度計畫表を作り變へた。最初のは實行出來なかつた。二度目のも又正に危殆に瀕せりだ。勉强せねばならぬ事は誰でも知り過ぎる位知つてゐる。又しつかりやらねばならぬとも言ふ。然し實際、日々自分が滿足して寢に就ける程、充分に思つ

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

てゐる事を成し遂げ得る人が何人あるだらうか。誠に「言ふは易く、行ふは難し。」と云ふのは至言である。

我々は今個人としては上級學校の入試突破を目ざして、國家としては大東亞戰爭完遂に精進を續けてゐる。理窟を言つてゐる時ではない。要は實行だ。事の善惡は既に我々には大体わかる。唯實行さへすればよいのだ。皆が、皆、實踐窮行、各々の本務を遂行すれば、來春は見事榮冠を得て、國家有爲の人物たらんとする第一段階を突破し得るであらう。冀くは斯くならん事を。

實行

五年　松原克己

「机上の空論」と云ふ言葉がある。

我々は、理想ばかり大きいのを抱いて空想にふけり、その理想を實現することの出來ぬ者が多い。戰に於ても同樣で非常に大きな絶對に勝つといふ策戰を練つて置きながら、思ふ通りの戰果を得られない場合がある。

此の理由は前者は意志の薄弱等で後者は部下の兵が隊長の思ふ通りに動かなかつたり、敵から意外の襲撃を受けたりして意氣阻燥したりした等で、計畫通りに行かなかつた爲である。かゝる如く計畫を實行に移すことは非常に困難なることである。我々はよく思を致さねばならぬことである。

昨年十二月八日宣戰の大詔を拜するや、忠勇なる陸海將兵は、遙か大平洋の彼方、ハワイ攻撃にフイリツピン・マレーの上陸にと、實に迅速に、世界を驚倒せしめたる大戰果を一擧にしてあげたのである。之御稜威の然らしむるところなれど、我が陸海軍の周倒なる準備があり、そして愛國魂に燃える皇軍將兵ありてこそ、前古未曾有、世界比類なき大計畫を實行に移し得たのである。此の實行に移す迄の陸海將兵の猛訓練に思を致す時、かゝる戰果も宜なる哉と、うなづかれるのである。この訓練ありてこそ、かゝる大實行が大成功裡に收め得られたのである。

我々は目前に控える受驗戰を目あてに一大計畫を建てつゝ進んでゐるのであるが、兎角計畫が實行に移すのに思ふ通りに行かないものである。非常なる意志と忍耐とを持つて行かねば駄目である。

我々は日頃、あれをしよう、これをしようと思つて居ながら兎角實行に移すことが出來ないで過し勝ちである。

此のやうに實行は、むづかしいのだらうか。いや、むづかしくはないのだ。要するに努力だ「頑張れ」と心は勵ます。さうだ實行さへすればよいのだ。眞面目に、皇軍の赫々たる勝利にならつて。（終）

實行

五年　川口眞治

五つ年の櫻も早や散り去つて滿目の若葉の息吹に逞しい意志を滿喫する。五月雨に打たれて、艷やかな木々を窓外に望みつゝ僕は今四ケ年の中學生活を返り見る。夢であつたと思ふし、四ケ年のあちらこちらに多くの忘れ物を置き殘して來た樣に物足りない生活であつたとも想ふ。入學して一年を霞に散りを急ぐ花の如く茫然として、然も唯歡喜の中に送り二年の春を迎へて以來心秘かに高校突破を目指し、あの白線帽に憧れ始めた。それから再度の春を知り、秋風に驚き、寒風にふるへて最高學年を迎へた今僕は自分の實力の不完全なるに驚き、四ケ年の生活への悔の大なるを持て餘して居る。

來る三月の入試を直前に控へて、僕は今更ながら忘學の理由を質ねるに唯不實行の一語にある事を悟る。實行其れは最もたやすくして行はれる事ではないか。計畫を立てる。その計畫に從つて實行すればそれでよいのではないか。それが自分には出來なかつたのである。一日の實行、一時間の實行、否、一分の實行が全人生を左右するといふ事を輕んじて居たのである。

一瞬々々を計畫通りに實行する。ことはやつて見れば容易にやれたに違ひない。一分の不實行それが一日の不實行となり、四ケ年の不實行となつて、今物足りない悔に胸を惱まさねばならなくなつてしまつたのである。僕は今に到つて始めて實行の怖しさにふるへる者である。このまゝ行けば一生を不實行の中に終へねばならなかつたに違ひない。

實行、さうだ、實行だ。わづかな生涯の最後の時に到つて安らかに此の世を去り得るか否かは、實行か不實行かの一語に盡きるのではなからうか。

防空

五年　竹中健

「空襲警報發令!!只今空襲警報が發令されました。」今正に敵機が我が本土に小笠原にも來襲して來たのだ。防空演習ではない。實戰だ。ラジオは例にない聲をはりあげて警報を傳へてゐる。隣組員は國民服、モンペ姿も凛々しく防空監視所に詰め合せてゐる、祖長宅には赤い旗がたてられ、家々には水が滿々とたゝへられ砂も澤山置かれてゐる。此の風景、大東亞戰下の國民の此の凛々しい姿、德川三百年平和の夢を貪り、ペルリ來航に際し「泰平の眠をさますじやうきせん、たつた四はいで夜も寢られず。」と慫慂した彼等に見せてやりたいものである。

現代に於ては戰爭即空襲である。開戰直後いや開戰と共に敵機が我が上空にあると考へねばならない。――幸にも我が皇軍の力で今度の戰では、さういふ事がなかつたが、そして彼等は投げて行くであらう。或は燒夷彈を、或は爆彈を、或は瓦斯彈を。その被害を極小限度に防がうといふところに防空即ち家庭防空の目的があり、責任があるのである。蓋し家庭防空の目的は之を要約すれば、その項目は燈火管制、消火の二つに歸するであらう。勿論、我等は過信しても然るべき精鋭な軍隊を持つてゐる。故に軍防空に關しては白紙の狀態であつても何等の妙げはなく、その代り極力家庭防空に專念しなければならぬのである。

我等には傳統として脈々と流れる大和魂もある。一旦緩急あれば義勇奉公の專い至誠もある。併し防空に關しては、これに併せて須用な

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

ものがある。これこそ水も洩らさぬ鐵壁の訓練と、これによつて生ずべき必勝の信念である。「備ある者に憂なし。」これが本當に防空に於ける金言であらう。その証據に近い良い例がある、それは米機の本土空襲である、家庭防空の備が完璧であればこそ、この米國の空からのゲリラ戰即ち神經戰にびくともしないではないか。米國太平洋の我潛艦の砲擊に驚愕した米國も金言に對する良い例だ。これを古代支那の兵書に求めても、曰く「無恃其來恃吾有以待之無恃吾有所不可攻也」と。これだ。家庭防空の訓練が此の域にまで達してこそ初めて、歌に云ふ「來らば來れ敵機いざ!!」も口吟む資格があるのだ。

悠久三千年、隆盛へ發展へと我々の祖先の手から祖先の手へ引渡された我が國土、今こそ此の國土を守る光榮が、我々現代人に課せられつゝあるのだ。逝り出る愛國の熱情と、我等の祖先に對する責任觀念を土台とし、眞劍に且つ眞面目に家庭防空に努めるのが我々の絶對の義務である。

勤勞奉仕

五年　松宮祐作

「今日は耐久の方から御手傳ひに參りました。」「あゝそうですか、まあゆつくりしてから始めて下さい。」と、おばさんは腰をたゝきながらやつて來た。僕達三人は上着をぬいだ。「所で今日何をやるのですか。」「はあ今日は芥子の葉を落してもらはうと思つてゐるのですが」とにと〳〵しながら言つた。「何でも結構です、てはすぐやらしていたゞきます」と答へて後を向くと今までオロ〳〵顔でついて來た一年生三人が何やら嬉しそうに笑つてゐる。さては芥子の葉落しが樂な仕事かな？と思つて内心ホッとした。でもそこは顔色に表はさず「まだ他に仕事が有ればやらしていただきます」と言つて「今度はどんな顔かな」と後をふり向くと一年生いよ〳〵おかしそうに、果はくす〳〵笑ひ出した。變だなあと思つたが、まあ五年生の對面を保つて聞かずにゐた。

「とらお前らなぜ笑つた。」とおばさんの去つた後たずねると、だまつて僕のシャツを指さしてゐる。見ると此は何如に、シャツが反對になつてゐる。今朝慌てゝシャツを着かえた爲なのだ。さつきおばさんがにと〳〵してゐたのはこれだからだ。

間も無くおばさんが葉を叩く竹切れを持つて畔道をこちらの方へやつて來た。さあ弱つた。合ふのはきまりが惡いし、さりとて逃げるのはなほ惡い。仕方が無い、したくもない小便をしに行つた……。畑ではおばさんが二人に葉のたゝき方を敎へてゐる。

いよ〳〵仕事に取りかゝつた。一人一畝づゝ芥子の葉を落すのである。僕はさつきおばさんの御講義を聞かなかつたから一年生のするのを見ながらやつてみると、案外スパ〳〵取れる。こゝぞとばかり、さながら疾風の木葉を卷く藝で猛烈に葉をたゝき出した。他の二人も同樣、息もつかせずにやつてゐる。所が少したつと一年生共、疲れて來て、二本叩いて休み三本叩いては坐つてゐる。そして「急いてはは事を仕損ずる。よろしく人生は……」と强がりを言つてゐる。「大きく出たな」と言つてやると爆笑して又一休。

おばさんは、今度はふろしきづゝみを持つて來た。そこでいそいでゲートルをまきにかゝつた。但しおばさんの方と反對の方向を見ながら。

おばさんは三人の所へ來て「うまくないですが夏みかん一つお上り」と言つてふろしきづゝみをドザリとおいたので依然ゲートルをまきながらお禮を言つた。幸ひおばさんはすぐ向ふへ行つてしまつた。おばさんは、きつとシャツの直してゐるのを見て笑つてゐたであらう。

其れから後この一年坊主の樣子を觀察し始めた。三本か四本葉をたゝくと一人がチラリとふろしきの方へ目をやつて、あわてゝ僕の方を向く。僕は勿論見ない風をして相變らず葉をたゝく。もう一人先の者と同じ事をくり返す。どうも意地のきたない話だ。

とう〳〵一人がわざとらしく「暑いなあ」と言つたので可愛そうになり、實は自分も夏みかんを喰べたくなつたので「一休してそれを喰べよう」と言ふと御兩人、顔を見合はせて笑つてゐた。

晝食後一時頃までに午前中と同じ仕事をし、後おぢさんの方へどんな仕事をするか問ひに行つた。おぢさんは「豆を引いてくれ」と言つて、豆の植えてゐる所へつれて行つてくれた。同じ作業ばかりで飽き〳〵した僕等に取つて豆引は愉快にやれた。三人いろ〳〵話をしながら仕事をもた。そこまではよかつたが、又おばさんがラムネを三びん持つて來た。とう〳〵面接せねばならなくなつた。度胸をきめて「もうそんなに色々結構です。どうか御子さんに上げて下さい。」と言ふと「まあお飲みなさいよ。それに子供は家に一人も居ないのですから」ときた。こゝでもギャン。どうやら四時になつたので歸つた。

それから十二、三日たつて食料增產作業の日、ひよつこり又其のおばさんに出合つた。ところが僕はわすれてゐたが、おばさんはちやんと知つてゐたのには閉口した。きつとシャツの事で忘れずに居たのであらう。

其の翌日の作業にはおばさんの家の前を通らずに、まはり道をして行つた。

百姓

五年　中澤一

麥の籾殼を燒いた煙が初夏の朝露と共にしつとりと野邊に這つて居た。新綠の初に春眠の夢を覺まし、天地峽しとはかり鳴き呼んだ雲雀も水無月中の頃となつて、靡かすれてか、鳴きあきたのか、一度に白雲の彼方に姿をかくしてしまつた。

僕はオゾンに富んだ新鮮な空氣を吸ひながら、一日の計を踏むべく田に向つた。近隣の門には黑・緋二色の鯉幟が東風に踊つて居る。降雨直後のやうに露で濕れた田の畦道を通つて田に着いた。畠粟田の上では早朝より、つばめが、夢から覺めだての蟲を取るのに忙しい。僕は畠粟の木を引き始めた。二、三日前雨が降つたので、大變引き易い、といつても七欠月餘りも根を張り成長したのであるから思ふやうには行かない。

實際百姓といふものは忙しい。生れて丁度仕事の出來る頃より死ぬ

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

年まで流汗淋漓として、春に耕し、秋に取入れ、年中休み無く働いても働き切れぬのである。故に百姓ほど最も自然を愛し、自然に親しみ自然と運命を共にする仕事はあるまい。實際我々の如く、生を百姓に受けたるもの、今は勿論、小學校の時分より歸校すると直ぐ、白鉢卷に身をかためし、畠の草かき・麥刈り・罌粟取り・田植え・山行き・其の他枚擧に遑のないくらい、働き〳〵、日が暮れて、天空に星のちらつくのを見て家に歸り、夕食をいたゞいて、豫習、復習に頭を惱ます。かくの如くその間に遊樂といふものはほとんど無く、ひたすら、田畑を相手に青春を送つて行くのである。然し近頃はあまり開かぬが學友達が明日休みといふ事になると「やれ明日は大阪へ……。」「やれ和歌山へ遊びに……。」といふのを度々聞くが、我々より考へると全く、考へもよらぬ事である。又都會の無職で遊んで居る人々が、櫻咲く候となると「やれ花見に」春陽麗和の好季節になると「白濱へ」などと美麗な姿に身をやつし、一家、親族揃つて、快樂、美食に日を重ねて居たのが、一旦支那事變が始まつて三、四年たち、食ふ物が無くなると始めて百姓の有難さを知り、又米を見れば目がくらんで、やみや盲ででも手に入れるやうになつたのである。而し又都會の者は方々へ行つたり、見たり、色々の本を讀むから智識は割合に豐富であるが、田舍の子は一般に純ではあるが他面に於ては、智識に乏しい。その割合に報國の心が强く、又精神力や体力に於て、都會の者と雲泥の差がある。之は開戰勞頭眞珠の華と散つた、九軍神を見ても明らかだ。こういふ事を思ひながら二、三畝ほど行つた。

今まで東の山の直ぐ上にあつた、太陽がだんだん頭上に迫るにしたがつて、朝の微風も止み、暑さが加はり始めた。上衣をぬいで又引き始めた。近頃百姓にも地下足袋の配給がめつきり少くなつて、履物が無いので跣足である。而し今はもう山行きや草刈りの外は跣足の方がすゞしくてよい。しばらく引いて居ると妹を連れて、母も來た。母は昨日脱穀した麥の籾殼を風に飛して居る。妹は其のそばで土をせゝりながら盛んに惡戯をして、時々母にしかられて居る、而し小さい妹は童心に惡戯を止めない。

又少し引いて居ると父が來て、牛屋肥を田へ搾つてこい、といはれたので家に歸つた。時計を見るともう九時過である。二、三荷搾ふと肩が赤くなつたが馴れて居るので痛くはない。田の畦で少し休んで居ると母は夏蜜柑を持つて來てくれた。妹も來たのでやらうと思つて皮を剝いてやつた。あまり酸いので僕は四、五ふく食たなり止めた、而し妹は顔を顰めながら矢鱈に口の中に入れて居る。その後二、三荷運んで晝食にした。

家に歸つて、何よりの樂しみは新聞を讀む事である。食べるのを後にして、先づ新聞を見る。「東太平洋に新作戰敵據點を覆滅。」といふ一頁に亦る大戰果發表である。僕は感謝感激の餘り胸の高鳴るのを覺えた。大本營公表の中間的發表について見ても、ミッドウエー島方面に於ては米國航空母艦二隻を撃沈し飛行機百二十機を撃墜したほか、軍事施設に重大なる損害を與へ、またアリューシャン方面に於ては飛行機十四機を撃墜、輸送船一隻撃沈、重油槽群二ケ所、大格納庫一棟破炎といふ花々しいものである。この一聯の作戰が、いかに苛烈なものであつたかは、この偉大な戰果の反面に、我方に於ても、航空母艦一

隻喪失、一隻大破、巡洋艦一隻大破のほか未歸還飛行機三十五機といふ損害を受けた事實から見ても容易に想像し得るのであるが、敵に與へた打撃の大きさは、この犧牲を償つてなほ遙かに余りあるものであつて、この作戰の結果により、米國の反抗企圖は事實上、一應こゝに挫折するところとなつたのである。これを思ふにつけても、第一線將兵の善謀奏戰に對する銃後の感謝いよ〳〵新たなるを加へるとともに惜しくも散華した幾多の忠靈に對する哀悼の念は盡きるところを知らないのである。

今も尙太平洋の黑潮の上に於て、砲聲、擊音、韻々轟々として居ると思ふと愚圖〳〵して居られない。早速晝食を濟して仕事にかゝる。

我々銃後を守る者は幾何なる大戰果があらうが「勝つて傲らず常の備へを忘るべからず。」といふ古訓を以て己の心を鞭ち一路己が本分を盡し、又農を業とする者は、一層食料增產の爲百難を克服して、其の道に邁せねばならぬと痛感した。

讀つて、周邊の田圃を見渡すと、方々の人々は皆樂しさうに歌を歌ひながら默々と働いて居た。

創立九十周年を迎へたについて

五年　御前照夫

創立九十週年、創立九十週年といへばなにか耳に異樣に響くものがある。

思ひかへれば九十年の昔、幕末の海防の議天下に囂々として起り、內外の時局騷然たる時濱口梧陵翁は青年教育の必要を痛感し、同志濱口東江、岩崎明岳の兩氏と相圖り廣村田町に稽古場を開いた。これが即ち本校の起源である。

ペルリが浦賀へ來航し我が國に通商貿易を求めたのはこれより一年の後嘉永六年の世であつた。これから御代の移り變ること三度、その間經ること九十年の今日名譽ある我が學舍の創立九十週年の式典を最上級生として迎へ、これをなし、これを送ることの出來たのは、はたしてなにのしからしむる所であらうか。實に吾々はその光榮を感じ且つその責務の重大なるを考へ、朝夕これに專心努力し終にその佳き日を迎へたのである。

第一日は慰靈祭・祝賀式・講演會と種々式典を行ひ祝賀式には淺々長官閣下が御參列下され有難き告辭を賜はり且つ又文部大臣の祝辭を戴くことが出來たのは、これ皆吾が學舍の起源・傳統且つその精神が他に異る所が存するからであらう。

又これが現在學ぶ生徒五百の健兒にあたへた影響一しほならぬものがあつた。

生徒五百の健兒よ！

この光榮を感じ學舍に傳はる精神をわきまへ日夜勉强に且つ又運動に精勵努力し以つて大御心を安んじ奉り大政を翼賛し奉る國家有爲の皇國民にならうではないか!!

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

耐中進軍譜

四年　嶋田壽宏

創立以來已に九十年、本校の成長は世界の形勢とともに、目まぐるしき發展をなして來た。そして今、大東亞決戰の下、意義ある九十周年記念式典を擧げ、校風愈々振はんとするとき、本校の近況につき、少し筆をとつてみたいと思ふ。

先づ本校報國隊が結成せられたことである。其の日、昭和十六年九月廿二日、學徒の忘るべからざる御親閲拜受の記念日に、空に一片の雲もなき校庭で嚴かに結成式が行はれ、此によつて、すべての學校の動きが一元化せられ、隨つて今迄なつかしい呼名となつて來た三一會も發展的に解消して、その鍛錬部に編入せられた。次は昨年十月三、四日に亘り學徒の意氣を盛んにする和歌山市往復大行軍が行はれた。その頃から、頻につたへられた國際情勢の急迫は昨年十二月八日遂に宣戰の大詔を拜するに至り、いよ〳〵報國の念に若人の血を湧かし、一段と修養にいそしまんことを誓つた。本年に入り、大東亞戰の進展とともに、本校の諸活動はいよ〳〵活潑となり益々修練の實をあげんとする最中、五月九、十、十一の三日間に亘り、創立九十周年の記念式典が擧行せられた。その歡喜を翼にのせて、希望の大空を羽搏かんと、本年より鍛錬部に滑空班が新設せられ、いよ〳〵近く練習にかからうとしてゐる。このやうに記念事業は各方面について行はれ、本校の躍進に拍車をかけてゐるが、その最たるものは、この記念すべき年をトし、本年度より入學定員を百五十名に增加し大耐中の建設に驀進してゐることである。

そして今、六百の健兒は、心身の修錬に余念なく、校風の發揚に、更に報國の大道を邁進してゐる。

那着灣に寄せる黑潮の香はわれ〳〵の身体を包んで、逞しき世にふみ出す前途の多幸を象徵するかの如くである。

中間運動

四年　川口修

「起立」「敬禮」

二時間目の授業が終るや否や、一齊に中間運動の用意が始まる。上衣、シャツを脱いで素裸になり、健康タワシを腰にしばりながら、我先にと運動場に突進する。狹い廊下はまるで人の流れである。皆出て行つた教室には日直が居殘つて室内整備や打水等をしてゐる。運動場では先着順に整列する。やがて体操隊形に開き、運動係の元氣のよい號令に合して準備運動が始まる。午前の頃よい日光に照り輝いて、何ともいへぬよい心地になり、頭の疲れも一掃される。準備運動は手輕くやつて後は駈足である。運動場の大きな周りを四列縱隊で走るのである。足音はぴつたり合つて、話し聲は少しもない。誰も彼も此の足音を聞きながら一切の邪念をぬぐひ去られる時である。無念無想の境に入る時である。一回も廻れば皆の体には汗の玉が光り初める。息づかひもせはしくなる。二、二回廻ると五年の運動係の「止れ」の號令でぴたりと止り内側を向き体操隊形に開く、此の時は全校生徒で円形を作つてゐる。ラジオ体操を始める。これがすむと愈々タワシまさつである。ゴシ〳〵と眞赤になるまでこする。首から胸・腹・手・背中と順を追うてこすつて行く。我々は夏は勿論寒風はだへをつくんざく冬の最中といへども此れをやり通す。此れは一に耐久魂の顯現に外ならない。耐久中學に學べる者の獨特の意志力が之をなさしめてゐるものと思ふ。最後に大深呼吸、那着灣遠く吹き來る海風を腹一ぱいに吸ひ込み磯の香を味ふ。此の後の清々しさ、僕等はこの洗ひ清められた心を以て、三時限目の授業に向ふのである。

中間運動

四年　岡野昭二

靜かな授業の終りの鈴と同時に騷々しい場面が急に展開されて、中間運動の幕は切つて落される。本校の進行目標の勵行事項集合の敏速に困み生徒一同上衣、シャツをぬぎ半裸体にしつかと健康タワシを結びつけ凜々しく運動場に集合する。松原の綠したたる初夏の朝の陽光をあびて集ふ五百の耐久健兒は田舍獨特のよい肌の色をかゞやかせながらやがて運動部役員の號令で各學年共体操をやる。皆は一擧手一投足にも力を入れ、健康そのものを充分に發揮してゐる。あられ雪こぼれる寒中の校庭に海のあらしの吹き寄せる冬の運動場に藤田先生の元氣な御垂範により寒風のはだをさす時分よりきたへた身体には、初夏の微風も一層心地よく、勉强による疲勞も一瞬にして飛びさる。その後適當に各學年のかけ足、松吹く風の音に歩調を合せ指揮者を先頭に運動場を巡る姿は實に勇壯だ。そこには團体訓練を受けてゐるものの中にのみ有する神祕的な美がある。かけ足運動場を二、三回廻つて再び整理運動をする。

これは又一層何とも云ひ難い氣持ちよさがある。次はタワシ摩擦、皮膚が赤くなるまで腕・首・肩・胸・腹部をこする。これが健康保持上有益な事は言ふまでもない。風邪をふせぐ皮膚が强くなる。かくて呼吸運動に清淨な空氣を思ふ存分吸ひこみ次の授業の準備にそなへる。

呼吸運動後の擧手の敬禮これが又精神統一の何よりのよい手段だら。嚴かに行はれた後再び指揮者の號令で一齊に教室に向ふ。その間の規則正しい行動、和氣靄々たる師弟同行の心身鍛錬、嚴正にして明朗な裡に終る。その間の行動の向上を來たして來た事は目ざましい。我等はます〳〵長所を伸張し短所は修正し中間運動をしてます〳〵意義あらしめ校風發揚に協力勉勵しよう。

英雄「ヒットラーとムッソリニ」

四年　小槇清嗣

一つの雄偉なる國民が斷乎として地上に正義を打ち建てんと決意したる時他の群小が秩序の名に於て全ゆる妨害を加へんとするは東西古今歷史の通則である。

何となれば小人は本能的に自己保身と現狀維持欲――英雄はその止みがたき胸奥の欲求により自由と創造を愛するからである。

今や祖國日本が世界動亂の狂瀾怒濤を押し切り東洋制覇の非望をた

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

くましうした英米兩國を廣茫洋上數千海里北は吹風を冒して極光輝やく北氷洋に、南ははるか赤道を越え灼熱の下に、蒼々として大東亞戰爭遂行に邁進しつゝある。

一方眼を歐洲に轉ずれば我が樞軸國ドイツ、イタリヤがロシヤに北阿に將又地中海の制脈に勇敢なる攻擊を續けてゐる。

私は今これからこのドイツ、イタリヤの英雄ヒツトラー及びムツソリニを論じ何處に英雄と呼ばれる價値があるかを考へて見たい。一八八九年變轉極まりなき大陸の形勢は一の輝やかしき新星を北歐の森の上に出現せしめた、ヒツトラーがこれである、一八八三年伊太利のロマニア地方にいま一つの新星が現れた、これ則ちムツソリーニである。素より日本に生るべき英雄とヨーロツパの英雄達との間には超ゆべからざる根本的の差異がある。彼等は祖國の窮迫を救ひ歐洲の制脈を目的としてゐるのに反して、日本はあくまでも我が皇道をあまねく世界に行渡らしめ東亞永遠の平和を目的としてゐる、從つて日本に現はるべき英雄はムツソリーニよりも光輝に滿ちヒツトラより崇高であらねばならぬ。

それにも拘らず我々日本人は依然是等の二英雄の内に多くの共鳴点を發見する。

それは獨り彼等の英雄的精神が我等の心臟に鼓動するからだけではない。二人の英雄兒が遠く西歐の地に生れたるにも拘らず不思議にも多分に日本的英雄の風格を具へてゐるからである。その昔神經質で蒼白い顔をした一人の砲兵中尉がパリーの街を歩いてゐた時、この倭男が後にヨーロツパ大陸を席卷する英雄ナポレオンになるのだとは誰一人夢想だもしなかつた。同じ樣に五十円に足らぬ金をポケツトに入れた貧家志望の田舍青年が、氷雨降るウインナの停車場に降りるのを見た時誰かこの貧しき青年の中に後年の大宰相ヒツトラーを想像し得たらう。スイスのオーブなる町で一人のみすぼらしい男が放浪に放浪を重ねて心身くたくたになつて公園のベンチに腰をかけて悄然と首うなだれる姿を記憶する人があつたとしても誰がこれぞ後年伊太利の大宰相として威權堂々天下を怖れ戰かしたムツソリニであると想像し得たであらう。

さう考へて見ると人間といふものは無暗に他人を輕蔑するものではない。

それと同時に我等の身内に眠れる英雄的精神はたとへ何んな境遇に陷らうと一度は必ず鋒鋒を露し來るものである。

無制限に伸びゆく誇大な想像力、現實に對する奇妙な輕蔑、超然たる自負心、大衆の喝采を受ける雄辯の過信これが私の見たヒツトラの特質である。彼は偉大なる自然科學者の如く、自然の現象によつて打ち建てられた結合狀態を觀察し最後の原因までも究めなければ承知しない人間である、更に彼は遠くまで究明してゐるのだ。ドイツといふ大きな船の航海を平安ならしむべき根幹を究めてゐるのだ。のみならず彼は指導者としての天分の發揮により、國民の民族的特性たる偉大なる團結心を助けて新ドイツ完成の日を信じてゐる。

人間としてのムツソリニは徹頭徹尾矛盾の人だ「矛盾撞着を慣るゝは小人の常なり」哲人エマソンは喝破した、ムツソリーニの一生はたゞこれ矛盾撞着の集積たるやの觀がある。熟烈天を焦すやうな理想は

彼の心胸に燃える。と同時に彼は現實の人である。いかなる考案も悉く實現せねば止まぬ。彼は衝動的だ。そして事務的だ。彼は熱烈だ。そして聰明だ。その憧憬は理想的でその實地の仕事は古典的だ。彼は夢見るが如き冥想に耽りつゝも何十人分かの仕事をどん〳〵實行してゆく。彼の苛酷な一面には憐れみ深い特性がある。彼の身肉の内には偉大なる感情と意志と理性とが大きな渦をまいて流れてゐる。彼は矛盾の人だ。そしてこの一見兩立すべからざる樣な特性を統一する不思議な一致点を持つてゐる。それが彼の力だ。彼の勇氣だ。

ヒツトラとムツソリニはその性格と經歷とは類似点が澤山ある。二人とも獨立獨行の士であり二人とも人生のどん底から出發し、若くして自ら稼がねばならなかつた。二人とも一兵卒として戰線に立ち肉体と精神とを叩き上げ、二人とも大戰後の祖國の貧窮と混亂の中から起ち上り祖國を救ひ發展せしめた。

一体人間はこの世に始めて生をうけた時には、その才能に素質にさう大しだ差違があるものではない。然るに一人が小人となり一人が英雄となるのはその人の精神である意志力である。小人はその抱ける小人的精神の爲に小人となり、英雄はその英雄的精神の爲に——常に高きを望み絶えず努力し、情熱をもち續け、冒險を怖れないが故に——つひに英雄となるのである。

王侯將相豈種あらんや彼も人、我も人なのだ。只我々がその英雄の持つ精神を保持すれば我々も又一人の英雄なのである。

初夏

四年　石谷　徹

毎年、けしの花が畠を眞白に埋めて咲き出すと何となくむつとするやうな暑さを感じる。實際にその頃は田植をする頃よりも暑いのである。

白い花びらが皆散つてしまひ畠には見渡す限りけしの實が並ぶやうになると暑さが幾分減つたやうに思へる。

けしの果實の波が集められ、さうして根こそぎに引き去られてしまふとそれ迄とは變つて全くがらんとしてしまふ。だがすぐに牛を使つて田を鋤き始めると更に暑くはない。それもその筈、もうその頃は梅雨にはいつて、降つたり、曇つたりする日が殆ど續くのである。

雨が降り始めると、すぐによくもこんなに居たものだと思ふ程、あちらこちらで蛙があるだけの聲をはり上げて、鳴き始める。よく聞いてゐると割合はなれて「げく、ぎやく、げう、げう。」とやつてゐるのに交つて窓のすぐ下等で遠慮深げに「ぐぐ、ぐぐ。」と鳴いてゐるのもある。また、たとへ雨が降らなくても曇つてゐる晩には雨の日に準じて大合唱をやるのだから聞く方もあまり有難くない。

田植がすんで水のよい具合にみなぎつた田面をはすかひながら眺めると今植ゑられたばかりの苗が整然と列を成して並んでゐるのがよくわかる。すると降つて來る雨もいよ〳〵梅雨らしさが深まつて來るのである。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

大東亞戰と我等の感激

四年　山本正德

「祝常科六年の時の讀方の時間の時である。「御民我生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあえらく思へば」と聲高らかに讀まれた木村先生は皆なの顏を見廻はされて、「君達は日本人としての有難さを知つてゐますか」とお問ひになつた。「我々日本人は我國は餘りに有難過ぎてその有難さがわからないのである。それをわからせるにはどんな話をしたらいいだらう。日本人は餘り幸福な平和な生き方をしてゐるのですよ。」といはれて一種眞劍な顏になられた。滿洲國がまだ今のやうな滿洲國になつてゐない前ただ滿洲といつた時分の事ですが滿洲のお金持の家では餘りに馬賊が襲つて來るので鐵砲を備へたものです。その鐵砲の數を遠くからでもわからせる樣に屋敷の內の木の梢の上に鐵砲の數だけ赤旗を立てる、馬賊共は鐵砲の數に恐れて盜みには入ることを止める。併しもう滿洲國も立派な國になつて有難いと思つてゐるだらうがね。我々日本では薄い雨戸一枚で夜分も樂々と休むことが出來るではないか。」僕等は面白いお話だと思つた。けれ共本當に「生けるしるしあり」とはつきりわからなかつた。昭和十六年十二月八日大東亞戰の宣戰の大詔を拜しハワイ海戰のニュースを聞いたとき僕は何といふ有難い事だらうかと嬉しいやら有難いやら勿体ないやらで心が一杯になつた。

大御稜威の下に我忠勇なる皇軍の大勝利！僕の頭は有難の心で一杯である。「御民我生けるしるしあり。」とひし〳〵と我が胸に迫つて來るものがある。申すも畏い事ながら我が皇室の有難さ、我日本の有難さ是を考へるにつけても僕は本當に一生懸命になつてきつと〳〵榮ゆる時を迎へて行かなければならない。東條首相はいはれる「戰はまだこれからだ、國民は此の花々しい緒戰に酔つて心を許してはならぬ」と。沈み行く軍艦の中で米英人はまだ戰つて悔いて居ないのである。我々は十年かゝらうが二十年かゝらうが勝つて勝つて勝ちぬかねばならぬそして立派に東亞共榮圈を確立せねばならない。僕等の任務は重い。それだけ働き甲斐がある。僕は大いに勉强しなければならぬ。

忍耐

四年　原照

人間は樂を求め、苦を避けようとするのは人情である。しかし、一度意を決して事に從へば、如何なる苦痛が到來しようとも、これに忍び耐へて完遂せねば已まぬ精神が必要なのである。一年に寒氣凜烈たる冬があり、又百花爛漫たる春があつて、それが交互に廻つてくるが如く、人間の一生に於ても、樂もあれば苦もあるものである。自分の心に嫌ふことをこらへ、自分の好むことをこらへる忿と欲との二つを耐へ忍めば、必ずや前途には、燦たる光明を見出すものである。

かの英雄ナポレオンは、「勝利はよく忍ぶものに歸す。」と言つてゐる。まことに然りである。忍耐はかくも必要であり、尊いものである。忍耐こそ人間の美行なのである。

しかし、忍苦は苦しい。決して凡なる努力でなるものではない。別して、我々青年は、兎角新しいものを次々と追ひ求めたいものである。物事に從事して、些細な事が前を遮れば、すぐ方向を轉ずるやうで、どうして物事の成就、心身の錬成が出來ようか。我々は些細な障害物に屈してはならないのである。

我々はマラソンの經驗を知つてゐる。あの瀧のやうに流れる汗が化して鹽となり、全身に非常な苦痛を感じながらも、力闘遂にゴールに飛び込んだではないか。この精神こそ、我等青年に最も相應しい忍耐の精神なのである。

今や我國は大東亞戰爭の完遂、大東亞共榮圈の確立に邁進しつゝある時、我等はあの忍耐心を持つて、あくまでも目的達成に進まねばならないのである。

雨の日に

四年　大房剛

外は雨が降つてゐた。僕は二階の窓から遠く灰色にかすんでゐる山を見つめてゐる、そして手には今着いたばかりの友からの手紙の開けあつた、こんな時僕の思は遠く山の彼方に馳せてゐた、しかもその思はだん〳〵と高じて來る、遂に居ても立つてもゐられなくなつて來る、しかも不思議に灰色の山が氣になる、そしてそれを見ると思は一層高じて來る、そして落着から考へまいと思ふ程山は魅力を加へ僕の心を引き底知れぬ寂しさの沼に引込まうとするのである。

こんな時には僕は音樂に助を求めるのを常とした、オルガンの前に坐し僕の思ふままに指を動かして行く、何時しかその旋律は友の手紙にも書かれ、彼と共に帝劇に新響を聞きに行つた時の樂しい思ひ出の曲第五のテーマ、第五ベートーヴェン作曲第五交響曲（運命）になつてゐた、自分の彈くオルガンの音に聞き入つてゐると何時しかヴァイオリンに變つて來た、クラリネツトが旋律を繼ぐヴァイオリンの波狀の躍動がだん〳〵と高くなる、遂に目前には演奏する樂團の姿が浮かんで來る、ヴァイオリンは再びテーマを奏し始めた、そしてだん〳〵と低くなり遂に消えて行つた、その時耳に入る音はもうオルガンであつた、しかしその時にはあれ程高じてゐた僕の思ひも落着いてゐた。

僕は考へた、そして信じてゐる。音樂は神が人間を少しでも神に近づけるために人に授け給うたものである、故に音樂はそれを聞いた人が聞くことによつて何物かを得る所がなければならぬ、表面的な人を引くだけの音樂は也早、人の音樂とは云へないのである。

又音樂はその時代のその世間の、そしてその地方の人々の心を最もはつきりと表したものである。人々の間に惰落した氣風が生じた時には必ず惰落した流行歌が人々に歌はれる、又今の如く戰爭には自然と勇しい歌が歌はれて人々はそれに依つて自ら自分を激勵してゐる、これは行軍で非常に疲れた時軍歌を歌ふと元氣がつくのと同じである。又一つの例を上げればフランス國歌の生れた所以である。フランス國歌ラマルセイユはフラスス革命の眞最中である一七八九年に軍隊付きの一青年技師が作つたのである。しかもその時はオーストリヤとプロシヤが革命軍を敗かしてパリーを占領し革命軍の上には再び王が立てられた、しかし革命はそれを見捨て半ば成つた革命が失敗に終るのは

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

しのびなかつた、そこで彼等はプロシヤ軍を追ひ出すためパリーを目がけて攻め始めた青年技師が居た、ストラブルグと云ふライン河畔の町にゐた革命軍も出發の準備が始められた、しかしその軍の士氣は少しも昂らない、これではとても戰ひは出來ないのであつた、この時彼はこの曲を自ら作詞し作曲して一夜發表した、その席に居た人々は忽ちその曲の持つ愉快に元氣にみたされ和した、しかも曲は忽ち町全体、革命軍全体に擴がつた、このため人々は激勵され、この歌のもとに一致團結して進軍した、遂に彼等は革命の成功を見るに致つたのである。

地方に愛唱される民謠はその地方の風俗習慣その他すべてを表しその上郷土の人にぴつたりと合つてゐるのである。故に盆おどりに村祭に村中が鎭守の森に會しおどる事も出來るのである。

世の中には歌なんか好まないと云ふ人もある、しかしそんな人にもやはり好きな歌がある。そして樂しい旋律を聞く時には必ず聞き入るのである、又人は一日にどれ程音樂によつて慰められるか知れないのである。工場で休みの時間擴聲器でレコードをかけ、又音樂にあはせて体操するのも皆人々の心を慰める爲であらう、故に音樂は人にとつてかくことの出來ぬものである事がわかるのである。その上音樂はそれを好む人にも嫌ひな人にも同じやうに愛情を與へその人の人格の完成を導びいてくれるのである。

どこからかモツラルトの絃樂夜曲が聞えて來た、ふと目を上げて見ると雨は何時しか晴れてかすんでゐた山がくつきりと鮮やかに姿を表してゐた。

友情

三年　桑田公文

僕は上畑君の前へ來て叫んだ。

「上畑君居るか」「二階へ上つてこいよ。」返事もきかないうちにもはや階段を上つて居た。「上畑この飛行機誰つくつたんや」「これか、これはな佐々木と僕とで苦心慘憺して作つたんや。」僕はしばらく見てゐる中にさはりたくなつたので上畑君が下へいつたまにそつとさはつたり飛ばしたりしてゐるまに飽いて來て、遂に人の物だ。つぶしてやらうと思つて機体を折つてしまつてそのままにしてゐた。上畑君は「飛ばさう。」とつぶやきながらおもむろに胴体をもつた、そのとたんにもう一つの胴体のわくもをれた。

「桑田お前これおれへんか。」といつたのでつい口の中から「折つた。」の一言がでた。「この飛行機明日外で佐々木と一しよにとばさうと思つて父が今日は和歌山へいくついでにゴムを買ひにいつてもらつた。」と言つたので「僕しようと思つてやつたのでなくて腳が一人でに命令したよつてに。」といふと上畑君はあきれて何もいはなかつた。

その時階段を上つてくる音、誰かと見ると父だ。僕はしまつたと思つて顏は赤くなつた、上畑君の父はこわい顏をしてじつと飛行機を見つめてゐたが、「これだれとはした。」と言つたので僕がだまつてゐると上畑君は「僕とはした」と言ふといきなりゲンコツをかためてなぐつた。僕は上畑君に代つてなぐられればよかつたと思ひながら上畑君を見た。彼は頭をうなだれて下をむいてゐる。

僕は上畑君の友達に對する情の有難さに心の中でこれからも上畑君の友情をとり入れて僕のやくざな心を出してしまはうと思ひ上畑君にあやまつた。上畑君は「つぶしてしまつたのはしようがない。」と言つて下へおりて行つた。僕はそこに呆然として立つて居た。あたりは夕もやにとざされてゐた。

僕の兄

三年　見矢治美

兄さんといへば眞黑な体に軍服姿を思ひ出される。松原を鳴らす風の音も、ぼか〳〵とした日光が明るく見えた頃、航空學校への入校以來、半年しか達たない。郵便屋さんが飛んで來た。兄が歸るといふ電報だ。僕は靴をぬがうとしてゐる所だ。上に通つて母さんに知らせた。何だらうといふ母さんの顏は青かつた。僕の顏もたしか變つてゐた。母さんにこの事話すと、顏が見る見る内に變つて、少し黄白な齒が見え出した。僕のも見えたであらう。母さんにそれを讀み聞かせてあげた。「十二ヒナヒジ」と書かれてあつた。母さんの目には嬉し涙がほとり〳〵と僕の手を濡めてゐた。そうしてゐる内に家ではかすかに目覺がヂー、ヂーと靜かな家を鳴り貫ねた。その時にはもう政吉兄さんが歸つて來てゐた。思はず「お歸り」と言つた。兄さんも僕の顏を見ながら嬉しさうな顏付をして「只今」といふ。それから上に通つて夕食にかゝつて中頃になつて、電報だと云ふ。手が兄さんにとどいた。何とも云はずに受取つた手も、非常にやはらしかつた。よく見つめてゐたが、につこり笑つてそれは良かつたと云ふ聲も、僕、母さんに取つて嬉しかつた。其の日は無事床についた。僕も兄の事を思ふ時、小さい時にあんなにして、どんなにしてと思ふと、二、三分も嬉しく目を閉ぢる事は出來なかつた。多分兄さんも母さんも目をつぶる事は容易でないと思ひながらも、知らぬまに目を閉ぢてゐた。目を開くと朝の時計がかすかに六時を叩つた。もう夕食時の兄さんの事は頭になかつた。母さんに言はれて始めてわすれてゐたのを、はつとうれしい氣に歸つた。外には鳥の音もほがらかに歌つてゐた。とう〳〵八時がなつた。僕の心にあふれるやうに嬉し心がみちみちてゐる。「十七ジ」とかゝれてあつたのにと思はれる位の時間、九時半頃、表に出ると、向の方から友人と中町の所で忘れる軍服姿が見られた。あれはそうだと思つて良く見るとはたしてそうだ。軍服は陸士の服と同じといつてよい位いだつた。唯衿の所に銀翼をプロペラを中心に兩翼で、兩衿に着いてあつた、僕は思はず兄さんのような學校に進みたいやうな氣がしたが殘念にも目が惡るかつた。家につれるとはるかに大きい、二才違ひの兄と大人と小人のやうだ。母さんと挨拶をかはしてゐる。それから靴をとり上に通り、軍服姿をといて、一から十までも軍人生活を語つてもらつて、その日の暮れるのを忘れ、夕方頃まで語りあつた。やがて兄さんも會禮から歸ると兄と挨拶をして、のろとりどりの話しをして間もなく夕食にかゝつた。その夕食も昨日の夕食と違つて大變おいしく感じた。明日は濱に出て体を鍛へようと云ふので、その日はなにもべつに考へずに床についた。目をあいて見るともう明るか

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

つた。飛びおきて濱に二人で出た。

舊友

三年　森　榛二

小學校の三年生の夏僕は耳を病んで夏休を利用して和歌山の病院へ半月ばかり通つたことがあつた。毎朝汽車が下津驛へ止ると必ず僕の汽車に乘る少年があつた。白い帽子をかむり、サージの半ズボンをはいた丁度僕と同じ三年生位の子であつた。いつも同じ汽車に乘り合はすのでいつの間にか友達になつて話をしてみると、その子もやはり和歌山へ通つてゐるのであつた。海草郡の子とでも友達になれるものだなあといふことが僕を喜ばせた。そして歸りにもいつも箕島まで來るがガソリンカーに乘合はせてゐた。そして下津驛で彼が下車するときにはいつも「さやうなら」といつて別れた。

又或日歸りに例の少年と別れてから車中で又別の少年と友達になつた。その子もやはり小學校の三年生位で田殿村の小學校へ通つてゐるといふ。そして藤並からガソリンカーに乘つて歸るのだといふ。そしてそれらの子には永く出會はなかつた。また出會つても互に忘れてゐたのかも知れなかつた。

その耐久中學校へ入學して來ると、下津驛で汽車に乘つて友達になつたあの少年はどうやら西本君でありさうである。昔は僕と同じ位の丈であつたが、今はずいぶん大きくなつてゐる。しかし、性質にはどこか似た点があるので僕は自分でさう決めてゐるのである。

又次の少年はそのとき落着きのないよく喋る子供であつたので森良彦君ではないかと思つてゐる。耐久中學校へ入つてさて思ひかけなくこの二人の舊知にめぐり遇はせたことは何の因緣であらう。互にかの時の事を話し合つてみた事はないが、恐らく僕の想像が中つてゐるであらう。

二人の兄弟

三年　福　幸吉

Tさんには二人の兄弟がゐる。兄は國民學校の一年生、弟は六才で二人はなか〳〵仲の良い兄弟で、兄の方は國民學校一年生、兄である と云ふ点に於いて兄は兄らしい所があるがそれに比して弟はワン白坊主でなか〳〵向かふ行きが强い。この兄弟の仲も兄の態度が幾分か影響してゐる。

盛夏の太陽が猛暑をふるい、草木がゆだつた樣にぐつたりとして、蟬は吾がもの顏になきたてゐる、僕は二人にせめられて海水浴に行つた。濱に來て見ると流石に涼しい、多くの人が泳いでゐる、しぶきを上げて泳いでゐるもの、飛込台から飛込む者もあれば砂で山を作つてゐるもの、相撲を取つてゐる者、多種多樣で夏の海はなか〳〵にぎやかである、岬の彼方には入雲がそびえて太陽にまばゆく反射してゐる。兄弟は早速服を脫いだ、脫ぐが早いかさつと競走して海中へと突込んだ。砂の上は足もやける程の暑さである。兄の方は潛水艦だと云つて水中にもぐる、負けずきらいの弟は顏を中ばつけたが水中もぐりの要領を得とくしてゐないと見えてしぶ柿をかじつた樣な顏をし出した。如何にもくやしい樣である。あまり可愛さうであにのせて泳いでやると、軍艦だ〳〵と大喜こびである、すると兄の方は軍艦より潛水艦の方が强いぞと云ひ出した。――そんなことあれへんわい、軍艦の方が强いわい――潛水艦海の中に入つてゐるから軍艦の彈なんかあたらへんわいとなか〳〵の見幕である。さすがに兄の方がまさつたと見えて弟は僕に應援を求めて來た――「ねえ―軍艦の方が强いね」と――日本の軍艦も潛水艦もどちらも强いよ、と云つてやつたらすぐ「日本軍艦だ」「日本の潛水艦」だと云つて兄はもぐる、弟は淺いところでちやぶ〳〵やつてゐる、やがて砂濱に上つた、やがて蹤々たる爆音がして堂々たる編隊をくんで三機、四機！勇壯だ實に勇壯だ、二人兄弟、否みんなが万才を叫んだ。

友情

三年　福島　昭

學校から歸ると机の上に手紙が置いて居た。何げなく其れに目を通すと僕への宛名で高垣君からである。裏面を見た、讀んでゐる中に夏季水泳訓練の事も少々書いてあつた。そして後には彼からの激勵の文がこも〳〵と書いてあつた。

彼は多忙な中にも良く手紙を送つてくれる事は大變嬉しかつた。そして又自分をかへり見て其の決心の弱さに痛感した。

それからも彼から度々手紙がやつて來た。勿論僕は彼に手紙を良く出した。彼の手紙の內容は極く簡單であるが同級生の友人に對しての事や又彼自身が行軍や旅行見學したと云つたやうな事も度々書いてあつた。爲――毎度どの手紙にもきつと僕への激勵の文が丁寧に書かれてゐた。僕は彼の親切な激勵の手紙に奮ひ立たされしば〳〵決心を新にしたが、「熱し安くさめ安い」自分には旬日も續かなかつた。然しだん〳〵と實行し得る樣にまでなつた。

彼は二年生の時に試驗にパスして榮ある幼年學校に入づた。それはもう陸軍に以ては努力しさへすれば名譽ある最高の位にまで昇る事は出來るのである。いな將來は有望な將校として御國の爲には重大な存在として活躍する身である。

世の多くの友情には友の喜びに舞ふ事を知つてゐても友の憂に泣く情が無いのではなかろうか。同じやうにしてゐる時は頻りに交りを求めても他の者が成功した時にはまだ同じに居る者に對しては振返る事をもしない。高垣君は絕体にそのやうな事は無い、彼は耐久在學中は僕の友人だつた、彼の性質は天眞爛漫その正直なことは級中の者もが知る所である。故に一度幼年學校にパスしても僕は彼に手紙を送り彼は又僕に手紙を送つて交りをした。中學の三年生は往々にして〝人生の別れ目を作る〟と良く先生方や他の人々からも云はれる。此に以て惡道に向つたならば動機となつて大變惡くなる。逆に此の時に以て努力苦心すれば後は樂である。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

僕は此の瀬戸に立つてゐる時友人からの友情あふれる激励の手紙を受ける事を此の上もなく喜びかつ此にこたへんが爲大いに努力する次第である。

我が兄の思出

三年　上田　幸

今をさる二年程許り前、或る初夏の日の朝の出來事であつた。「おい〳〵幸よ早くおきな」と母の呼聲に起された。びつくりして「何？」と返事をしたが後は又「眠くなつて、こつくり〳〵とやつてゐる中に遂々夢の世界へと入つて行つた。が恐ろしい夢を見、思はず「恐ろしい」と大聲をあげ其の聲で目をさまして仕舞つた。其の夢といふのはこういふ事であつた。死んだ筈の父が夢の間に現はれて、目付ものすごく自分の顔をはつたとはらみ大聲で「稔(大阪にゐる自分の兄)は手を切つたぞ。だが何にも心配することはない。知れた傷だ大丈夫。」いふか早いか幻影の如くにすうつと消えていつた。「あゝ恐ろしい夢を見たものだ。嘘であつて呉れゝばよいが。」又しても「おい〳〵」と母の聲に呼び起されたものゝ、さつき見た夢が思ひ出されて心臓をえぐり取られる樣な氣がした。御飯もそこ〳〵に腹にかき込み、急いで學校へと走つた。授業の最中にでも先生の顔はぼうーとかすんでしまつて反對に、その顔が夢に現はれた父の顔によく似てゐた。何遍となく見直しても見直せば、見直す程いよ〳〵其の顔がはつきりと父の顔に見えるのである。自分は恐ろしさに、只もうう つむいてゐるばかりであ

つた。やつとの事で授業を終へ、只一人家へと墓地に走つた。後から友達の呼ぶ聲が聞えるが、何となく父の聲に思はれ、後をも見ずに家にかけ込んだ。途端に「上田さんといふのは此處ですか」といふ郵便屋さんの聲がした。「まさか今朝の事ぢやなからう」と念じながら、手紙を受取り封を切り急いで讀んで見ると「今朝工場にて右手の指第一關節の所から切るが而し心配御無用、直ちに醫者に走りて治療を受く」と書いてゐた。あゝとう當つた。而し本當に大丈夫かなと獨り言をいひつゝ二階に上つた。

それから半年位たつた正月の八つ頃、ひよつこりと我が家を訪れたのは負傷した我が兄であつた、長い間不安に閉されたのか余り顔色がはつきりせず何だか億劫的な態度を見せてゐた。母が「傷は？」と問へば、手を後に廻したきり大丈夫と言つて仲々見せなかつた。親類廻りをする時にでも、手袋を差したまゝで仲々出さなかつた。やつと正月が開けて、大阪に歸る日に「心配せんで呉れ」といひながらポケットから手を出して來たが母は「あゝ」といつて目を閉ぢ、しばらく其の儘であつた。何と云つても大丈夫といつたが、中指・人差指・薬指の三本を第一關節の所から切つてゐて余りも傷が大きいからであつた。其の後手の切つたのを苦にしてゐた。この樣なことから男子たる名譽の徴兵檢査も第二乙種となり、其の後第一乙種編入となつたが、未だに召集令狀をうけないのである。兄はさぞ落膽してゐることだらう。

父と子

三年　池永龜彦

退屈まぎれに作文を書いてゐたが、目に疲れがきたことに氣がついた。水の面を流れ來るかじかの音と伴奏入りの父のいびきで靜かな夜を落ちつかせた。ひよつと腕時計を見ると十一時を過ぎてゐる。「あゝもうこんなに時間がたつたのかしら……今夜はこれでよそう」と僕はひとりごとをいひながら立ちあがつて、電燈のスキッチをくらくひねつた。すぐ何も知らずに朝までぐつすり眠つてしまつた。

翌朝目を覺すと日光は若緑につゝまれた山の斜面に金箭の如くに照りつけてゐる。床を出ると同時に「お父さんもうおきなよ、早く湯ぶねに飛び込まんけ、ようお父さん。」「うーんよしよし。」返事はよいが急に起きる樣子もない。「ようお父さん。」僕はもう一度さいそくした。父は鼻の上にしはをよせて「うーむと、」ふとんの上で大きなのびをした。

「龜彦ちよつと手をひつぱつて起してくれ。」と同時にやつでの葉のやうな父の手がづき出されてゐた。僕はおかしさをかくして「よいしよ、よいしよ。」とかけ聲をかけて「もうよい〳〵」といふ父を廊下まで引ぱり出した。

ちやうど通りがかりの赤い襷をかけたふとつた女中さんが「お早ようございます」と腰をかゞめて挨拶をした。父はあはてて起きなほり「おゝお早よ、大そう早いねえ。」女中さんはをかしさをこらへて小走りに通り過ぎて行つたが高い笑ひ聲が廊下をつたつてひゞいて來た。

僕は思はずふき出してしまつた。それどころか手を打つてはやし立てたいやうな氣持で一ぱいであつた。

父は窓外を見て、てれくさそうににやりと笑つた。僕は走足で川中にある湯槽に下りて行つたら昨夜とゝで父と口をきゝあつてゐた男がのび〳〵と浴槽に身をのばしてゐた。「今お目ざめですか昨夜は大變おそくまで起きていらつしたやうですネ。」「えゝつい本につりこまれたもんですから——。」と僕はごまかした。

朝日がさして谿の樹々の若葉が美しくすき通つてその色が浴室の中まで匂つてきた。

父は「この温泉は間もなく山ざくらが咲くからいゝなあ。」と僕は向ひの崖の常緑樹の間にほのかな紅味を帶びてふくらみそめた山ざくらの梢を見あげながら合槌をうつた。

おだまじやくし

二年　石原久男

今週の日曜日の事だつた。

僕は昼飯をたべてついと家を出た。黄色がかつた緑の燃えるやうな若草が繁つて居る野道を行くとそこに沼田がある。その沼をよく見ると黑く點々とした所があつた。大分上から見て居るのでわかりにくかつたから下へ下りて見るとおたまじやくしが集つて居るのである。そこら一面に點々と散在して高い山から百姓等の家がかたまつてでも居るやうである。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

僕は一つのかたまりに目をやつた。おたまじやくしが頭をぬの中へすりつけ〳〵して居る、尾をふりながら、もう大分ほれて居る所もあつた。僕は此のおたまじやくしの夫々が又何百となく卵をうむとどれだけ蛙が多くなるだらうか、などと妙な事を思つた。

時々頭から水面へ浮きあがつて來るやつがある。ちよつと空中へ口を出すとやれ大仕事したと言ふやうな恰好でもどつて行く。僕はぱつと水をかけるとざつと深い方へと尾を振つて行く。深い方へ水をかけても矢張り深い方へ來る、あほな奴である。「石原」と言ふ辟に僕はふと我にかへつた。隣りの山崎君であつた。「何して居るの」と言つたので僕は「ふん」と答へた。何故ならば大きいなりしておたまじやくしら見て居ると言はれたら一寸ばつが悪い。それで何氣ない風で立上つたものだ。

春

二年　後藤茂光

櫻の花が咲き、胡蝶が舞ふ。小鳥が囀づる。春！春！もう春だ。いろ〳〵の花が咲き、いろいろの蟲の卵が孵化する。小川が樂しげに歌を歌ひながら流れる。此の樣にして、あらゆる物は我々に春だといふことを痛切に感じさせる。

晩夏の候に、大抵の者が氣が付かないでゐた、あの木から覗いてゐた小さい褐色の薄ぎたないやうな芽、長い冬の間から初春へかけて、一見眠つてゐるやうに見える植物が、絶大なる努力を結晶させて、その芽をして、美しい花を開かせ、或は若々しい葉を出させるのだ。

それだのに、人間は、植物が花を開かす爲に如何に努力してゐるかを知らず、花は春になれば開くのだと、すつかり思ひ込んでゐる。さうして花見をして、うかれ廻つてゐる。

私は今年の二月、或木の芽の生長を見る爲に、それを圖に書いて見た。二月一日には長さが五・七粍、それが六日には六・五粍、十一日には七・二粍、十六日には八・〇粍、二十一日には九・二粍とその木の芽は、開花の希望に燃えながら、懸命の努力を續けてゐる。五日毎に高さが平均約〇・九粍も延び上り、やがて來るべき春に備へて着々とその準備を進行させてゐるのだ。これと比較して見ると、人間ののん氣さには、つく〳〵驚かさせられる。

陽春の太陽の陽氣な輝きが、蜜柑の若葉に映えて、その若葉の間から、かはいらしい蕾が、頭をこつそりとおどけたやうな恰好で覗かせてゐる。あらゆるものは、今冬の沈默から開放されて希望と歡喜に躍り狂つてゐるのだ。

蟻

二年　高垣健三

石垣に腰をかけた。何の氣なしに下を見た、目に入つたのは黑い小さな虫。蟻であつた。やはり忙しさうにあつちへ行つたり、こつちへ來たりして立働いてゐる。

去年の秋以來誰にも姿を見せなかつた蟻。それが今僕の目の下にゐる。何だかなつかしい樣な氣がした。溫い間に稼ぎ、寒い間は地下にゐる。しかしその地下にゐる間は大体定つてゐる樣に思ふ。僕が毎年霜燒をするのは、寒中より春休中である。昨年も始めて蟻を見た時は丁度霜燒をしてゐた。今年もだ。

蟻は暦を持つてゐるわけでもないのに何故春をよく知つてゐるのであらう。木の芽も花も皆さうだ。芽でも花でも眠つてゐる樣に見える冬の間に、もうちやんと開花・發芽の準備が進んでゐるのである。

それなのに人間たる吾等は、うるさければ學習も復習もしない。そんなことでは、冬眠つてゐると思はれる草木に負ける。又そんなことでは人間としての春も來ない。

花も開いて散り、最早草木は芽を吹きだした。

南からは燕も來た。蟻も蛙も出て來た。さうだ今は春だ。お互に大いに頑張るのだ。

空襲

二年　青石隆治

四月十八日十九日に渡つて始めての空襲警報が發令されたのだ。

十八日の午後二時半頃であらうか鍛錬活動が始まる前に中井先生から今警戒警報が發令と話されて鍛錬活動が始じまつた。

それから道場で南條先生から劍道について話があつた、それが終らない中だつた「ブー」と云ふ不氣味なサイレンが鳴りひゞいて皆の心を動かせた。空襲だ!!空襲だ!!生れて始めての空襲である。このやうな場合にはあわてゝはならぬ、空の護りも銃後の務の中の一つだ。僕等も戰場で働らいて下さる兵隊さんのやうな氣持で防がねばならぬ。

先生の指揮で一先づ松原へ避難したそして次の命令を待つてゐた。

全校生は持場〳〵についた四年生、五年生は武裝をして見まはりをしてゐる。又火たゝきを持つて奉安殿を守つてゐる組もある。

あツ!!見えた見えた、あやしきあの飛行機？速度は速い、後の山でラツパの音がする「あれは飛行機が見えたがどうも味方か敵機かわからない」と云ふ合圖ださうだ。飛行機は姿を消してしまつた。

少ししてから南條先生はラジオで待ばれた狀況は名古屋に二機・神戸に一機現はれたが味方の損害は少いと言はれた。

若し此の上空に現はれたならば何處迄もきつと防ぐと固く固く決心した。

春と小鳥

二年　垣内貞

そろ〳〵暖かくなつて野には桃・櫻の花、霞の空には雲雀が「ぴろ〳〵」と喜ばしさうな辟で歌ふ春の時節となつた。

子供達は摘草又は友達とピクニツクにと新しい心は生氣と歡喜に滿々てゐる、木にも草にも人間にもいやすべての生物は新生のよろこびに滿あふれてゐる。僕達もすこやかな若さを意地惡な冬から解放された春の中へ躍り込まう。又花の樣に美しく小鳥のやうに愉快に。酔ふやうな萬物を包む太陽の光に、つゝましいむらさきの花の蕾たち、花

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

にしたふ揚羽蝶、又樣々な小鳥は「春が來た。」と歌つてゐる。

中でも僕達に春が來たと告げるのは植物と小鳥たちである。小鳥の中でも雲雀や鶯は小鳥の春の王だ。

雲雀は春誰もが耳にする鳥である。この鳥は學問上の分類では漂鳥と云つて日本中あちこちと渡りあるく。鳥や雀は大抵自分の生まれた地方で離れない。雲雀はそれでない、しかし燕や杜鵑の樣に日本國から外國に出ない。冬の畑の黑土の上をちよこ〳〵と歩いてゐる、そんな時分はまだ歌はない。さうして春になるのを待つてあの泉の樣なたのしげな囀を空から振りまくのだ。鶯は冬は唯「ちゝちゝ」と鳴てゐるだけであるが春になると自然に聲が變つて「ほーほけきよ」と始める。けれどもこれも東の間五月となるともう人に邪魔されない奥山へ入つて行く。この二鳥は春を告る爲鳴くといつてもよい。春四月我々は野原へ出て新しい氣持で行く小川の水は「さら〳〵」と流れ又岸の葦やれんげ草が一面に咲き空では雲雀が鳴き山の方で鶯の聲、赤白く山々をおほふ桃櫻と各々植物は咲けよ〳〵と鳥々は鳴けよ〳〵とほんたうにこの春はたのしい、しかし僕達にはこの春こそ一生懸命休と勉强に力をそゝぐための春だ。

雨

二年　小林圭司

梅雨の名に背かず、雨は停車場の窓を叩きつけてゐる。

やがて開札口が開いて、僕等はすばやく車内へ飛び込んだ。誰もが持つてゐる傘から雫がぽたり〳〵と落ちて車内の床をじり〳〵としめしていつた。ブーとガソリンカーは靜かに金屋口驛のプラットを滑り出した。

雨はひつきりなしに車窓を叩いてゐる。そして窓ガラスは霞んで外の樣子は分らない。手で拭ふとしばらくたゝない中に、又ぼうづと霞んでしまふ。御靈驛から少し行つた所で輕便名物の故障がおこつた。がしかしぢきに直つたと見えて、又輕く走り始めた。下津野からは田圃も何もあつたものではない、唯一面の池である。少し稻の早く育つた所では、稻の先だけが見えて横に倒れてゐる。その雨の中を「ごー」と汽笛をならして、紀勢線の和歌山方面行の列車が小さく藤並の鐵橋を渡つて行つた。藤並驛を過ぎてから雨は一層激しくなるばかりで全然外の樣子なんどは見えなかつた。吉川附近にさしかゝつた頃、車内の人々は窓ガラスを拭つて外の樣子を見たので、僕も覗くと有田鐵道の線路まで水につかつてゐるので、その中をガソリンカーは速度をゆるめて走つて行く。當前ならばこの吉川附近は大雨が降るとすぐ水で一つぱいになつてしまふが、四、五月頃こゝの治水工事を行つたので、今年は家々の床まで水でつかつていく程の事はなかつた。而し細長い田圃は濁流と化して、眞黃色な水が流れていつた。程なくガソリンカーは湯淺驛に入つた。

驛の建物と車との間を、ばら〳〵と大粒の雨が落ちていく。車から下りると驛の中まで、霧の樣なしぶきが舞ひ込んで來る。況して驛外においてはなほさらの事である。雨は物凄く地面を叩く一方である。これから此の雨の中を通つて學校へ行くのは大層困難であらうと思つて、暫く呆然としてこの光景を眺めてゐた。

田の草取り

一年　松浦巖

雨の朝だつた。學校からの歸り、木村君と狹い村道を前進中少し傾斜した所へさしかゝつた時、前方からのひどい吹き降りだ。傘を前にたほして走る。前方が見えない。盲目飛行だ。瞬間「ガチャン。」しまつた！。」自轉車の正面衝突だ。一番驚とともに僕の目から電光が出た。「あつ。」と言ふ間に自轉車もろとも、稻田の中へ。僕は稻の中で四つ這ひ、田の草取りの恰好である。漸く泥だらけの兩手をもちあげて立ち上つて、さて相手はと見ると知らない人だ。片足で自轉車をつゝぱつて、平氣で居る。固より惡いのはこちらだが、素直にあやまる氣になれない。僕はやうやく、木村君に田から引き上げてもらつて、ハンカチで足をふいた。

その人はだまつてブレーキをなほして居る。木村君はにや〳〵笑つて居る。僕の自轉車を起して見るとハンドルが後向いて居る。木村君と二人で直したがハンドルの動きが惡い。自轉車を止めて後をふりかへるとその人はもう居ない。僕は幸ひ怪我はして居ないが、ひどく降る雨にびしよぬれだ。もちろん傘はぐちやぐちやだ。仕方がないから歸りに川へ流した。

こんな間ぬけな田の草取りしたなど、もちろんうちへは内証である。

修學旅行の思出

一年　齊藤春太郎

思ひがけずも、伊勢の大神の大前に大東亞戰爭の戰勝祈願の赤誠を捧げ得た修學旅行の思出を綴らう。

あの十二月八日の朝六時、僕等百二十六名（廣村・南廣村六學年）は電車でひた走りに北へと走つて居たのだつた。大東亞戰の始まつたのを知らぬ車中の僕等は大はしやぎであつたが、大阪に着いて全く驚いてしまひ、關急電車の中では誰も申合せたやうにだまつてしまつた程だつた。

奈良驛には戰爭ニュースが貼出してあつて、黑山のやうな人だかりだ。東大寺の大佛を拜んでから、春日神社に參拜し、皇軍の武運を祈つた。若草山の麓で辨當を食べる時、鹿にパンを二つ食べられた。しばらく奈良の風光を賞して歷史の都を後にした。そどより法隆寺の五重の塔をはるかに右に望みながら八木驛についた。高いプラットホームから奈良の方を見渡すと、若草山が茶色がゝつてかすんで見えた。廻れ右をして仰いで見ると、昔の和歌によく詠まれた香久山・吉野山・畝傍山・多武峯等が重り連つてまことに美しいものだつた。

やがて參宮本線で伊勢に急ぐ。明野原附近に來ると、空低く戰鬪機が訓練して居て、ひや〳〵した。神都宇治山田市に初の第一歩を印したのが午後三時であつた。そこの空にも飛行機だ、戰鬪機の妙技に氣を奪はれたゞ茫然とした。そこから徒歩で外宮へ。豐受大神の鎭まる御社に大東亞戰爭の必勝を祈り、それから電車で内宮へ急いだ。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

についたのが午後四時。國を思ふ大勢の人々が潮のやうに社殿へ〳〵と動く。神々しい御社の前に恭しくぬかづいた時は、自ら身のひきしまるのをおぼえた。靜に頭を垂れた大勢の人々の敬虔な眞劍な姿にも心を打たれた。

その夜二見が浦に落付かぬ一夜を過し、翌朝雨の降る中を明野原飛行學校見學に移り、數多い我が戰鬪機の雄姿をたのもしく見た。飛行場に名殘を惜みながら昨日の八木驛に引返した。そこから吉野口に着いたのがその日の午後一時であつた。雨はどしや降りでプラットホームも雨のしぶきに濡れて居た。雨に煙る有田川をなつかしく眺め下して湯淺驛に着いたのが午後六時。燈火管制の暗い道を父に迎へられて我家に向つた。

弟と夏

一年　兒島貞夫

今日もまた相變らぬ暑さ。朝からどこへ行つたのか見えなかつた弟は、大きなたまと長い追棒を小さい手に、ひよこりと裏の入口に現はれ、僕の顏を見て、につこりしては入つて來た。

背丈に似合はない長い棒を小さい兩手に重げに握りしめて、たまと棒の先をゴツン〳〵と、到る所にあてて音をさせながらは入つて來る恰好はとてもをかしくて可愛いゝ。「貞チヤン何匹取つたと思ふ。」「さあ、まあ一匹だらう。」「何！ふな五匹もすくつたんだよ。」とさも自慢らしい顏。數回自慢を繰りかへした後、つぼに入れたかと思ふと忽ちたまですくつて見たり、手でつかんで見たり、口をあけて何かをほり込んで見たり、うちの弟にかゝつては魚も可哀さうなものである。

お昼休の時ふと目を覺すとそばに寢てゐたはずの弟が見えない。ねむい目をこすりながら早速たまを探して見たがやはり見えない。「又、行つたのだなあ！放つておけ。」と思つて又ねむつてしまつた。「、又急にやかましい聲がしたかと思ふと、鯉子を二、三匹たまの中におどらせながらは入つて來た。七つになつたばかりの弟にしては上手だなあと感心しながら、弟を見ると半身泥だらけである。夕方もあまりおそいので、家中心配して探してゐる所へヌツとは入つて來た弟は、やはりたまと追棒を仲よくつれて居る。「今頃迄何處へ行つて來たの。」と怒りかけると「わかつて居るぢやないか。」と言つたので、一同大笑ひしてしまつた。かうして來る日も〳〵たまと仲よしの弟は隨分すくひが上手になつて、弟のつぼには何時も元氣さうに泳ぎ廻つて居る鯉やふなの姿が見られる。

だがたまと仲よしの夏もはや暮れんとして居る。次の遊びは何に變はるのかな。

勤勞奉仕

一年　久保たかを

「さうかえ、それや御苦勞さん。」小母さんは僕達の來意を知るとかう言つて輕く會釋をした。

さうして、小母さんは古い經木帽を無造作に頭にのせ、二挺の鎌を土間の隅から出して來て僕等の先に立つて行く。「今日の作業は草刈りだな。」と思ひながら、夏蜜柑畠の間の細道を通つて山田川の川邊に出た。空にはあちこち雲が飛んで居る。小母さんの草履も僕等の地下足袋も露を含んでしつとりと濡れて居る。附近の畠に植わつて居る煙草はもうラツパ形の桃色の花をつけて居る。「そんなら此處の煙草畠の畦の草を刈つておくんな。」と言ひながらその刈り方を見せてくれた。

僕は草刈りは始めてだつた。一緒に來て居る尾上君は馴れて居るのであらう、さく〳〵と氣持よく刈つて行く。僕も始める、何しろ短い草である。手で持つて刈る事も出來ないから根のあたりへ刃を持つて行つて横に拂ふ。ぱつと露が飛散つて根の上から大体切れた。さて刈り出して見ると刈れるには刈れるが、相當時間がかゝる。尾上君の眞似をして刈つて行く中にだん〳〵うまくなつて來て、始の一筋をやり終へた頃には尾上君とさう遜はぬ速さになつて居た。次は北側の畦道だ。こゝは特別長く其の上あたり狹しとばかり一面に生ひ繁つて居る叢だ。尾上君は既に其の半身を草中に埋めて刈り鋏けて居る。僕は山手の方から尾上君の方へ向つて刈つて行つた。こゝさへやればもう後は薄の樣な草だから容易である。一株だけでも一回では切れない程大きいのが所々にかたまつて居る。半分だけやつて一先づ休憩した。山田川の堰から溢れ落ちる水の音と、林の梢を吹きなびける風の音とがまじつてまるで汽車が走つて來るかの樣に聞える。向かふの蜜柑畠の方にも白ズボンがちら〳〵見えて居る。「何年生かな。」青葉の香を含んだ快い風は何時しか僕等の汗をさらつて行つた。

「さあ、仕離い所は後半分。」元氣を奮つて立上つた。さく、さく、さく……。

やがて草の間から尾上君の帽子が見えたり隱れたりして來た。「後五米程だ。」だん〳〵帽子が近づいて來る。僕は鎌を無意識に速く動かしてゐる、此處がすんだら山田川へ辨當を食ひに行かうと思ひながら。

富士登山

七月二十四日　十二時九分、湯淺發、校長先生の御見送りをうけて出發。皆元氣な顏で喜びに溢れ、新調のリツクサツクより色々取出して話合つてゐる。和歌山—難波—四橋プラネタリウームで宇宙の神秘に醉うた一同は一路富士山麓へ向つて大阪驛を後にした。時に五時五十一分、夕闇迫る沿線の都市、靜かな京都、琵琶湖が見える。空は星一つ見えず眞黑だ。今にも降り出しさう。明日の天氣を心配しつゝ眠さうな顏をして坐つてゐると、折しも窓は、あちらこちらでぴしやりと閉ぢられた、雨だ。窓硝子を急いで閉ぢる。もう眠つてゐる者もある、豫定變更でもあれば嬉しいなど言ふ者もある。雨は大したことなく止み窓を開ける。眠らずにぢつと空ばかり眺めてゐる、汽車に搖られるとなか〳〵眠れない。やがて車内は靜かになり、うつ〳〵と一、二時間眠る。

七月二十五日　朝まだき午前三時四十分、富士驛着、物凄い登山者の群に驚き、眠たい目をこすり大宮行の列車に乘換へる。登山者ばかりである。ほの〳〵と明るくなつた頃、大宮驛に着き、豫定の島君旅館へと急ぐ。こゝで朝食をとり、登山用具を買ひ、强力の注意を聞

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

く。見るからに强さうで頼もしい。

いよ〳〵出發、大宮の町を買ひたての金剛杖を手に手に、强力の説明を聞きながら從いてゆく。途中德川氏創建の淺間神社を參拜その壯麗には流石に皆感いた。

自動車乘場へ急ぐ、多くの登山者が列をなして順番を待つてゐる。見るとトラックへ詰詰だ。女團体三十名と吾等一行二十餘名を乘せたトラックは幾分かの後動き出した。道は急坂、ぼん〳〵飛ばされる、坐つたまゝ足の措く所もない、これには閉口して一同カケツバタといふ所に降りる。上衣を脱ぎ强方を先登に山道を登り出す。近道らしい谷間の道をむし〳〵登る、頂上は仰げども曇天で見えない。其麓を被る者、鈴を釣る者、いろ〳〵だ。—(鳥居生記)—

御來迎

山路を喘へぎ喘へぎ登つて行く我々にも、しむやうな靜けさが感じられた。お山の精氣と言ふのか登山者の雜沓も、その靜けさにもみ消されてゆくやうに金剛杖の響だけが白く張りめぐらした霧の中から漏れて來る。無數に黑い幹をづゝ立てた杉林が煙りに煙つてどこまでも續く。勾配はかなり急だ。汗ばんだ肌がひんやりする位濕氣が多い。

「六根淸淨——。」「お山は晴天——」其處此處に起る臍聲にも疲れの色が判然とうかがはれる。このお山の極り文句を覺えた始めは皆喜んでお山に屆けとばかりに呶鳴つたものだが、今では無意識に口から飛び出るのも妙だ。それも無理ない事だ、耐久の健兒一行は、もう半時間も歩き續けてゐるのだ。始めは良いなあ—と思つた深山の景觀も、

から單調に續けられるとたまらない。それに强力の健脚はかなり早い。どん〳〵人を追ひ越し行くのも一寸良い氣持がするが歩く苦痛も一通りでない。

もう休みさうなものと思ふが强力は一向直進の意志を飜さない。よいしよ〳〵登つて行くうちに、さしも無涯としか思はれなかつた針葉樹も稍々まばらになつて來た樣だ。白樺の老木が二、三本白い粉を吹いてぶつ倒れてゐる所を見ると隨分寒いらしい。「もう四合目は近いぞ。」と言ふ强力の聲に勵まされつゝ、ふと路をまがれば、もう四合目である。

あら蹌しと辿り着いた此處も大變な人出。

今しも白裝束に身を固めた一團が「〇〇團体出發します。」と大聲で呼ばはりながら團旗を押し立て登つて行つた。一寸自分等に旗の無いのが淋しい。大分待たされて金剛杖に「裏口木無塔」のいかめしい墨印を押して貰らつた、それからお山名物の甘酒を三杯も飲んだ。乾いた口に熱い一寸酸味のある味は中々うまい。

程なく其處を出發して頂上を指した。もうこれと言つた大きな木は無いが、相變らず木々の茂みがある。十分位經つたなあと思つた時、忽然として眼前に擴がつてきたのは富士の大灰原である。こせ〳〵した樹林の中を通つて來た我々の目に一層豪放的に、そして魅力的に擴がつてゐる。

あの富士特有の曲線美を持つてずつと頂上まで延びてゐるが、頂上は霞んで遙か彼方に鎭座してゐるらしい。ふはり〳〵山の背面を轉る樣にして來去する白雲に消えつ見えつしながら動いて行く白襦袢が七合目あたりまで一列に点々と見える。其處から向ふは白一色。

路は一層はげしくなる。山の横腹へ電光的につけられた路はごりごりした火山岩の連續である。惡く踏めば足を挫かす懸念のある樣な惡路だ。間もなく雨にしこたま打たれた。雲と共に來去する通り雨である。リユックサツクの奥深く押し込めて置いたカツパを離儀して身に着けたと思つたら呆氣なく止んでしまつた。呆氣ないと言ふより豪放的だ。

「あれは寶永山の噴火口です。」と强力の指さす方を見ると成る程赤茱色の山肌が崩れる樣に凹所を造つてゐる。「鐙りは、あの傍を通るのだよ。」と我々を喜ばせて置いて、又「六根淸淨——」と聲をはり上げる。

もう雲層も下界の展望を妨げる惡黑の幕となつて隨分下に横たはつてゐる。頂上を蔽つて点々と或ひは列を爲して登つて來る人間の小さな動きが手に取る樣に見える。いさゝか得意の場面である。今通つて來た五合、六合の屋舍が登山者の群に取りまかれて見受けられるのも懐しい。

ふいと見上げると楠部君の伸氣な姿がまだ背よりカツパを取らないで、上へ無限と延びる大灰原を背景に傲然とつゝ立つてゐる風姿は一寸畵にもなりさうだ。

又歩き出す。昨夜眠らなかつたせいか何となく頭が冴えない、が下界の展望が增々開けて來る。郷里の山々に登つて一里四方にも足らぬ景觀に眺め入るのと趣が違ふ。山麓を一面に塗りくつた白雲の切れるあたり、太平洋の大海原が雲か水かと言つた工合に茫々千里涯しもなく擴がつてゐる。空は八部通りの晴天だ。その水平線の接する所、むく〳〵と積亂雲の大塊が地球の端からはみ出てゐる。何たる壯觀ぞ。その壯觀も登るに從つて益々極る。夕方近くになると益々空氣が調和するからだ。

しばしと憩ふ我れ等が眼下に、山あり海あり島ありの島瞰圖が大々的にくり擴げられてゐる。恍惚として强力の説明に聞き入る。

お山を丸く廻らした水平線よりも此方、大きく張つた太平洋の平面にぽつん〳〵と夢の如く出てゐるのは伊豆の七島、その左方に伊豆半島の突出がある。海岸線の不規律な突出が、ずーと大海原との區別も臍に續いてゐる。黑味を帶びて長々と、それこそ眼下に寢そべつてゐるのは箱根の連山である。「あーあそこに光つて見えるのは富士五湖の一つ、山中湖だな」と時々九鬼先生の註が入る。裾野の繁みも、今は雲も晴れて判然と目に移る。が何しろ三千五百の高さよりの展望である。下界のすべてがぼんのりと白味を帶びてゐるのが實に良い。

「さあー行かうか。」程なく强力の聲にこの茫然自失の狀態も破られた。歩き出すと疲れた足が非常に苦痛を訴へる。皆の足取りも一寸怪しい。「呼吸が妙だなあ」と皆が言ひ合つてゐる樣に此處まで來れば大分氣壓も薄いらしい。上の方に眞白なものが、ぽつく〳〵見えると思つたのが案の如く大きな綿雪であつた。それを强力にならつて食べて見ると咽の乾いてゐるせいか冷たくなつた口にも中々うまい。

もう今日一日の目的地九合目も、すぐ眼前に石垣を築いて建つてゐた。間もなく痛い足を伸ばして九合目に着いたので、やれ〳〵と思つたのも束の間、人の群がうじゃ〳〵して寢れさうもない。憩ふことも

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

出來ず又其處を出發した。痛い足を踏みつけて、やぶれかぶれの蹌踉を續けるうちに横に、熔岩流の黑い、かち〳〵した岩石の連續を見る事幾何して九合半に辿り着いた。時計を見ると五時少し廻つてゐた。

その室も相當な人出だ。もう夕食を濟したのか楊子を使ひながら、げら〳〵笑つてゐる人もある。黑い足の裏を一樣にこちらを向けて眠つてゐる人々もあるかと思ふと自分達の入つて來るのをじろ〳〵睨附けてゐる御仁もある。廣くもない室へどや〳〵と二十人の團体が入つて行つたので室は益々狹くなつた。

窮屈なダートルもリユックサツクも外して、安らかに寢そべつてゐると粗末な古机が幾つも合せて長く食卓と言つたあんばいに並べられた。飯だなと思ふと急に腹が空く。卓を圍んで今や遲しと待つてゐると飯が出る、菜が出る、汁が出る。匂の强い麥飯のびしや〳〵したやつを、ふー〳〵吹きながら食べた。

夕食後の散歩がてらに外に出て見ると、下界の展望も今は暗い夜の幕に閉されようとしてまだ半島の突出と、山々の隆起がかすかに見えゐる。一種淒味を持つて富士の斜面が下へ尾をゆつたりと引いてゐる。もう、この山を歩いてゐる者は無からう。靜寂其のもの〻樣に横たはる山肌から夜の冷氣が發散してゐる。

大分眠たくなつたので室へ入つて見ると其處は布團で一杯だ。坐つてゐる時は少々疊の存在も認められたが、から布團がずーずべつたりに敷かれると足場のやり所に苦しむ。雜寢して布團へ入つたのは良いが兩方から體を押されて眠れさうもない。がさう思つたのもほんの瞬間で、晝の疲れが、何時しか深い眠りに落ちてゐた。

朝、まだ薄暗いのに起されて頂上指し登り始めた。御來迎を拜まうと前にも後からも人の群が金剛杖を朝露に濕かせながら登つて行く。起きる時、高山病に罹つたなと思つた頭痛も朝の冷氣に打たれて清々しいまでに澄んでゐる。「六根淸淨――」「お山は近いぞ――。」と大聲をはり上げはり上げ、二十の健兒、全員悲なく頂上へ到着した。

頂上は物凄いばかりの人だ。表口、御殿場、東口、北口の四道からの登山者が集り集つて此の頂上に御來迎を待ち乘ねてゐる。小高い處に團旗を揭げた一團が、もう大分待つたと言ふ樣な顏して其處に居を構へてゐる、かと思ふと頂上の茶屋も押すな〳〵の人盛りだ。

茶屋の甘酒も後で頂くと言ふ料簡で、其の背で御來迎を仰ぐことになつた。淺間神社の御前で一禮をして、神社と茶屋の細い間を通ると其處に三千九百の峻峰をつゝ立てゝ劍ケ峰がぐーんと掘り下げられた大噴火口の底から、眞黑な崖を造つて聳え立つ。馬の背はその峻峰へ掛られた登山道だが、一方はお山の斜面へ、一方は噴火口へと崩れつて、さながら馬の背の樣に劍ケ峰へ續いてゐるのだ。

「もう、すぐ御來迎だ。」と言ふので皆緊張した瞳を强力の眺める方へ一樣に向けてゐると、外輪山の山々にも、傾斜にも人の黑い影が今か今かと待つてゐる姿が蟻の樣に見えた。

つと、一点。山の相間の地平線から薔薇の一朱が流れ出たと思つたのが見る〳〵うちに神々しい太陽となつた。瞬間「最敬禮」の聲が南條先生の口許から發せられた。あの鋭い聲に我々は深く深く頭を下げた。その後、耐久中學校の萬歲を高らかに聲をはり上げた時の愉快さ。さつきまで黑々ともり上つてゐた外輪山も今は一部の陰もない眞赤な太陽に照り映へて美しい隆起を見せ始めた。かうして朝は始つた。自分達も劍ケ峰へと馬の背を登り始めた。―(土岐竹夫生記)―

下山

劍ケ峰には氣象觀測所あり、冬季でも觀測に從事してゐる。電話線も引かれてゐる。此の時は丁度雲切れ下界よく見ゆ。南に愛鷹山・箱根山の連山あり。そのすぐ向ふには伊豆半島が突出し、その前には大島が横はり、三原山の噴煙濛々と立昇つてゐるのが手に取る如くである。その左には三浦半島・房總半島・駿河灣・相模灣が見え、西は雄大なる日本アルプスの山々連なり、その山々へ丁度富士山の影が今映つてゐる。更に北には遠く北アルプスが雲の間にみえ、東には關東の大平原がひろがり、實に雄大なる眺望である。この壯觀實に筆舌に盡し難し。これより自由行動、先づ第一に奥宮官幣大社に參拜しけんさきをいたゞく、多くの團体で一ぱいである。スタンプをおすもの、燒印をおすもの、三國一の甘酒を飲むもの、自分もこれで元氣づけ一同整列して下山。

下山者も蟻の行列の如くである。登つて來る者も多い。白衣の男女、各種團体が行きかふ。下山は愉快だ。一木一草も無き所をすべり走る。足をふみはづしてころげる者もゐる。七合目より砂走り、服裝を整へ走り出す、實に壯快スキーの如し。寶永山を右へみて、ぬきつぬかれつしてゆく。ざく〳〵〳〵、歩けば自然に走れてくる。四方見渡す限り砂ばかり、この中に馬に荷を積み昇つて行く人あり。さながら砂漠である。道には草鞋の切れたのを無數にほつてある。あまり元氣よく走つた爲か、リユックサツクのひもを切つたもの二人、强力にたのみ走る。かうして三合より五合迄競走で降りた。二合より植物が見えだす。いたどりの白い花が一面に咲き亂れてゐる。馬車が二合、三合とあちこちに見える。砂原を馬は元氣よくかけて行く。そのうち雲が襲來して來た。みるまに体はつゝまれた。あたりは見えなくなる。としばらくすればすうーと去つて行く。馬返しよりバスに乘る。切符には番號が記入されてゐて、番號順に乘車するのだ。車内で三列につめられ。動きも出來ぬ、足のおく所なし。斜になればなつたまゝだ。御殿場着十時頃、下山は僅か三時間だ。先づ食堂にて空腹をみたす。午前十一時廿七分發の列車に乘る。實にとんでゐる。沼津への途中車中より眺むる雪委富士、實に美しい。今我々はあの頂上迄登つていつてきたのかと思ひつゝ、列車道德を思ひ接目に立つたまゝ、さらば富士、西へ〳〵と列車は走る。途中田子の浦・清水港・靜岡市・濱名湖・名古屋城・關ケ原、夕方の琵琶湖景色よし。大津・京都・大阪驛と。大阪驛着午後十時、豫定よりおそくなり、東和歌山着午後十二時。その夜は三國一の夢を見つゝ、まどらかな眠りに就いた。―(鳥居生記)―

寄稿

陸軍幼年學校

新谷增一

陸軍幼年學校は畏くも明治天皇の聖旨に基き設立せられた學校にして、國軍將校たるに必要なる德操を涵養し、陸軍豫科士官學校生徒

稲むらの火の館所蔵 渋谷家文書 資料番号 9

たるの資質を具備せしむるのが目的である。

創設以來皇室の御殊遇を辱うすること一方ならず、明治天皇の御臨幸を始め奉り、皇族殿下の御成り侍從武官の御差遣等の光榮に浴し、東京陸軍幼年學校に御在邸あらせられし皇王公族殿下は十五方に及び毎年卒業に際し優等生に對しては銀時計御下賜がある。又本館正面には菊花御紋章を奉戴するを差許さるゝなど誠に感激措く能はざる次第である。

編成その他詳しいことは「大阪陸軍幼年學校要覽」を見ていたゞくことにして、校内に於ける一日の起居に就いて參考までに申述べて見よう。

五時半（乃至六時半）起床し、日朝點呼、乾布摩擦、洗面を了へて皇居、皇太神宮、靖國神社に對し奉り、最後に各々故郷にある父母に向つて遙拜をなし、勅諭を奉讀して今日一日を立派に暮さんことを誓ふ。校内には報國神社があり、楠公父子並に先輩の靈を祀つてある、こゝにも參拜をする。

朝食朝禮が濟むと暫く休憩、午前中の授業が始まる。修身、國漢、地歴、外國語（露・佛・獨）博物（一年植物、二年動物、三年鑛物）數學、理化、圖畫、習字（二年中期まで）唱歌等、中學校と大差がない。午後は術科、教練は二年の中期より執銃、實彈射撃も時々やる。劍術は基本よりやるが、特に「捨身攻勢」を貴び甲手・胴の如きは殆どない而ばかりである。柔道も基本から教へられ、体操なども始めから丁寧に說明されるのでどんな下手なものでも大振り位は出來るやうになるのは愉快だ。その後は隨意運動の時間とて各自自分の好きな運動をやる、樂しい夕食まで手入休憩、夕食後は又面白い。全員運動場に出て軍歌演習、號令調整をやる。この夏水泳期間中遠く湯淺の濱町まで轡いたといふあれだ。

酒保は水曜、土曜、日曜日に開かれる、生徒集會所に於て、親友達と大いに食ひ、大いに語り合ふのだ。今は一日十錢也と限定されたので、從來月曜日には腹痛患者が多かつたのだが、さういふ不心得者もなくなつた。

それから自習二時間で翌日の豫習を完全に果さなければならぬ。皆眞劍である。音一つしない。一日の反省、点呼が終つて午后九時半懐しいベットに入る、十時消燈。

同期生は生死を盟ふ兄弟である。「俺」「貴樣」で呼合つて心中を吐露して交はる。從つて一人でも不心得者があれば皆の責任である。忽ち鐵拳が飛ぶ。泣きながら掴ることが屢々ある。なぐられた者も喜んで受ける。かくして互に切磋琢磨して向上を圖るのである。しかし平常は極めて愉快だ。上級生下級生の間は兄弟の如く、上級生は眞に下級生を思ひ注意するが、暴力を振ふが如きは絶對にやらない。

ちと愛嬌をいふと、寢台襲撃といふのがある。他の寢台を襲つて荒して引上げて來る。寢台をひつくり返へす者、枕を投げる者、水をかける者、物凄い。最夜中に行くこともある。しかしこれは毎日やるのではないからそのつもりで安心してよろしい。

誕生日會毎月あり、その月の誕生日の者を祝ふ。職員生徒の和やかな會食に運動會は春秋二回催される。六班に分れて優勝を爭ふ。その他野營演習が一週間、步哨、斥候、實地訓練だ。游泳演習は御存じの

通り、乃木會、當日は御命日に當るので大將の御高德を偲び、立派な軍人にならうと覺悟をきめる。大楠公の戰死せられた五月二十五日は楠公會と稱し、湊川に赴き、或は金剛山に登つて公の誠忠を偲ぶ。特に我が大阪幼年校では最も盛大に行はれる。寒風肌を裂く十二月十四日、義士會の日である。非常呼集の合圖と共に防具をつけて運動場にとび出す。面々土器をつけて破られたら討死、勇壯深夜にこだまする裂帛の掛聲は義士討入の當夜を偲ばせるものがある。義士に關する講話がある。

次は訓練旅行、一年生は笠置山、名古屋、名良川、京都方面、二年生は山陰、山陽、北四國地方、三年生ともなれば九州一圓を巡り大いに見聞を廣める。

晝中稽古、寒稽古が各々一週間、助教（下士官）が多く來て試合教習ばかりである。生徒相互にやることは殆どない。

各學期末には武道大會がある。柔道は三年生のみの試合、劍術一年は基本、二年、三年は試合である。三人抜けば勇退、その者には後で賞品が渡される。優勝した運動班には優勝と書いた赤胴が渡される。

日曜は大抵外出する、附近には金剛山、赤坂城等楠公の遺跡が多い生徒は大抵こゝへ行くか、教官、生徒監殿を訪問して話を聞くのである。休暇の樂しさは故郷を遠く離れてゐる者でないと分らないであらう。一年生の頃は前夜眠れないことがある。以上が我々の起居の大要であるが、その間に軍人精神を涵養し、軍紀を練り、將校生徒としての修養に勵むのである。しかし四六時中堅くなつてゐるわけではない。時には失敗もあれば、面白いこともある。入學當時は誰しも少々窮屈を感ずるが、二年、三年となれば愉快なことばかりだ。どうか諸君の中からも續々本校へ志願されんことをお願する。要すれば一人殘らず受けて呉れても結構である。尙受驗者で何か聞きたいことがあれば、遠慮なく尋ねて貰ひたい。喜んでお答へしよう。

（附　記）

この夏、游泳演習で母校にやつて來た新谷君をつかまへて、今年で愈々最後だ、君の後繼者を是非出したいと思ふから、と有無を言はせず頼んだところ、君は一旦學校に歸り、非常に多忙な生活の中、筆を執つたのがこの原稿である。歸省の途次態々學校まで持參して呉れたのには驚いた。尙、本文中「大阪幼年學校要覽」とある一册は一生手許に預つてあるから、一覽したいと思ふ者は申出て貰ひたい。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

記念行事記事

創立九十周年記念式並記念行事概要

本校創立九十周年記念式典並に記念行事は時局柄、質素を旨としたのであるが大東亜戰爭完勝に向つて益々その臍を固め、これが体制準備に着々邁進せんとの決意から、校友會方面並に大方の絶大なる援助を得まして此に極めて盛況裡に有意義なる成果を收め得ましたことは洵に感謝と慶祝に堪へぬ所であります。

以下概要を記して御報告に代へ、併せて各位の御厚意に深く感謝すると共に後日の參考に資する次第であります。

一、記念式並に行事決定までの經過

第一回　父兄校友連合會　昭和十七年一月十七日

出席者（父兄會）川口會長、水崎副會長、加納氏、三輪氏、中島氏（校友會）久保會長、戸田副會長、古賀氏、鍬田氏、松下氏（學校側）佐藤校長、中井敎務野田氏、高居氏

所要經費　イ、增築費（縣へ寄贈の分）　五二、〇〇〇圓
ロ、祝賀行事費　八、〇〇〇
記念事業
イ、祝賀會費　六〇〇
ロ、記念講演會費　一〇〇
ハ、体育大會・展覽會費　二〇〇
ニ、慰靈祭費　五〇
ホ、グライダー及格納庫　三、〇〇〇
ヘ、映寫機・暗室設備　一、五〇〇
ト、圖書充實費　五〇〇
チ、記念雜誌　一、三〇〇
リ、印刷費　二〇〇
ヌ、通信運搬費　三〇〇
ル、雜費　二五〇
計　八、〇〇〇

經費支出方法
一、父兄會　イ、新入生特別寄附　一人宛　三〇圓
ロ、父兄會費通常會費　年　五圓
外ニ特別會費　年　六圓
（以上で年七、五〇〇圓、六年間で四五、〇〇〇圓）
二、父兄校友連合にて寄附金募集約　二〇、〇〇〇圓

第二回　父兄會役員會　昭和十七年一月二十四日

出席者　川口父兄會長、水崎副會長、花手啓三氏、濱口八十五氏、玄後氏、兒玉氏、加納長兵衛氏、上野山氏、上山氏、宮本氏、山下龜次郎氏、岩崎幸氏、原氏、中島英太郎氏、梶岡氏、中島氏、兒島氏、出島文衛氏、桑原氏、高垣照一氏

決議事項
イ、一月十七日、決定の經費醵出方法につき大体原案承認、但し戰歿者、傷痍軍人關係は入學特別寄附金及び增徵特別會費も半減すること
ロ、協贊會發起人會を開催すること、父兄總會を開催すること
ハ、父兄會々則を變更すること、功勞ある者は名譽會員として推薦すること
ニ、借入金を外の事情で增すやうなことは遠慮すること

第三回　校友會幹部會　一月二十五日

出席者　久保會長、戸田副會長、阿瀬氏、松本鎖氏、古賀久七氏、岩崎功氏、松下氏

學校側　佐藤校長、中井敎務、野田氏

決定事項　イ、協贊會發起人　人選
ロ、寄附金募集方法
地方別に割當額を定める
町村長に協贊會發起人推薦協力を乞ふ
最低額を五圓とす

第四回　協贊會發起人會　二月一日

役員推薦　會長　川口彌兵氏、副會長　久保清太郎、顧問校長　濱口儀兵衛、濱口吉右衛門、評議員　發起人全部

募集方法その他決議事項
郡　内　一〇、〇〇〇圓
郡　外　一〇、〇〇〇圓
東京、大阪方面へは係員出張のこと
郡内幹事、評議員會を左の日程にて開催
二月十九日　湯淺（廣・湯淺・南廣・津木・田栖川）
二十日　藤並（藤並・田殿・宮原・糸我）
二十三日　金屋（御靈、鳥屋城・石垣・生石・五西月）
二十四日　箕島（箕島・保田）

第五回　役員會　五月一日

出席者　川口會長、久保副會長、水崎氏、瀧田校長、中井敎頭

協議事項
イ、慰靈祭、記念式典、体育大會等につき準備その他具体的方法協議決定
ロ、グライダー及格納庫經費概算四、七〇〇圓實現邁進に決定
ハ、歴代校主、校長の額を講堂に掲ぐる件
ニ、勤續者表彰左記諸氏に決定
堤校醫、南條敎諭、野田敎諭、中井敎諭、島原敎諭
ホ、祝辭依頼、外部側役員選定の件
ヘ、講演會講師依頼の經過報告
前拓務次官　田中武雄氏御快諾の報に接す（五月二日）
和歌山高等商業學校敎授　土岐政藏氏御快諾下さる（五月七日）

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

第六回　役員會　五月七日

出席者　川口會長、久保副會長、水崎精一郎、古賀久七、中島英太郎、島田勝清、濱口八十五、玄後宇一郎、花手啓三、堀川正一、松下瑞澄の諸氏

協議事項

記念式當日の係員左記の通り決定依囑、最後の準備打合せをなす

耐久中學校創立九十周年記念祝典役員

顧　問　濱口儀兵衛、濱口吉右衛門、瀧田校長

會　長　川口彌兵衛

副會長　久保清太郎

一、總　務　中井敎頭

一、受付係　水崎清一郎、古賀久七、北村松丘、中島英太郎、島田勝清、（學校側）下田、九鬼、野田、岩崎、宮本（啓）

一、接待係　濱口彰太、濱口八十五、阿瀨卯兵衛、玄後宇一郎、楠部竹次郎、花手啓三

特別來賓（校長室）係　高　居

一般來賓（會議室）〃　林（繁）

父　兄（博物室）〃　南　條

校　友（物理室）〃　武　内

一、祝宴係　加納長兵衛、戸田保太郎、鎌卷勝二、山本英一、堀川正一、野田喜一、岩崎功、鎌田彌一郎、堀田健三、松下瑞澄（學校側）島原、古谷、樋口、野田、岩崎

一、講演及び寫眞係　高垣英一、浦清兵衛（學校側）河内、林（善）

一、展覽會係　宮地芳信、中井長二、（學校側）齊藤、掛川、宮本（佳）

一、生徒係　藤田、長濱

本校創立九十周年記念祝賀行事

祝賀第一日（五月九日）

○慰靈祭（於安樂寺、自午前九時）

○記念式（於講堂、自午前十時半）

○祝賀會（於武道場、自正午）

○記念講演會（於講堂、自午後二時）

祝賀第二日（五月十日）

記念体育大會

○劍道大會（於武道場、自午後一時）

○角道大會（於運動場、自午後一時）

祝賀第三日（五月十一日）

○全校マラソン大會（自午前九時半）

祝賀三日間を通じて

○先賢遺墨展覽會（於習字科教室）

○校友英靈の祭祀と同遺品展觀（於興亞館）

慰靈祭（五月九日、自午前九時　於安樂寺）

祝賀式を擧げるに先だち、廣村安樂寺に祭壇をしつらへ、我が學園の創立者關係者、職員、校友の物故者の靈を招きまつり、今日の歡びを告げ、感謝の誠を捧げ、其眞福を祈った。儀式は遺族、來賓、職員生徒參列のもとに、いと嚴かに且つしめやかに執り行はれた。

遺靈祭次第

一、入　場

一、一同敬禮

一、讀　經

一、校長祭文

一、燒　香

一、退　場

祭　文

本日茲ニ和歌山縣立耐久中學校創立九十周年記念式典ヲ擧グルニ當リ、清酌時羞ノ贄ヲ具ヘ、謹ミテ本校創立者梧陵先生・東江先生・明岳先生、並ニ容所先生ヲ始メ奉リ、物故セラレタル本校關係職員校友生徒、コトワキテ今次聖戰半バニシテ發キ護國ノ礎トナラレタル十四柱諸氏ノ英靈ヲ祭ル。

悲シク惟ミルニ本校創設以來實ニ九十年、天下稀ニ見ル校史ハ創立ノ精神ト共ニ脈々トシテ相傳ヘテ今日ニ至ル、誠ニ天下ノ偉觀、聖代ノ祥事ト謂フベシ。是レ偏ヘニ梧陵先生始メ創立先賢ノ卓拔セル識見、高邁ナル人格ト愛國ノ至情ニ負フトコロノモノタルハ固ヨリ、又歴代本校ニ職ヲ奉ゼラレタル先輩各位ガ協心戮力、以テ其ノ根基ノ培養ニ不斷ノ努力ヲ拂ハレタルト、生徒諸子又ヨクソノ精神ヲ体シ、切磋琢磨純美ナル校風ノ樹立ニ邁進セラレタルニ因ルモノナリ。今茲ニ創立九十周年ヲ迎ヘ多數貴顯ノ參列ヲ得テ之ガ記念式典ヲ擧グルニ際シソノ據ル所ノ遠クシテ且深キヲ憶ヒ先賢諸氏ノ偉德ヲ偲ビ思慕ノ情更ニ新タナルモノアリ而カモ今ヤ亡ク偕ニ今日ノ歡ビヲ分ツニ由ナシ吁嗟。

生等乏シキヲ以テ先賢諸氏ノ後ヲ襲ヒ光輝アル傳統ノ遺業ヲツグ。日夜兢々ソ念措ク能ハザルモノアリ、而カモ今ヤ國ヲ擧ゲテ有史未曾有ノ聖戰ニ從ヒツヽアリ。御民吾等方ニ報效ノ誠ヲ致シ聖代ノ鴻恩ニ對ヘ奉ルベキナリ又以テ先德ニ報イ奉リ後昆ニ傳フル所以ナラムカ。冀クハ在天ノ英靈永ヘニ加護アラムコトヲ。茲ニ謹ンデ贄ヲ布キ觴ヲ傾ケテ先賢故人ノ英魂ニ捧グ。

嗚呼雲山蒼々タリ江水洪々タリ廣浦ノ上松樹鬱蒼トシテ永ヘニ變ラザレドモ靈位仰グニ由ナク歎惜追慕ノ情盡クルナシ。願ハクバ英靈髣髴トシテ格リ饗ケヨ。

昭和十七年五月九日

和歌山縣立耐久中學校長　瀧田謙治

記念式（五月九日、自午前十時半　於　講堂）

數日來の寒雨に氣遣はれた天候も追々恢復、開式時には上々吉の式典日和。參集の有志校友父兄無慮六百は講堂に滿ち、次の式次によつ

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

て厳かに行はれた。

記念式次第

一、入　場
一、一同敬禮
一、國民儀禮
一、開式宣示
一、國歌齊唱
一、勅語捧讀
一、學校長式辭
一、祝　辭
一、勤續者に感謝狀並に記念品贈呈
一、校歌合唱
一、閉式宣示
一、一同敬禮
一、學校長挨拶
一、退　場

感謝狀

貴下ハ（昭和六年）本校ニ就職以來今日ニ至ルマデ勤續セラルヽコト實ニ十一年終始一貫專心職務ニ盡瘁セラレタル功勞洵ニ多大ナリ茲ニ本校創立九十周年記念式ヲ擧グルニ當リ聊カ記念品ヲ贈リテ感謝ノ志ヲ表ス

昭和十七年五月九日

中井英一殿

和歌山縣立耐久中學校
校友會長　久保清太郎
父兄會長　川口彌兵衛

嶋原清二殿　昭和六年就任
野田彰殿　昭和三年〃　十一年勤續
南條正次殿　大正十五年〃　十四年〃
堤清彦殿　明治四十五年〃　十六年〃
中井英一殿　昭和六年〃　三十二年〃
　　十一年〃

校醫

祝賀會（五月九日、自正午　於武道場）

大東亞建設の聖途未だ半なり難く、一億擧つて緊張の秋ではあるが由緒深き我が學舍が齡九十に達した時恰も增級てふ新躍進の歩を進め前途の洋々たるを望んだ今日、この歡喜、この感激、この感謝を共に交し偕に表さうとするのは我等の至情である。祝盃を擧げて大に歡び大に語つて、以つて彌が上の進展に精進するの臍を固める機としたいと考へ、茲に時局に即した簡素な記念祝宴を催した次第であるが、何しろ臨戰下の祝宴である。會場なる武道場は全くの裝飾ぬき、蜜柑箱に板を並べわたした食卓代用品は素朴そのものであり、其上に開かれた六百の折詰めは時局色豊かな麥飯辨當ではあるが、何がさて、いづれも學校愛で繋がつた舊知舊友、その上珊瑚海大捷の報を入れて歡談は盡きぬ。午後二時簡素にして、しかも歡び溢れたなごやかな集ひを閉ぢて、記念講演に移る。

記念講演（五月九日、自午後二時　於講堂）

祝賀記念講演として、和歌山高等商業學校教授土岐政藏先生と、前拓務次官（現朝鮮政務總監）田中武雄先生を煩はした。周知の通り兩氏とも我が耐久中學校々友である。

土岐先生は熱を罩めて諄々と「獨逸の復興と勝利」を說かれ、田中先生は諧謔混りに「大東亞建設と青年の覺悟」を語られた。共に聽衆に少かぬ知識と深い感銘を與へて午後四時半終了。

記念体育大會記事

劍道大會（五月十日、自午後一時半）

九十年の校史を語る綠濃き松林を傍に五月の碧空戒つて、そゝり立つ我武道場が今日の晴れの舞台である。中食がすむと遠來の劍士達も續々來場、選手控室は活氣を呈し、我等戰士の血沸き肉は躍る——。

戰しく並ぶ審判席、取圍む觀衆の顏々、竹刀振り馴れた我道場ながらも聊か面はゆい。零時半開始、相擧つ竹刀の響、勇しい掛聲、腹の底から絞出す氣合、凛とした審判先生の聲、思はず手に汗握る好試合續出の末、勝利の榮冠は左の三君の頭上に輝いた。

第三學年個人優勝　辻本高雄君（和工）　賞狀　三星會寄贈　竹刀三本
第四學年個人優勝　中　孝一君（耐中）　賞狀　三星會寄贈　竹刀三本
第五學年個人優勝　寺柚哲夫君（耐中）　賞狀　柚野氏寄贈　刀一振り

戰績左記の通り

◎參加校

高野山中學　海草中學　海南中學　和歌山中學
市立商業　吉備實業　和歌山師範　粉河中學
箕島商業　熊野林業校　和歌山工業　日高中學
和歌山商業　御坊商業　田邊中學　和歌山實業
本校

以上中等學校十七校の外
湯淺國民學校、田栖川國民學校、廣國民學校の三校參加

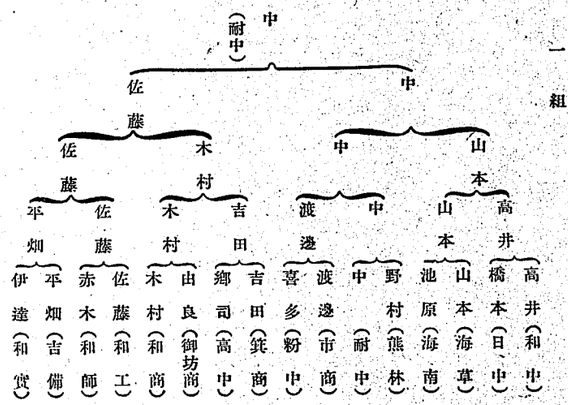
右校間に於ける個人試合の戰績左の通り
（○印は勝者、×印は引分け）

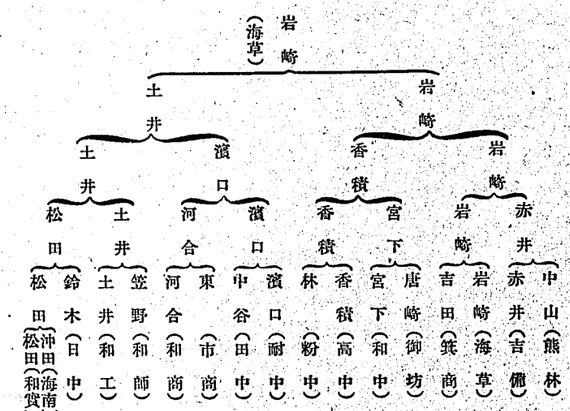
（高野山中校×木本　鈴木竹林）
（粉河中校○南條　井條）
（和中○仮校　本岩橋）
（本和師校○岩室　橋）
（海草中校○兒島實　岩橋）
（本吉備校○石原　赤井）
（吉備實熊野林○宮　岸前）
（和中○東校　山田）
（和商校○三輪村）
（本熊林校○中野　尾村）
（和工○辻校　梅本）
（市立商○東　中郷　司）
（箕商校×祖　楠本）
（和實○上校　湯原　垣）
（御坊商校×林　西田）
（日高中○北山　出本）
（海草中○山校　濱口　本）
（海南○中校　湯原　野）

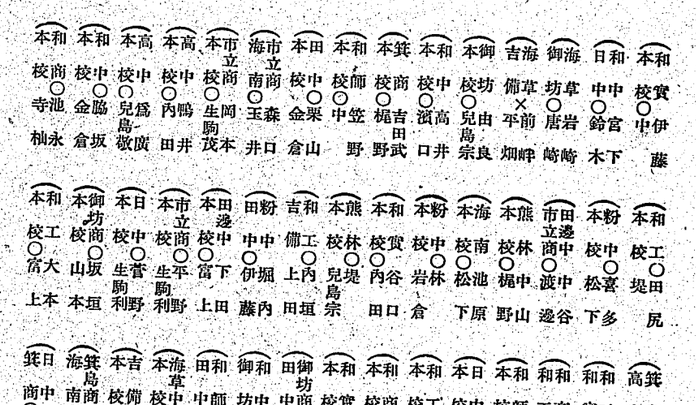
稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

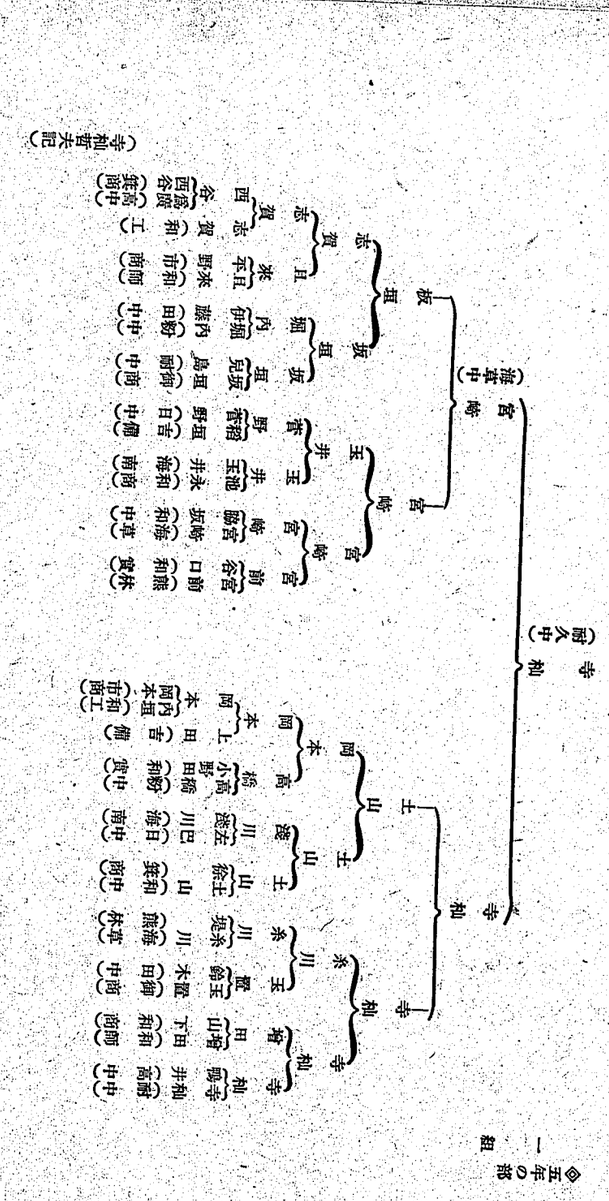
◎四年の部

一　組






和本（和實）
和田（伊藤）
粉本（高橋）
粉田（尻）
高筑（商中）
高筑（商中）吉田（稔）
和和（工商）
和和（實工）松村
和日（中商）
日中（中鈴）
海御（坊草）
海御（坊草）唐崎
海御（坊草）木下
海吉（備草）
海御（坊草）
海御（坊草）
海御（坊



角道大會（五月十日、自午後一時）

記念行事の一つとして、和歌山縣体育協會後援の下に、縣下中等學校相撲大會擧行。

時ならぬ寒さの添はつた雨天續きに、かねて氣遣はれてゐた此の日だつたが、壓前にはカラリと霽れて爽かな碧空。先日來の雨に惠まれて一層瑞々しさを加へた青葉若葉のそよぎ心地よく、眞に絶好の角力日和。野球スタンド前に新しくつらへた土俵を取圍んで身動きならぬ觀衆。スタンドも超滿員。正午開始、行司の軍配一閃忽ち起る肉彈の相搏。手に汗して息づまる一瞬。やがてドツと起る急霰の拍手。歡聲亦歡聲。熱狂する觀衆には晩春の永日も短し、午後五時終了。

取組左の通り　參加校（十二ケチーム）

和歌山商業　海草中學　和歌山中學　海南中學
和歌山工業　箕島商業　和歌山實業　御坊商業
高野山中學　耐久A組　耐久B組　粉河中學

本校選手

A組　先鋒　山下　勇　B組　久堀三郎
中堅　山名景造　小川昭一
大將　藤本從郎　川口眞治

取組及得点

第一回戰
2本校B組—1海草中學
0本校A組—3御坊商業
3和　商—0粉河中學
1和　實—2箕島商業
0高野山中—3和歌山中學
1和　工—2海南中學

第二回戰
1海草中—2箕島商業
3和歌山商—0和歌山中學
0和歌山工業—3御坊商業
1高野山中學—2粉河中學
1本校A組—2海南中學
2本校B組—1和歌山實業

第三回戰
1海南中學—2御坊商業
2本校B組—1箕島商業
3本校A組—0和歌山工業
0粉河中學—3和歌山中學
1和歌山實業—2海草中學
0高野山中學—3和歌山商業

各校得点

和歌山商業	九点	御坊商業	八点
和歌山中學	六点	耐久B組	六点
箕島商業	五点	海南中學	五点
耐久A組	四点	海草中學	四点
和歌山實業	三点	粉河中學	二点
和歌山工業	一点	高野山中學	一点

右の結果　和歌山商業・和歌山中學・御坊商業・耐久中學B組團体決勝に出場す

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

（團体戰）準優勝戰

3和　商　×御坊商
○原　田　端
○永　長　瀧　本
○島　天　野

優勝候補同志の對戰となつた。年若き爲に硬くなつたのか御坊商振はず零敗を喫す。

2和　中　1本校B組
○新　谷　×久　堀
×山　本　○小　川
○兒　玉　×川　口

先鋒久堀慎重に立上り突かけて頑張つたが引落されて敗る。續く小川縣下の强剛山本に右四つに取組み堂々內掛けにて倒す。次の川口責任重し、いさゝか硬くなつたか引落されて惜敗して、第三位決定戰に臨む。實力の差如何ともなしがたく勝を御坊商に譲る。

第三位決定戰

0本　校　御坊商業
×久　堀　○田　端
×小　川　○瀧　本
×川　口　○天　野

零敗を喫す。されど最後まで善戰猛闘して耐久健兒の意氣を遺憾なく發揮した。

優勝戰

2和　商　1和　中
先○原　×新　谷
中×永　長　○山　本
大○島　×兒　玉

優勝戰は和歌山の雄、和商・和中の兩校によつて月桂冠が爭はれ、終に和商堂々と勝名乘りを揚ぐ。

個人決勝戰以上の者によつて勝利の榮冠が爭はれた。本校より山名・小川・久堀・川口四君出場す。第一回戰山名君よく和中の新谷を倒す。第二回戰川口敗退、小川・久堀同志打ちにて久堀第三回戰に進む、山名破竹の勢で箕商岩根を倒し同じく三回戰に進む。久堀亦もや御坊商田端と出合ひ雪辱の意氣すごく攻立てたが惜敗す。山名優勝候補の永長に惜敗す。戰績表左の通り

個人決勝戰績表

第一回戰
山名（本校A）
山名（和中）
新谷（御坊商）
瀧本（海南）

第二回戰
西
山本（重田（和中））
北村（箕商）
北谷（天野（西））
谷口（海草中）

1天野
天野
天野（川口（本校））
天野（田端（御坊商））
天野（海草南）

2永長
田端
田端（久堀（小川（本校））））
田端（島田（和商））
田端（海草南）

永長
永長（和商）
永長（原（和商））
永長（名（本校））
永長（山名（箕商A））
山名（岩根（箕商））

優勝戰は天野・永長兩君によつて爭はれた。天野君若冠よく勝利の榮冠を擔ひ名を成す

第三位決定
○田　端　×谷　口

個人優勝者　御坊商業　天　野
第二位　和歌山商業　永　長
第三位　御坊商業　田　端

餘　興

正三人抜(中)　山下勇(本校)
正三人抜(大)　辻　井(和商)

マラソン競走　（五月十一日、自午前九時半）

記念行事の最終は我が六百健兒が久しきに耐ふるの意氣を示すマラソンである。校庭に並んだ白帽白衣の身軽いいでたち、少年部先づ山田コース（七粁）へと飛び出す。迫る呼吸流れる汗、皇軍將士の難苦偲んで耐忍又耐忍、一名の落伍もなく歸校。團体優勝記錄は青少年部共に數分の短縮を示した事を喜んで最後の行事を終へた。

記錄左の通り

青年部團体優勝（七粁）

組	平均時間
一等　五乙	五十分四十三秒
二〃　五甲	五十三分五十四秒
三〃　三甲	五十四分二十九秒
四〃　三乙	五十六分二十一秒
五〃　四甲	五十八分三十五秒
六〃　四乙	一時間二分二十八秒

少年部團体優勝（九・五粁）

組	平均時間
一等　二乙	三十五分〇二秒
二〃　二甲	三十五分〇五秒
三〃　一甲	三十六分二十秒
四〃　一乙	三十六分三十七秒
五〃　一丙	三十九分三十七秒

青年部個人記錄

組	氏名	タイム
一等　五甲	瀧川　隆夫	四十分十秒
二〃　三乙	中村　淳一	四十分二十三秒
三〃　五乙	吉松　健治	四十分四十七秒
四〃　三甲	三輪　昭二	四十分五十一秒
五〃　三甲	兒島　實	四十一分十七秒
六〃　四乙	畑中　邦雄	四十一分三十四秒
七〃　四乙	久堀　三郎	四十二分二十五秒
八〃　三乙	平松　貞昭	四十二分二十九秒
九〃　三乙	坂井　善治	四十二分三十一秒
十〃　四甲	森下　誠之	四十二分三十四秒
十一〃　五乙	栗山　勤	四十二分四十五秒
十二〃　四乙	西尾　夏生	四十二分五十三秒

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

十三〃　三甲　中野　正剛　四十二分五十五秒
十四〃　五乙　富上　魏　四十二分五十九秒
十五〃　五乙　亀井　千蔀　四十三分〇秒
十六〃　五乙　兒島　敬之　四十三分〇秒
十七〃　五甲　石井　正信　四十三分〇秒
十八〃　四乙　岡野　昭二　四十三分〇秒
十九〃　三甲　金澤　邦光　四十三分五秒
二十〃　五甲　金倉暎太郎　四十三分十八秒

少年部個人記錄

組	氏名	タイム
一等　二甲	宮井　弘次	二十七分十六秒
二〃　二乙	小林　圭司	二十七分四十九秒
三〃　二乙	兒島　博	二十八分二十三秒
四〃　二甲	千川　龜治	二十八分三十三秒
五〃　二乙	金澤　祥之	二十九分十二秒
六〃　二乙	三輪　哲	二十九分十四秒
七〃　一丙	楠部	二十九分二十二秒
八〃　二甲	梅本　哲夫	二十九分二十三秒
九〃　一甲	玉井　惟清	二十九分二十三秒
十〃　二乙	川口　利憲	二十九分三十七秒
十一〃　二乙	小川　英雄	二十九分三十九秒
十二〃　一乙	坂井　實	二十九分四十五秒
十三〃　二乙	石井　靖	二十九分五十二秒
十四〃　二甲	川口　一也	二十九分五十三秒
十四〃　二乙	北山　博昭	二十九分五十五秒
十六〃　一丙	原　明	二十九分五十九秒
十七〃　一乙	藤田　實	三十分〇秒
十八〃　一甲	松本　登	三十分〇八秒
十九〃　二乙	畑田　智秒	三十分十一秒
二十〃　二甲	見上　正敏	三十分十九秒

先賢遺墨展覽會（三日間、於習字科教室）

我が郷のはぐくんだ先賢及び我が學舎に縁りある故人の遺墨を一堂に展べて公開、我が先賢の風格を景仰し、我が學園の往昔を追懐するよすがとした。この趣旨に御賛同、秘藏の品を快く貸與下さつた諸家の御芳志は感謝に堪へない。

耐久中學校創立九十周年記念

先賢遺墨展覽會出品目錄

梧陵先生書翰　堀田孫三郎氏藏
容所先生書翰　〃
菊池海莊先生書翰　〃
梧陵先生處世訓手寫本　湯川　章治氏藏
鎌田一窓先生軸　〃
鎌田一窓先生軸　鎌田彌一郎氏藏
鎌田柳泓先生軸　〃
鎌田柳泓先生肖像（原在中鉢）　〃
石田冷雲先生軸　竹林秉三郎氏藏
竹林節翁先生軸　〃
野呂松盧先生軸　加納長兵衛氏藏
海上六郎胤平先生軸　宮田　誠敬氏藏
野田四郎梅僊先生軸　〃
賣山栽松良雄先生半切　〃
石田冷雲先生半切　〃
菊池晩香先生軸　〃
妻木蘇園先生軸　〃
石田冷雲先生軸　〃
鈴木氏（初代郡長）軸　〃
宮井橘村先生小点　〃
垣内白沙先生小点　〃
垣内已山先生小点　〃
宮原霞川先生半切　〃
菊池若溪先生額面　〃
垣内閑牛先生短册二　〃
橋本射山先生短册二　〃
北圓有親先生全紙二　〃
〃　折本　〃
野呂松盧先生半切　〃
吉田安年先生短册二　〃
本居山人先生小点　〃
僧光齋先生小点　〃
馬上游江先生小点　〃
妻木梧溪先生小点　〃
平田孝信先生小点三　〃
橋潭先生小点　〃
千川知方先生小点　〃
松原淳先生小点　〃
池永右翼先生小点　〃
青石介先生小点　〃
菊池海莊先生軸三幅對　玄後宇一郎氏藏
海上六郎胤平先生短册二　岩崎　功氏藏
賣山栽松良雄先生書翰　泉　平兵衛氏藏
岩崎明岳先生軸　〃
僧無方先生軸　福　藏寺氏藏
濱口濂圓先生軸　北村　松丘氏藏
宮井担齊先生軸　〃
菊池海莊先生肖像妻木蘇園賛　本　勝　寺氏藏
岩瀨可隆作　山下竹三郎氏藏
石田冷雲先生軸　〃
垣内已山先生書翰卷物　〃
馬上游江先生軸　西尾　秀氏藏
濱口容所先生軸　〃
中山長穂先生短册二　〃

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

北岡有親先生寫詩本　一
桂劍集（廣村八景）　仝
橋本柑園先生軸　仝
岩崎明岳先生軸　濱口　惠璋氏藏
天洲濱感恩碑拓本　仝
渡邊運治先生額面　仝
渡部越山先生軸　仝
狩野芳龍先生軸　仝
濱口惠琳先生軸三幅對　仝
寶山栽松良雄先生書翰三　仝
市川勇氏ヨリ寶山先生ヘノ書翰　仝
耐久學舍略則一枚刷　明治三十年四月刊　仝
耐久學舍規則書　明治三十六年四月刊　仝
私立耐久學舍一覽　明治三十八年十一月刊　仝
仝　明治四十年十一月刊　仝
大正四年—仝八年　運動會競技次第四　仝
菊池海莊先生軸　小賀　久七氏藏
仝　額面　仝
岩崎明岳先生額面　耐久　中學校藏
濱口容所先生額面　仝
海上嵐平先生軸　仝
耐久舍揭示明治四年額面　仝

耐久舍學則仝額面　仝
以上　九十点
外ニ安樂寺本堂陳列ノ分、全部安樂寺濱口惠璋氏藏

○梧陵先生八幡社境内碑文拓本
○松岡環翠館桔梗圖梧陵先生ニ贈ル
○溪菜先生ヨリ松灣先生ヘノ書翰
　梧陵先生ヨリ松灣先生ヘノ書翰
　溪菜先生ヨリ梧陵先生ヘノ書翰　一幅
○容所先生七律　一幅
○居幻舍條約（安樂寺十一世松巒先生）　一幅
○松灣先生遺韻（安樂寺十三世）　一幅
（松灣ノ七絶、松灣ノ辭世短册二
岩崎豪邱ノ追悼文、追悼俳句八枚）
○松塘遺墨帖（安樂寺十五世）
　黄仲祥ヨリ松塘ヘ　一幅
　松塘扇面山水圖二
　松塘詩箋七絶二
○石田冷雲先生ノ耐久讃舍額面　一幅
○松塘先生芭蕉圖　一幅
○求古堂先生「天鑑無私」ノ四大字　二幅
○仝「雅言」ノ二大字　一幅
○仝　和歌短册五枚　一幅
○求古堂先生一行書　一幅
○仝　遺愛大硯　二面
○仝　遺愛大筆　一本
○大江龍眠先生横物大字　一幅
○仝　一行書　一幅
○黄仲祥先生青綠山水圖　一幅
以上

興亞館（三日間開館）

黒潮躍る那耆灣頭、鬱蒼と茂る老松の蔭にそゝりたつ我が學舍にめぐり來つた創立九十周年の佳き日、この榮ある年を記念として呱々の聲をあげたのが實に我が興亞館である。

思へば支那事變勃發以來東亞に對する認識が一般國民の間に叫ばれ日々此の運動が盛となつて來つゝあつた時、恰も昭和十六年十二月八日、米英に對する宣戰の大詔が下されたのであつた。或は比島に、或は印度に飽くなき搾取政策を行ひ來つた米英撃滅すべしの聲が全國津々浦々まで漲つたがそれと同時に大東亞に對する認識を益々深めざるを得なくなつたのである。これより先、皇紀二千六百年記念事業の一として我が校は興亞館設置を計畫し、縣下中等學校に率先して次代の日本を雙肩に擔つて立つべき、我等青少年學徒をして一人殘らず東亞を深く理解せしめんとした。幸に、先輩にして戰死せられた勇士遺族の御高配と同窓並びに生徒一同の熱意と學校當局の援助により本校創立九十周年記念式を卜して開館の運びに至つたのである。興亞館は周知の通り二年敎室の下の廊下の突當り即ち今迄書籍部のあつた所が改築されて定められた。我等班員休みの間も九鬼先生のお手傳ひをして興亞館の整備に微力を盡した。創立記念日が近づくに從つて段々興亞館の名にふさはしく整備された。興亞館の目的や將來等を思ふと、体の内に何かひしれぬ一種の力が湧き上つて來るのを感じるのであつた。かくして創立記念の日は來た。班員一同朝早くから待機してゐた。「どんな評判だらうか。」そんな考へが皆の頭を去來してゐた事であらう。しかもそれは一瞬の内に喜びとかはつてしまつた。參觀者が皆一樣に奇異の眼をみはつて感嘆の言葉を放つてゐた。我等一同之を聞いた時どんなにか喜んだ事であらう。

今靜かに館内を眺めて見れば正面奥に鎭座ましますのは、日支事變並びに今時大東亞戰爭に護國の華と散られた今は亡き諸先輩の面影、じつと大東亞共榮圏の建設されつゝあるのを黄泉の世から眺められてゐるのである。更にその前面には參拜者をして感激措く能はざらしめた種々の故勇士の遺品、或は血まみれの軍服、或は弾痕殘る靴、帽子等々が所狭き迄にならべられてゐる。開館した時の事であつた。或中老の婦人が參拜せられた。正面にかゝげられた遺影の内の一点に婦人の目は釘づけになつて動かない。我々ははつと胸をつかれた。「遺族の方だ」との直感が皆の頭に等しく作用したのか一度に靜かになつた。やがて婦人は長い合掌の後おもむろに前面の遺品陳列へ移つた。我が子のありし古をしのんでゐるのか將また戰死當時の事を考へてゐるのか血染めの遺品の前に立ちつくされてゐられる。やがて婦人は遺品の前を離れて伏目に退館せられた。これを拜見した我々班員は感慨無量措く所を知らなかつた。亦此の館には東亞の風俗・地勢・産業・民族等を示す模型人形・繪葉書等我々をして自ら大東亞に深い關心を持た

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

しめる物が數多集められてゐる。

誰かゞ冗談に「一番良いのは興亞館だ」と言つたが眞に當館こそ我校の中で異彩を放つものゝ一つであらう。聞く所によればこの樣な設備をした學校は縣下にも極少數ださうだ。

我々班員は愈々之を充實させ發展せしめて、天下の興亞館と爲さんと努力してゐる次第である。九鬼先生を班長として一致團結して「眞の東亞に對する認識」をモットーとして研究して行かうと思つてゐる次第である。何時かも九鬼先生が興亞班員が中心となつて時局研究等をしてはどうか。とおつしやつた。我々は是非さう言ふ事をやつて見たいと思つてゐる。翼くは諸君がどうかこの主旨を知り、僕等の陣營に多數參加せられて、興亞班員の興亞館ではなく全校生徒の興亞館として活用せられん事を。最後にこの興亞館建設に努力せられた諸君に對し深甚の敬意を表して筆を擱く次第である。（和中・上田記）

記念事業

滑空班創設の記

掛川記

滑空班を創立してはといふ話が出たのは、確か昭和十六年の五月頃だつたかと思ふ。

誰からともなくさういふ論が出て來た。時代は學校にも何らか新しいものを求めてゐたし、學校自体も何とかして新時代の要望に添はなければと云ふ氣持があつた。その現れが滑空班を創立しようといふ話になつた。私は勿論大いに贊成した。新しい時代は空の時代であり、その空への憧れをみたす最もよい施設は滑空班の創立であると信じてゐたからであつた。然し正直を云ふと、私自身、グライダーと云ふ名はよく聞いてゐたが、それがどんなものかと云ふ事は殆んど知らなかつたのである。たゞ時々新聞で寫眞など見たりして、あゝこんな形のものか位の甚だ淡然としたものであつて、ましてやそのグライダーが何十時間も發動機なしに上空を飛翔しうるものであるといふことなどに至つては何も知らなかつたのである。ではその私がどうして滑空班の創設が必要であると思つたかと云ふと、それは先程も述べた通り、生徒らの空への憧れをみたし、且は將來の日本の空の護りにしようと思つたからであるが、それと云ふのも實はある一人の熱心なる友人の勸めによるものなのだ。

話は横道にそれるやうだが、その事も茲に述べて置かなくてはなるまいと思ふ。

昭和十五年の夏、私は東京で遇然の事から一人の友人に會つた。それは東京帝大の航空學科の助教授をしてゐる某君である。私は中學を同じくするところから、殊に中學時代仲のよい友人であつたところから、大いに愉快になつてお互に話をしたのであるが、その話の中に、グライダーが出て來たのである。その友人は、自分は今、學問の實際上の研究から大學のグライダー部に入つてグライダーをやつてゐるが、これは實にいゝ訓練である、だから中學でも是非早く機体を購入して滑空訓練をやつて貰ひ度いものだといふことを熱心に私にすゝめてくれたのである。私は元來かういふ方面の事は好きではあつたが、何分自分が、文科方面を專攻するものであり自分には到底その素質がないと思つてゐたので、勿論その時いゝ事だとは思つたが、深くもきかずそのまゝにしてきたのだつた。ところが、昭和十六年四月、これ又不思議な緣からこの耐久中學へ來たのであるが、來てしばらくしての職員會に滑空班の話が出たので、前年の夏の事を思ひ出して、大いに贊成をしたのであつた。

さて、さういふ話が出た事は出たが、何しろ第一が費用の問題であ

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 9

り、第二に指導者の問題があつて、とてもそれは實現しさうにもない話であつた。が然し、とにかく、どうしたらグライダーは購入出來るか、どこからどの位の補助があるかと云ふ事だけは必要だと思つたので、知人の某助教授に手紙を出してきいておいたのだつた。

それから二ヶ月經つた。七月のある日、校長先生がお呼びになつたので行つてみると、實は今度縣の主催で滑空訓練の指導者講習會といふのがあるがそれに出掛けてくれないか、何しろかういふ講習は、好きな人でないと續かないが、幸に君は好きなやうだからどうかといふお話であつた。私は突然なのでびつくりした。それに勿論私として、別に嫌ひと云ふ課ではないが、きりとて好きだとも云へない、それに第一素質といふ問題になると全然自信がない。そこで私はさあ、どなたかもつと適任者がおありでせうからと云つて一應辭退したのである。そこで希望者がないかと諸先生にお話があつたが、何しろ突然なので、どんなものかわからないので誰方もなかなか申出でられない。從つて又私のところへ話が來た。私は始めからの行きがかりもあるし、ではといふ事で引きうける事にした。かうして八月一日、眞夏の盛りを私はその講習に出掛けて行つた。そしてそれから二十日間、私にとつては生れてはじめての空の猛訓練がはじまつた。それもどうやら無事に終つた。終つて得た結論は、この訓練こそ生徒にもつともいゝ時局向きの訓練であると云ふ事であつた。私はさういふ信念を得て秋の學園へ歸つて來た。そしてどうにかしてグライダーが買ふことが出來ればと、それのみ考へてゐた。ところがとゝにいゝ事があつて、私の夢は實現してくれたのである。

それは本校の九十周年の記念事業の具体的計畫が着々と進んで、その中に、時局柄最もよい事業として滑空機購入、附屬設備の完備と云ふ事が加へられたのである。丁度いゝ事があつたもので、若しこの九十周年の事業がなかつたらなか〳〵容易でなかつた事を思ふと、これは正しく救ひの神であつた課だ。尤もこの中へ加へていただけたのは校長、教務主任の先生方の御力と、それを理解協力して下さつた記念事業の委員の方々であつた。將來滑空班が大いに盛んになつたらそれは悉くこれらの方々の御力であり、又あらゆる記念事業支持者の御蔭であると思つて感謝を捧げねばなるまい。

とにかくかうして愈々具体的な第一歩がはじまつた。丁度この頃、來年から滑空訓練は教練の正課の中へも入るだらうと云ふ話も起きて來た。

それから機体購入その他についての仕事がはじまつた。私はその係りを任命されたが、初めてなのと、とかく愚鈍なのとでうろ〳〵していた。でもどうやら、佐藤校長先生などの御力で、和歌山市の岡市といふ會社と購入契約を結ぶことが出來た。滑空機は何しろ單なる一つの道具などといふ簡單なものでないので實にいろ〳〵な書類が必要であり手續を要した。

さうして愈々實際の滑空機が二台本校へ姿を見せてくれたのは、三月の末であつた。

意外に早く手に入つたので本當によかつた事と思つてゐる。そして愈々晴れの九十周年記念式當日は、見事に兩翼を張つた姿が人々の前に現れた。

九十周年に集つて來られた人々は大よろこびで見て下さつた。それは丁度今後の滑空班の盛大を祝福して下さるやうに私には思へたのである。

大東亞戰爭勃發以來航空の重要性は更に倍加した。從つて滑空班の重要さも從來の比ではなくなつて來た課である。

滑空班も機体の組立、分解、地上操作の練習などと云ふ仕事を一歩づつ進めてきた。

七月には又滑空班に强みが加はつた。と云ふのは古谷先生が又滑空訓練講習會に出かけて下さつたことである。縣主催の二十日間の猛訓練である。先生は優秀な成績をもつて歸つて來られ、新に當班へ入つて下さつた。これこそ滑空班の幸せであつた。先生の優秀なる技術と眞摯なる精神とは、この班の模範ともすべきであつて、班員は先生の御指導によつて更に躍進すべきものと確信して疑はない。私も先生の御指示によつて新知識を得て行き度い。そして共々に滑空訓練への熱意を捧げて行き度いと念願してゐる。

今、滑空班は六十名の班員を持つてゐる。そして未だゴム索が航空局の方から配給になつて來ないので實際の訓練は出來ないでゐるが、既に各班員とも一通りの基礎訓練が濟んで張切つてゐる。その上有難い事には現校長瀧田先生が非常なる情熱を以て御指導をして下さつてゐる。これで伸びなければ、それは班長と班員の責任である。私は從來の行き掛り上班長といふことになつてゐるが、果してその責任を果しうるかどうか實はそれをのみ心配してゐるのだ。

以上記して創設の覺え書きとして置かう。——終——

圖書充實事業

河内記

學校圖書は年々百九十圓乃至二百圓程度の縣費で賄つて來たのであるが、これでは到底學科全般に亘る充實を期することは不可能であり日進月歩の時代に即應する施設などは、況して望むべくもない狀態にあつた。それに本校藏書の中には當然更新せねばならぬ部分が頗る多く、之が資に充つるにやうやくといつた現狀で、圖書室のさびれてゆくことは堪へ難い苦痛である。それで圖書室に關係するやうになつてから一通りの整備をして何とか教育の源泉としての役生を果したいものと考へもしてみたのであるが、これにはどうしても纏つた金が必要であり、萬事相談もそこから再出發せねばならぬといふ結論に到達したわけである。

今春九十周年記念の祝典を擧げられ、時局下ながら協賛會の方から多大の御援助があつて各種記念行事を計畫することゝなり、此處に多年の念願であつた圖書室の充實といふことも天日を仰ぐに至つたわけである。

總額五百圓、委員として九鬼・樋口兩先生に小生と三人が命ぜられ愈々計畫實施に取掛かることが出來た。以下計畫の概要と今日までの經過とを概記して報告に代へる次第である。

一、準　備

四月初旬、委員の顔振れも揃つたので、先づ第一回準備會合を開い

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

で先づ各學科に亘りその希望圖書の提出を御願ひすることゝし、併せて門外のものでも、是非學校に備付けて欲しいと思はれるものの申出を願つた。

三、選定

右の結果集まつた希望圖書の總額は、その中より先づ生徒用とも見らるべきものは、これを別要し、門のものでも必備の書の中、額の纏つたもので、不生徒出困難なものは、その結果大体左記の書目を作製した譯である。（○印は入荷）

部門	書名	卷數	著者	發行所	定價
○物象	物理學實驗法講義	下	池水野本國義夫郎	培風館	五、八〇
○ ○ 〃	〃 理論化學實驗法	一	松野吉松	山海堂	四、〇〇
○ 〃	〃 無機化學	一	白崎亨三	國勢社	三、〇〇
○ 〃	〃 無機化學	一	高木貞二	岩波	七、〇〇
○ 〃	〃 數理物理學	一	田中敬二	内田老鶴圃	三、五〇
○數學	ナンテン實用解析學	一	宮西	冨山房	六、〇〇
○ 〃	〃 函數とその表現	一	松近小	山海堂	三、五〇
○ 〃	〃 應用微分積分學	一	高木貞	冨山房	五、七〇
○ 〃	〃 力學汎論	一	佐藤清穆	内田老鶴圃	六、五〇
○ 〃	〃 ベリー初等實用數學	一	新宮恒太郎	山海堂	三、五〇
○ 〃	〃 ベリー初等實用數學	一	佐藤清穆	内田老鶴圃	六、五〇
○ 〃	〃 力學汎論	一	高木貞	冨山房	三、八〇
○ 〃	〃 應用微分積分學	一	松近小	山海堂	三、五〇
○ 〃	〃 函數とその表現	一	宮西	冨山房	五、七〇
○ 〃	〃 ナンテン實用解析學	一	田中敬二	内田老鶴圃	三、五〇
○ 〃	〃 數理物理學	一	高木貞二	岩波	七、〇〇
○ 〃	〃 無機化學	一	白崎亨三	國勢社	三、〇〇
○ 〃	〃 理論化學實驗法	一	松野吉松	山海堂	四、〇〇
○ 〃	〃 物理學實驗法講義	下	池水野本國義夫郎	培風館	五、八〇
○ 〃	〃 光學	一	大和野尻	高等學校教科書刊行會	一、〇〇
○ 〃	〃 光學	一	柴田抱邊	松雄堂

○〃　建武中興の本義　一　平泉　澄　至文堂　二、〇〇
○〃　菊池勤王史　一　〃　菊池氏勤王顕彰會　二、〇〇
体操　体力向上講座　全八卷　文部省保健衞生協會　二八、〇〇
累計　金四百七十九圓八十八錢也

さて購立は出來たものの、良書を手に入れるには仲々困難の時勢となり、書店を通じて坐らにして入手を待つのでは到底駄目と知つたので、和歌山・大阪の古本卽賣會にも出張し、終日天生その他の本屋も漁つてみた。それでかなり調へることが出來たが、殆ど絶望に近いものは科毎に先生にお願ひして目錄の變更を余儀なくされたものもある。未着のものについては書店よりの確答を待つて同様の手續きを採る考へであるが、兎も角かうして漸次圖書室の充實を見ることが出來たのは誠に欣ばしいことで、協賛會各位に深く感謝する次第である。

映寫機購入

時局認識情操教育理科研究のため、從來備付けの映寫機の外に、もう一台新鋭映寫機を購入したいものと企圖してゐたところ、記念事業ヤ商事より金鵄號一台（五九〇圓）を購入した。更に好都合なことに壊でも利用することが出來るやうになつた。八月の合宿錬成の際には第一回の他としてニュース及び「爆音」を上映した。調子は仲々上乘であつた。以後隨時利用して品性陶冶研究增進に資する考である。

耐久中學自彊寮の記

時局下段々と下宿難が加つて來たのと、安心して子弟を托せる所が是非欲しいとの遠隔地の父兄方の切なる要望があつて、前校長佐藤先生並に中井先生の非常な御盡力により、幸にも湯淺町本町篭門眼科醫院跡が二階の全部九室と階下三室とが借り受けられたので、再びその昔の耐久社の精神を日常生活の中に具現せんとその名も自彊寮と名附けて、生徒十七名が此處を家庭的修養道場として四月五日よりその第一歩をふみ出したのであります。藤田・下田兩教諭が寮の係となり、藤田教諭は外より、下田教諭は家族共々生徒と起居を共にして、相たづさへて鋭意寮生の向上に努力してをります。幸ひ一同よく其の意を体し、自彊の名に恥ぢず上級生垂範の下に下級生亦よく勵み歩一歩向上の跡の見えます事は喜びにたへません。

早朝全員揃つて冷水摩擦をし美化作業を了つて朝禮を行ひます。宮城を遙拜致しますが時には勅語や勅諭を來唱して盡忠報國の誓を新にし、その後で元氣一杯に体操をしたり駈足をしたりして常に健康の增進に心がけ、夕食後は天神山に出かけて詩吟に、號令調整に青年の意氣の昂揚に努め、又夜禮の時は暫く心靜かに故郷の父母の上に思を致して、その恩を謝し期して孝なる子とならん事を祈るのであります。

土曜の夜には常會を開いて和氣藹々の中に建設的意見の開陳を行ひ陰雨そぼ降る夜を見ては試膽會を開く等大東亞の指導者としての腹のすわつた日本人を目指して精進を續けてゐます。

何分にも物資の不足勝な時に開設されました事とて經營に就ては色々と心配致しましたが當局の御理解や大方の御同情によつて至極順調に進み、寮生の父兄方も當地に御越の節は寮にお泊り下さり親しくその生活振りを見て御安心をいたゞいて居ります。以上簡單に寮生活を記しましたが創設日淺く設備も不十分であり、係も亦不敏な者でありますから先輩各位の絶大なる御後援と御鞭撻をお願ひする次第です。

最後に此の寮開設に當り九十周年記念事業費より三百圓を戴きました事を記して御禮にかへる次第です。

馬術班の創設

時局の要望と學校の理解、生徒の熱望の三味一体が、野田教諭の御盡力で實を結んだのが昭和十三年一月。併し學校馬のない關係で地方有志の御好意と有田愛馬會の御後援とで、乘馬を借用してゐた謂はゞ借家住ひの狀況であつた。それで本年七月一日、軍馬貸付願を大阪師團に申請したのだが、軍の御仕事は早いもので、同月十九日に貸付馬一頭（玉山號）が到着した。

厩舍も既に湯淺町平林組が請負ひ、大日本騎道會にも連絡をつけてある。此の厩舍も九十周年記念協賛會から一千圓の多額を御補助頂いたので本年中に建ち得るのである。實に感激に堪へない。

幸にも學校長は其の鮮かな乘馬振りでも知れる熱烈な御好意を寄せられてゐるし、生徒全般は乾草作製の奉仕でも愛馬精神が培られて心強い事限りない。

皆新しいものが出來上つた。かうして諸方の御援助に加へるに班員の熱心さにも心が動かされるものがある。我々は騎道を通じて皇國民の錬成をなさうとしてゐる。假令規模小なりとも其の實質と精神に於て日ならずして天下の耐久馬術班となる事を期待し、更に御後援を希ふものである。

尙末筆ながら右事情の終始、大日本騎道會和歌山縣支部、有田地方事務所畜産課の絶大な御厚志は永く忘れ得ぬものである事を特記し度い。（樋口）

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

校報

學校暦

◇昭和十六年　四　月

六　日　新學年初會議
七　日　始業式、掛川、九鬼兩先生の新任式
八　日　新入生對面式、補習授業開講式
十　日　鄉土學友會入會式
十一日　度量衡制定記念日、沛田先生記念講演
十二日　廣村招魂祭（午後一時）劍道、角力部奉納試合
十四日　身体檢査開始
十八日　配屬將校櫻庭大尉着任せらる
二十日　相撲部　御坊國民學校主催中等學校對校試合に出場
廿一日　北井先生新任式、梧陵祭、崇義團結成式、劍道奉納試合
廿五日　靖國神社臨時大祭、遙拜式、學校修練組織委員會
廿六日　父兄會役員會
廿八日　本日より國民健康增進運動
廿九日　天長節拜賀式、劍道部竈山神社第十六回近府縣中等學校奉納

試合、馬術部有田愛馬會大會に出場

五　月

二　日　全校マクリ服用
三　日　博物科研究授業（野田先生）マクリ服用
四　日　角力部縣招魂祭奉納試合に出場
五　日　國漢科研究會第三區打合せ會、教學修練組織部長班長決定
七　日　春季マラソン大會、山縣、兒玉兩先生告別式
八　日　創立記念式、崇義團初會合
十一日　和歌山射擊大會に出場、馬術班本校に於ける馬事大會に參加
十五日　中間考査開始
十九日　製本宮同妃兩殿下南紀御視察、學校長奉送迎
二十日　紀南教護聯盟有田支部打合せ會
廿二日　青少年學徒ニ賜ハリタル勅語奉戴記念式、勅語謹書
廿四日　模擬考査
廿七日　海軍記念日、防諜週間につき訓話
廿八日　父兄會、勝丸先生新任式
廿九日　父兄會
三十日　縣下國漢科研究會會出席のため、學校長、河内、菅原、掛川諸先生新宮中學校へ出席

六　月

二　日　今上陛下本縣行幸記念日に關する謹話
五　日　李王殿下奉迎送、醍醐侍從武官奉迎送
七　日　全校鄉土別勤勞奉仕作業
八　日　全校勤勞奉仕、角道班御坊商の試合に出場
十　日　時の記念日
十二日　「梅雨現象について」九鬼先生の朝禮訓話
十三日　崇義團奉仕作業
十四日　英語コンテスト、崇義團奉仕作業
十六日　角道班和商主催縣下中等學校相撲大會に出場、安田總務部長初巡視來校
十七日　体力檢査開始
十九日　縣參事會員會計檢査のため來校、食糧增産作業
二十日　總法要項配布、貯蓄强調週間開始
廿二日　角道班和中土俵開きに出場、劍道班武德會有段者會主催縣下大會に出場
廿三日　食糧增産作業、學校水田掃秋
廿七日　宮城外苑美化工事投へ全校生徒より醵金
廿九日　劍道班縣体育協會、文部省主催劍道大會豫選及び近府縣中等學校劍道大會豫選へ出場
三十日　水無月祓につき朝禮訓話

七　月

二　日　期末考査開始
四　日　操行會議
五　日　郡內中等學校長會議（於本校）
七　日　日支事變四周年記念日行事
九　日　甲種豫科飛行練習生募集に關し、大阪地方海軍人事部海軍少佐牟井安太郎氏の講演、水泳開始
十　日　健康增進に就て阪大講師醫學博士岡崎規矩一氏外阪大生の講演
十二日　戰線慰問文作製、古レコード回收
十八日　全校大遠泳
十九日　終業式
廿一日　特別心身鍛錬開始（山林作業、各班運動大會、夜行軍）
卅一日　心身鍛錬終了

八　月

一　日　掛川先生滑空訓練に參加、伊中へ出張、大阪陸軍幼年學校生徒本校に於て合宿
六　日　幼年學校訓練狀況見學
十六日　第二次心身鍛錬開始、補習授業開始
廿一日　簡閲點呼見學
廿六日　受驗につき先輩生徒座談會
卅一日　縣下水泳大會に出場

九　月

一　日　始業式、福田先生新任式、宿題考査
二　日　生徒役員任命
七　日　競技班神宮大會豫選會に出場、角道班日高郡松原村試合に出場優勝
八　日　小山先生離任御出發見送り
九　日　北井先生病氣御退職

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

十　日　武内先生新任式
十三日　映畫「美の祭典」見學
十五日　學務部長來校視察
十六日　晝食後の休憩時に銃劍術、射擊の基本練習を行ふことに決定
十八日　滿洲事變記念日、眼の記念日に當り赤十字病院に於ける無料檢診を受く
十九日　四、五年聯合演習
二十日　航空記念日に就き學校長、掛川先生の講話、榎本先生告別式
廿一日　縣下中等學校体育大會、明治神宮体育大會豫選會に出場
廿二日　學校報國隊結成式
廿六日　小林縣視學視察のため來校、歴史科研究授業（勝丸先生）
「世界旅行談」山田氏講演
廿八日　野球班田中へ遠征

十　月

三　日　和歌山往復九十粁行軍決行
六　日　學校長海軍航空講習會に出師
十二日　体育大會
十八日　靖國神社臨時大祭第三日遙拜式
廿四日　中間考査開始
三十日　勅語奉讀式、勤勞作業第一日
卅一日　勤勞奉仕第二日、第五學年特別授業開始

十　一　月

一　日　射擊査閲、勤勞奉仕第三日
二　日　勤勞作業第四日
三　日　明治節拜賀式
五　日　勤勞奉仕第五日
六　日　勤勞奉仕第六日
七　日　第五學年生紀南中等學校、青年學校聯合演習に參加
十　日　從來の日誌當番を廢し、日直の制度を設く、中央教化團体聯合會參與伊豆少將の時局修養に關する講演
十二日　縣知事廣瀬永造閲下來校御視察体力章檢定（第二日）
十四日　体力章檢定（第二日）「朝鮮の種」提出納
十五日　秋季マラソン大會
十六日　角道班　和歌山實業へ遠征
十七日　臨時議會に於ける東條首相の旋政演說の錄音放送を聽取せしむ
二十日　全校生徒に「臣民ノ道」配布
廿二日　四、五年野外演習（吉備實業生と聯合）
廿四日　鐵製品撤收
廿五日　本校卒業生田栄中次中尉のノモハン激戰体驗談
廿九日　學藝會

十　二　月

五　日　期末考査開始、廣村津浪祭參列
八　日　米英に對し宣戰の大詔渙發せらる
九　日　戰捷祈願參拜
十　日　宣戰の大詔御渙發に當り縣知事よりの訓辭を朗讀

十一日　考査終了、宣戰布告詔書捧讀式、容所祭參列
十六日　教練査閲、査閲官保田中佐外來賓多數來校
二十日　競算會
廿四日　湯淺町出火に際し報國隊出動
廿五日　大正天皇祭、本校主催騎乘競技大會
廿六日　縣体育聯盟主催驛達競走に參加
廿七日　終業式、馬術班映畫會
廿八日　冬期集團作業（第一日）、湯淺國民學校に於ける郡民大會講演會に列席聽講、故陸軍中將楠山秀吉氏（第四回卒業）告別式
廿九日　集團作業（第二日）、菅原、井本兩先生告別式

◇昭和十七年　一　月

一　日　拜賀式
六　日　武道寒稽古開始
七　日　古谷先生着任
八　日　宣戰布告詔書奉讀式、神社參拜
十五日　劍道大會（寒稽古納會）
廿四日　英語コンテスト、國語科研究授業（掛川先生）
廿九日　五年生社會見學（和歌山市方面）
卅一日　書取會

二　月

一　日　父兄會總會、創立九十周年記念行事協賛會發起人會
二　日　心身鍛錬週間行事として行軍演習
三　日　九鬼先生、南洋事情講演會に出席
五　日　五年期末考査開始
七　日　ニュース映畫、理科映畫參觀
十一日　紀元節拜賀式
十二日　谷田先生應召俘除歸任、五年考査終了
十八日　シンガポール陥落に當り戰捷第一次祝賀式
二十日　卒業生豫餞會
廿二日　第三十五回卒業式
廿八日　空襲避難演習

三　月

六　日　期末考査開始
八　日　劍道班　由良村海軍紀伊警備隊道場開きに出場優勝
九　日　期末考査終了、荒木大將講演聽講（湯淺國民學校）
十　日　陸軍記念日、谷田先生の記念講話、妙神山へ行軍登山
十二日　戰捷第二次祝賀式
十九日　終業式
廿二日　入學考査第一日
廿三日　入學考査第二日
廿四日　入學考査第三日
廿五日　合格者發表

四　月

二　日　佐藤校長、涌田、勝丸先生告別式
五　日　佐藤校長見送り

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

六日　始業式、下田、樋口、林、宮本先生新任式、午後一年生入學式

七日　對面式

八日　大詔奉戴記念日、新校長瀧田先生出迎、着任紹介式

十日　廣村招魂祭、劍道班、角道班奉納試合に參加

十一日　第三十回生校友木下弘君中支に於て昭和十七年一月三十一日戰死せられたる旨發表、鄉土學友會入會式

十三日　藤田先生体育指導者理事會に出張

十八日　鍛錬班各班長先生紹介、空襲警報發令

二十日　舊配屬將校森川大佐公葬執行に當り弔電發送、補習授業開始（月水金の放課後）長濱先生新任式

廿一日　梧陵祭、劍道奉納試合

廿二日　青少年學徒に賜りたる勅語下賜記念日

廿五日　靖國神社臨時大祭、午前十時十五分遙拜式

廿七日　模擬試驗、職員身体檢査

廿八日　縣下配屬將校會議、五甲教練參觀授業

廿九日　天長節拜賀式、馬術班有田愛馬會主催騎乘競技會に出場

五月

一日　健民運動開始、結核豫防に關する令旨捧讀式

三日　谷田教諭午前三時逝去さる學校長、總務、親睦會幹事弔問

四日　故田村教官、先望坂口市太郎、川口久雄諸氏の遺族より金一封寄贈、興亞室充實の資に充つ

五日　谷田先生告別式職員生徒代表參列

九日　本校創立九十周年祝典行事第一日（殉靈祭、記念式典、祝賀會、講演會）

十日　祝典第二日（体育大會）

十一日　祝典第三日（マラソン大會）

十五日　林繁雄先生告別式

十六日　全校書取會

廿一日　中間考査開始

廿二日　青少年學徒に勅語御下賜記念日（君が代齊唱、勅語奉讀、謹話、分列式、勅語謹書）

廿七日　海軍記念日、學校長訓話、九鬼先生講話

廿九日　勤勞奉仕第一日

三十日　勤勞奉仕第二日

六月

一日　勤勞奉仕第三日

二日　第二回卒業校友田中武雄氏朝鮮政務總監就任につき祝電發送

四日　英語科研究授業

六日　中井先生金澤市に於ける全國理科大會に出張、生徒禮法要項讀合せ

九日　種痘實施、南條先生有田高女に於ける銃後々援强化講習會へ出張

十一日　食糧增産作業第一日

十四日　食糧增産作業第二日

十六日　鍛錬班生徒幹事任命

十九日　必勝財政協力二百三十億貯蓄奬勵施强調週間開始、父兄會第一日

二十日　父兄會第二日

廿二日　体管檢査開始、ツベルクリン注射

廿五日　數學科研究授業

廿七日　貴習田挿秧、數學科要目改正受講のため武内先生奈良へ出張

七月

二日　久松侍從本縣下視察御差遣の旨謹話、中井、宮本、長濱先生、物象講習會へ出張

三日　期末考査開始

六日　第三十四回卒業陸軍中尉崎山林一氏戰死報告

十日　古谷先生滑空訓練のため伊都中學へ出張、全校水泳開始

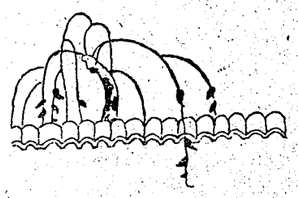
十一日　學校長第三部中等學校長會議へ出席、嶋原先生磯の浦に於ける水泳指導者講習會へ出張、齒牙檢査

十六日　大遠泳

十七日　中井先生縣下中等學校總務會議出席

十九日　貸附馬玉山號到着

廿一日　本學期終業式



稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

和歌山縣立耐久中學校報國隊編成附防護組織

編成		防護分擔	詰所	資材
大隊	第一中隊 第一小隊（五甲） 第二小隊（五乙）	消火	○平時ハ火元 ○空襲時ハ五年教室北側松林	バケツ、ハタキ、砂袋、莚、梯子、蓆口、消火器
	第二中隊 第三小隊（四甲） 第二小隊（四乙）	防毒救護	○銃器庫前	防毒面、防毒衣、晒粉、檢知器、繩、杭、槌
	第三中隊 第一小隊（三甲） 第二小隊（三乙）	警備	○奉安所前	武裝
	第四中隊 第一小隊（二甲） 第二小隊（二乙）	運搬	○平時ハ朝禮場 ○空襲時ハテニスコート附近松原	
報國隊本部附	第五中隊 第一小隊（一甲） 第二小隊（一乙） 第三小隊（一丙）	豫備	○平時ハスタンド ○空襲時ハテニスコート附近松原	

耐久中學校臣道實踐組織

（昭和十七年度）

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

耐久中學校臣道實踐組織

（昭和十七年度）

- 校長……總務
  - 會計……高居
  - 庶務……野田
  - 連絡……野田・河内
  - 企劃……南條
  - 修學部
    - 教學部……河内
      - 教科……河内
      - 學級……各擔任
      - 行事……齊藤
      - 研究……野田
      - 調査……野田
      - 統計……根岸
      - 掲示……宮本啓
    - 訓育部……南條
      - 儀禮……齊藤
      - 風紀……藤田・宮本・福
      - 週番……交替
      - 整美、酒帶……長濱・高居
      - 汽車通學生……九鬼・野田・宮本……（上リ）内田・瀧川・上ノ山・龜（下リ）輕便 和中・前田武・芝崎・龜井
      - 自轉車通學生……福……松原・中井幸
      - 寮一生……下田・藤田
    - 厚生部……野田
      - 保健、衛生……野田
      - 購買……野田・古谷・根岸……松居祐・川端
      - 職業指導……五甲擔任
      - 進學指導……五乙擔任
    - 鍛錬部……南條
      - 行軍……藤田・宮本・福
      - 合宿訓練……河内・下田
      - 劍道……南條・樋口……寺柚哲・兒島
      - 銃劍術……福……南條……中澤・木根
      - 馬術……野田・樋口……宮澤・山名景
      - 射撃……宮本・福
      - 滑空……掛川・古谷……松原・竹中健
      - ラッパ……宮本・樋口……西澤・畑正
      - 角道……下田・古谷……藤本・山名景
      - 水泳……河内・武内……植田敏・中西德
      - 競技……藤田・河内……瀧川・栗山勘
      - 球技……九鬼・齊藤・長濱……青石・千川・菅谷善
      - 勘勞……宮本啓・武内・野田……花手・水崎
  - 教化部
    - 文化部……河内
      - 防護……河内
      - 銃後……南條・野田
      - 興亞……九鬼……和中・山下茂
      - 食糧……宮本啓・高居
      - 勘勞奉仕……河内・野田
      - 藝能……齊藤・掛川……中井幸・生駒茂
      - 理科……野田・宮本啓……川口眞・神人
      - 地歷……九鬼……川口眞・箱柳
      - 圖書雜誌……河内・林……芝崎・石井正
      - 辯論……林・掛川……松原・山東
    - 國策部……河内
      - 郷土學友……河内
      - 同窓……野田
      - 保護者……河内・高居
      - 社會……南條

報國隊本部附

大隊

編成	防護分擔	詰所	資材
第一中隊 第一小隊（五甲） 第二小隊（五乙）	消火	○平時ハ火元 ○空襲時ハ五年教室北側松林	バケツ、ハタキ、砂袋、莚、梯子、蓆口、消火器
第二中隊 第三小隊（四甲） 第二小隊（四乙）	防毒救護	○銃器庫前	防毒面、防毒衣、晒粉、檢知器、繩、杭、槌
第三中隊 第一小隊（三甲） 第二小隊（三乙）	警備	○派安所前	武裝
第四中隊 第一小隊（二甲） 第二小隊（二乙）	運搬	○平時ハ朝禮場 ○空襲時ハテニスコート附近松原	
第五中隊 第一小隊（一甲） 第二小隊（一乙） 第三小隊（一丙）	豫備	○平時ハスタンド ○空襲時ハテニスコート附近松原	

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

特別警備隊（適宜大隊ヨリ分進ス）

特技隊

- 救護隊（第二中隊第二小隊）
- 防毒隊（第二中隊第一小隊）
- 防火隊（第一中隊）
- 乘馬隊（馬術班員）
- 自轉車隊（自轉車通學生）

備考

一、報國隊活動ノ範圍ハ大キナモノナルモ、本案ハ報國隊ニテ行フ防護組織ヲモ附記シタリ

二、防諜活動ノ要ナキ時ハ消火中隊ニ合併シ消火中隊長ノ指揮ヲ受クベシ

三、特技隊、特別警備隊ハ必要ニヨリ大隊長之ヲ組織シ分進スルモノトス

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書資料番号 9

現職員一覽

奉職年月順（昭和十七年九月現在）

就職年月	受持學科	分掌事務	氏名	出身地
昭和一七、四	修	學校長	瀧田謙治	栃木
仝 六、四	英語	教務主任	嶋原清二	滋賀
大正一五、四	劍・國漢	一甲擔任	南條正次	仝
昭和一二、一〇	生物	教務	野田彰	仝
仝 二、三	圖・習	教務	齊藤勇吉	山形
仝		會計	高居利助	和歌山
仝 一四、一〇	國漢	五甲擔任	河內貞次郎	新潟
仝 一五、四	体・音	二乙〃	藤田常藏	和歌山
仝 一六、三	地・歷・數	四甲〃	九鬼潔	仝
仝 一六、三	國漢・修	三乙〃	掛川恒夫	長野
仝 一六、八	數	四乙〃	武內勝祐	和歌山
仝 一七、一	英語	一乙〃	古谷正	神奈川
仝 一七、三	英語	三甲〃	下田正武	兵庫
仝 一七、三	國漢・修・公	二甲〃	樋口昇	新潟
仝 一七、三	國漢・作	一丙〃	林善雄	和歌山
仝 一七、三	農・物・數		宮本啓三郎	仝
仝 一七、四	數・物	五乙擔任	長濱肇	仝
仝 一七、七	教練・歷		宮本眞喜男	仝
仝 一七、七	教練		福惣吉	仝
仝 一七、八	商・簿・珠		花手薫	仝
仝 一七、九	珠・作	庶務	芝野辰之助	仝
仝 一七、二	英、公	購買	根岸三郎	埼玉縣
仝 一七、八		助手	宮本佳郎	和歌山
仝 一六、三	教練	配屬將校	櫻庭徹郎	北海道
明治四一、一	校醫		堤清彥	和歌山

和歌山縣立耐久中學校沿革史年表

年號	校名	校長	沿革
嘉永五	稽古場（廣村田町）	（創立者）濱口梧陵・濱口東江・岩崎明岳	濱口梧陵・濱口東江・岩崎明岳翁稽古場ヲ開ク 海上胤平・佐々木五十鈴・小野石齋等ヲ聘シ、修文練武士氣ノ振作ニ力ム
六			
安政元			十一月大海嘯襲來
二			
三			
四			
五			廣村大防浪堤成ル
六			
萬延元			
文久元			
二			
三			
元治元			
慶應元			

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

一五		
一四		廣村大道ニ移轉竣築ヲナシ永樹ヲ植ヒ耐久社ト稱ス
一三		學劍指南田中八十吉・中村嘉衛門等ヲ聘シ、安樂寺住職濱口松塘氏專ラ教育ノ任ニ當ル
一二		
一一		
一〇		
九		
八		
七		
六		
五		
四		
三		
二		
明治元		石田冷雲氏來社漢籍ヲ講ズ、社生二十名ニ過ギズ
三		岩崎明岳氏論語古訓ヲ講ズ
二		校舍ヲ改築シ、風紀振肅ノタメニ學則ヲ定ム
		乙田八十吉・中村嘉右衛門氏等學劍ノ指南ヲナシ、濱口松塘氏專ラ教育ノ任ニ當ル

三三	四月入學程度ヲ高等小學第三學年ヲ修了セルモノトス	
三四	物理學、東洋史ヲ加フ	
三五		
三六	四月修業年限ヲ四年ニ延長ス	
三七	中學校令ニ準ジテ學制ヲ定メ修業年限ヲ五ケ年トス	
三八	文部省視學官中川謙二郎氏視察ノタメ來舍	
三九	東久世通禧伯來舍	
四〇	九月廣村西ノ濱ニ校舍新築移轉ス	
四一	二月校庭ニ氣象觀測機ヲ据付ク	
四二	四月米國エール大學教授ラツド博士來舍講演	
四三	學舍ノ組織ヲ變更シテ中學校令ニヨリテ設立スルコトヽナリ和歌山縣私立耐久中學校ト改稱	
四四	三月東京高師教授松井筒治氏來校視察	
大正元	文部大臣小松原英太郎閣下來校視察	
二	濱口容所氏校主トシテ獨力經營トナル	
三	隨意科トシテ手工ヲ置ク	
四	文部省視學官生駒萬治氏來校視察	
	學級ヲ增加シテ九學級トナス、教室、寄宿舍增築	
	和歌浦ニテ建造中ナリシボート潮、電、颶三隻竣工	
	奥平昌泰伯來校	
	校主容所氏逝去、嗣子吉右衛門氏校主繼承十學級トナス	
	職員職務章程及諸規程制定	
	岩崎明岳翁逝去セラル德川頼倫侯・澁谷中將・三浦男外數名來校視察	

四	久耐立私縣山歌和	濱口容所
三	2	長校
二	大正元	雄良山寶（舍長）長校
四四		勝直川香
四三		
四二		
四一		
四〇	舍學	
三九	3	
三八		
三七		
三六		
三五		
三四		
三三		

五	中學校	
六	5	
七		
八		
九		
一〇	和歌山縣	
一一	3	
一二		
一三	8	
一四		
昭和元	3	
二		
三		
四	縣立	
五	11	
六		
七		

近藤治齋	規程要綱ノ改正、生徒心得、寄宿舍々則等制定發表	
松扉得悟	中學校ト改稱十周年並ニ新築落成祝賀式擧行	
酒井榮太郎	文學博士井上円了氏來校講話	
瓜生兵吉	德川侯爵令嗣並夫人來校講演	
	澤柳文學博士來校講演	
	濱口兩家ヨリ校地、校舍、公債証書七萬圓ヲ縣ニ寄附シ縣營移管、縣立耐久中學校ト改稱	
	加藤哨堂氏來校講演	
	十一月天皇皇后兩陛下御眞影來戴	
	二月本校創立七十周年記念祝賀式擧行	
	八月皇太子殿下御寫眞來戴	
	演武場新築落成式擧行	
	天皇皇后兩陛下御寫眞奉戴	
	六月五日校長、配屬將校外職員三名、生徒百四十一名大阪城東練兵場ニ於テ御親閲拜受	
廣	十一月校長、配屬將校、職員二名、生徒四十名大阪城東練兵場ニ於テ御親閲拜受	

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

八	耐久中學校	瀬賀造	一月特別敬室一棟（百八十坪）竣工五月創立八十周年記念祝典並ニ記念行事擧行
九			
一〇			十一月陸軍大將荒木貞夫閣下來校講演
一一			
一二			
一三			
一四			皇紀二千六百年記念造林事業ニ着手ス
一五		佐藤安一	十一月十日皇紀二千六百年記念式典擧行 十一月十九日荒木貞夫大將來校講演、 四月二十一日梧陵祭ノ日ヲトシ崇義團結成式擧行、八幡神社劍道奉納試合ヲ創始
一六			四月從來ノ三一會ヲ解消シ學校修練組織結成、 九月學校報國隊結成 十二月八日米英ニ對シ宣戰ノ大詔御渙發アラセラル
一七	3		五月創立九十周年式典擧行 學級增加一學年三學級トナル
一八			
一九		瀧田謙治	
二〇			

舊職員名簿

（誤謬遺漏等、御氣付の方は御通知ありたし）

本籍又ハ現住所		氏名	
和歌山縣廣村	創立者	亡濱口梧陵翁	同
同	同	亡濱口東江翁	元舍長
同	同	亡岩崎明岳翁	亡野田四郎
同	同	亡濱口容所翁	亡伊藤温
東京市麻布區六本木六六	元舍主 元校長	濱口儀兵衛	亡大島常枝
千葉縣	元校主	亡海上六郎	亡遠藤敬次郎
和歌山縣		亡佐々木久馬之助	亡狩野廣崖
山口縣		亡小野石齊	亡妻木僧暢
和歌山縣		亡石田冷雲	濱口惠璋
同		亡乙田八十吉	佐々木定信
		中村嘉右衛門	亡若林初太郎
和歌山縣	元舍長	亡濱口松塘	雜賀貞淨
同		亡松本德行	亡寶山良雄
同		亡桑村元愷	亡吉村英徵
同		亡桑村彦雄	亡西山柳太郎
同		亡濱口時丸	亡前山昌次郎
			亡市川勇
			亡狛忠雄
			亡渡邊運治
			亡金子重太郎
			亡瀧川廣保

同	元校長
兵庫縣	亡大島常枝
和歌山縣	亡遠藤敬次郎
同	亡狩野廣崖
同	亡妻木僧暢
同	廣村
同	石垣村
栃木縣宇都宮市新宿町一八	亡若林初太郎
大阪市北區都島中通六丁目三	雜賀貞淨
京都府	元校長
和歌山縣	亡吉村英徵
同	亡西山柳太郎
同	亡前山昌次郎
東京市	亡市川勇
兵庫縣	亡狛忠雄
秋田縣	亡渡邊運治
石川縣	亡金子重太郎
愛知縣	亡瀧川廣保

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

和歌山縣　亡　岩崎淳
同　有田郡田殿村　亡　菅原得水
廣島縣　亡　小森志賀太
朝鮮京城府大和田町三ノ九　亡　榎本榮
和歌山縣　亡　淺井彦四郎
石川縣　亡　杉尾憲壽
和歌山縣　亡　高井米吉
名古屋市中區廣見町五ノ五四　亡　川島榮次郎
和歌山縣　亡　淺利清太郎
大阪市西區新町通四丁目　亡　小原可夫
和歌山縣有田郡湯淺町　亡　金野正雄
熊本市大江町是法五七八　亡　高木又男
九州學院在勤
和歌山縣　亡　玉置光三郎
同　小松原通三丁目　亡　井村信一
京都市聖護院西町一八　亡　坂井德藏
熊本市　亡　池田喜雄
大阪市西區北堀江上通一ノ一　亡　濱口八十五
靜岡縣　亡　林正太郎
長野縣　亡　保科美雄

京都市　亡　瀧浦文彌
和歌山縣有田郡湯淺町　亡　西尾秀
同　亡　熊代彦太郎
靜岡縣　亡　糟谷綱藏
和歌山縣有田郡廣村　亡　泉平兵衛
大阪市東成區天王一三三七　亡　久保田庄作
愛媛縣喜多郡新谷町　亡　大野龜次郎
廣島高工教授　亡　光藤珠夫
廣島市皆實町四八〇ノ一　亡　星野伊三郎
和歌山縣　亡　河村龜之助
京都市（居所不明）　亡　小針重吉
福島縣　亡　田島蕃樹
熊本市大江町大江　亡　池永忠太郎
和歌山縣　亡　香村直忠
大阪市　亡　小山辰吉
和歌山縣　亡　尾崎周藏
愛媛縣　亡　山下定市
和歌山縣有田郡藤並村　亡　香川直勝
大阪市此花區上福島中一ノ一　元校長
和歌山縣　亡　植木俊一

靜岡縣　亡　內田包松
兵庫縣　亡　阪本周吉
新潟縣　亡　渡部織衞
和歌山縣有田郡藤並村　亡　崎山永太郎
文部省教化局長　元校長　近藤壽治
和歌山縣　亡　中野獻夫
京都府　亡　的場連彌
和歌山縣　亡　井上大次郎
靜岡縣　亡　秋野要藏
和歌山縣有田郡藤並村　亡　野田宏
金澤市鱗町三丁目　亡　山本孝太郎
鹿兒島縣櫻島　亡　園田英世
福岡縣　亡　緒方雄平
和歌山縣有田郡湯淺町　亡　名島繁太郎
兵庫縣　亡　岸峻
亡　濱野秀永
山口縣萩市一一四七　亡　岡部常一
和歌山市有田屋町一五　亡　土岐才次郎
和歌山縣　亡　油谷保太郎

福井縣南條郡武生町北府村　亡　中村嘉市
福岡縣筑紫席田村雜餉隈　亡　楠田鎭雄
京都市東山區今熊野南日吉町八　亡　中（舊姓家入）性慶
東京市世田ヶ谷區北澤町三丁目　久富勉策方　亡　泰次辰次
金澤市石坂角場四番町三　亡　山科龜義
石川縣　亡　深山徵（舊姓林）
京都市右京區花園妙心寺町　臨濟學院中學部長　亡　森島海音
山口縣山口市大字上竪小路　亡　疋田剛三
京都府久世郡宇治町一二三　亡　菱木岩四郎
岐阜縣惠那郡長島町中野　亡　兼松綠
群馬縣　亡　高橋觀隆
和歌山縣　亡　津村慶四郎（舊姓岩崎）
兵庫縣立第三神戸中學校教諭　亡　今井辰吉
神戸市林田區片山町一ノ八三　亡　川合久
兵庫縣川邊郡伊丹町伊丹　亡　戶口愉策
和歌山縣立日高中學校長　亡　中島岩三
兵庫縣揖保郡龍野町十文字川　亡　吉井壽太郎
廣島縣福山市西馀町二二七　亡　城本藤太郎
吉井治右衞門方
和歌山縣日高郡由良村

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

京都立命館大學講師
京都府船井郡吉富村大字鍛二
長野縣
京都市下京區猪熊通松原下柿本町
廣瀨又一
亡 三井三男人
山下義靜
札幌市南八條西六丁目
（舊姓渡部）眞鍋辰男
和歌山市
松扉得悟　元校長
大阪市住吉區天王寺町三ノ四
高原市太郎
和歌山市雜賀屋町一三
阪本八十四郎
和歌山縣有田郡湯淺町
北村松丘
岐阜縣稻葉郡加納町長刀堀二丁目
福間壽雄
大阪府三島郡芥川村郡家
葦名信行
愛知縣名古屋市東區新出來町一ノ三五
川浦銳次
茨木縣立麻生中學校教諭
栗生功
大阪市北區壺屋町二丁目二一
橋本萬三郎
鹿兒島縣大島郡東方村阿木名
森信吾
北海道廳立旭川商業學校教諭
古賀芳雄
旭川市宮下南町西五丁目二號
奧村光治
千葉市登戸三九三
佐藤昇
埼玉縣比企郡松山町大字松山三八五四
松浦友義
宮崎縣立女子高等技藝學校教諭
京都市伏見町北七丁目二
角野喜六
兵庫縣立第一神戸高等女學校長　元校長
酒井榮太郎
和歌山縣有田郡田殿村
前田浩
臺灣新竹州中壢街中壢郡守
森田民夫
山梨縣中巨摩郡落合村落合
鹽澤守太郎
和歌山縣田邊市
三谷三五郎
和歌山縣師範學校教諭
勝田健夫
神戸市兵庫區東出町二ノ一一四
（舊姓樋口）杉本正信
大阪市北區道本町三九
岡本重夫
福井縣鯖江歩兵第三十六聯隊
山田三郎
兵庫縣立第一神戸高女校教諭
笠松彬雄
和歌山市北福屋町二四
久保昌夫
京都市上京區大將軍鷹司町三六ノ一四
安賀正彥
岡山縣立第一岡山中學校教諭
正路正
大阪市東淀川區下新庄町五九二
大植忠利
島根縣松江市奧谷町一一
川口雄三郎
朝鮮全羅南道光州公立西中學校教諭
中尾功一
和歌山縣
亡 狩野三郎
柏木求馬

京都數學研究社　元校長
京都府立龜岡高等女學校教諭
大阪市港區東田中町六ノ七七
和歌山縣西牟婁郡上秋津村
千葉縣山武郡豐海村西野
鹿兒島縣立伊作高等女學校教諭
愛知縣
滿洲國三江省湯原倉石部隊
大分縣立杵築中學校教諭
愛媛縣八幡濱高等女學校教諭
大分縣立臼杵高等女學校教諭
京都市立第一商業學校教諭
大阪市住吉區住吉町一六七一
和歌山縣
文部省圖書局
東京市豐島區巢鴨町二ノ二三六九
武田製藥會社
瓜生兵吉
田中伊之吉
手塚光雄
高木楚太郎
川島松楠
大泉米吉
亡 三木敏雄
森岡信之丞
（舊姓津々見）安倍正路
金成勇夫
助廣將
川村善助
山本政楠
亡 田村種楠
木佐木力
今永要
草川壽三
內芝利治
竹中克己
和歌山市高松
京都府立桃山中學校長
應召
入營
滿洲國牡丹江青年學校
靜岡縣立濱松工業學校教諭
旭川高等女學校教諭
和歌山縣
和歌山縣
大阪外國語學校在學
武藏高等工科學校在學
日本大學大阪中學校
山口縣立女子專門學校教授
香川縣立三豐農學校教諭
同志社高商
和歌山縣女子師範學校教諭
箕島商業學校教諭
高野繁八
廣瀨實造
深見顯吉
鈴木啓二郎
阪東澤二
伊藤弘
增子久三郎
亡 塩地伸一
亡 梶原政雄
森川啓宇
寺杣勇
土岐長治
西岡亮
竹倉二郎
日根善之助
青江清一
伏木鐵郎
加藤清晴
市間文治

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 9

有田高等女學校敎諭　植村保
入營　武田清
和歌山縣　清瀧耕兒（舊姓大井）
栃木縣立烏山中學校敎諭　野邊龜吉
大阪府立茨木中學校敎諭　津本誠一郎
大阪府立岸和田中學校敎諭　尾崎昌興
星藥學校　郭宏一
縣立和歌山高等女學校敎諭　山縣信敬
國際運輸會社大連支店　兒玉宏達
愛知縣　小山一
大阪府　北井敏之
和歌山縣立串本商業學校敎諭　榎本万吉
大分縣立中津中學校敎諭　菅原季雄
市立和歌山市商業學校敎諭　井本清三郎
德島縣立美馬高等女學校長　元校長　佐藤安一
靜岡縣立掛川中學校敎諭　涌田隆一
大阪市立第七商業學校敎諭　勝丸久視
串本商業學校敎諭　楠本貞雄
京都帝大　福田芳助
和歌山縣　谷田賢一
箕島商業學校　林繁雄
丸善石油下津製油所　岩崎亮
和歌山縣立日高高女校長　中井英一

創立九十周年記念寄附者芳名

（昭和十七年十二月十二日現在）（敬稱省略）

▲日田郡ノ部

箕島町

五〇圓　上野山茂
五〇　垣内弘
三〇　兒島頼陽
五〇　山本菊太郎
五〇　石井孝次
五〇　木村瀧次
五〇　池永傳治
五〇　大浦雄藏
二〇　上野山彌助
二〇　中野傳七
一五　三浦清龍
一五　池永靜子
一五　出島文兵衛
一五　石井三助
一五　木村弘二
一五　菅田良應
一五　栗山勸
一〇　岸上松次郎
一〇　秦長三郎
一〇　高瀧昇
一〇　西田佐太郎
一〇　島田傳次郎
一〇　梅本五郎吉
一〇　内田ツル
一〇　江川禎彦
一〇　宮地久楠
一〇　宮本慎一
五　今井幹雄

保田村

一〇　小賀建樹
一〇　小賀時彦
一〇　佐原恒一
一〇〇　上山甚太郎
二〇　星尾圀次郎
三〇　一柳惠俊
二〇　境やす
二〇　伊藤武二郎
二〇　楠本耕一
三〇　川島清一
一〇　川口英一
二〇　佐原太郎
三〇　小賀宗一
二〇　佐原次郎
二〇　石井廣治
二〇　堀田辰藏
五〇　上野山信一
一〇　上野山長治
一〇　石井敏雄
一〇　柴崎晃海
一〇　上山粂治
一〇　廣田達男
一〇　川口清
一〇　御前尙夫
一〇　御前正夫
一〇　森紀彦
一〇　川口勝
一〇　谷口幸一
一〇　西谷秀楠
五　郭進
一〇　川嶋誠治
一〇　川口親治
一〇　川口信義
一〇　川口幸郎
一〇　藤田千代藤
一〇　古川一夫
一〇　上野山龜一
一〇　佐原毅
一〇　佐原濟
一〇　岩橋重夫
一〇　佐原英示
五　岩橋慧
一〇　宇野和夫
一〇　上野山治夫
一〇　上野山隆
一〇　上野山賢次
一〇　川島茂次
一〇　川島正

宮原村

五　五谷
一〇　墳清太郎

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

二〇 瀧川喜太夫
二〇 中西隆一
二〇 宇治友吉
二〇 生駒盛造
二〇 宮本修一
二〇 御前由太郎
二〇 穐竹富子
二〇 美崎吉郎
二〇 川口敬之
二〇 藤岡茂
二〇 伊藤静一郎
二〇 宮本利一
二〇 村山源一
二〇 吉田滿壽雄
二〇 御前藤楠
二〇 保田眞道
一〇 宮澤榮一郎
一〇 橋爪俊夫
五 伊藤辰夫
五 木村良一
五 木村芳久
五 橋爪庄藏
五 藤岡久雄

五 林正吾
五 林茂夫
一〇 生駒透
一〇 生駒敬行
一〇 早田政久
五 川口武男
五 宮本基
五 喜多半
五 九鬼清
五 澳盛三
五 澳太門
五 竹谷卓三
五 宮本眞喜男
五 依岡敬藏
一〇 茂野博美
一〇〇 宮本裕夫
三〇 宮澤等
二〇 野田一也
二〇 喜多哲
五 茂野義
二〇 貞良二
一〇 生駒久七
三〇 木晋吾

一〇 國中泰雄
五 九鬼昇
二〇 伊藤敏彦
五〇 川口富士太郎
二〇 澤崎源一
二〇 澤崎博雄
二〇 竹中敏光
二〇 乙井憲三
二〇 宮井政美
一〇 九鬼綠郎
五 茂野順實
一〇 内芝利治
一〇 伊藤国
一〇 桑原信一
一〇 生馬駒三郎
三〇 三木省三
二〇 大浦康弘
二〇 伊藤光應
二〇 川口武之助
五 金森喜則
三〇 林善英
一〇 伊達輝巳

糸我村

五 宮井新太郎
二〇 清水五郎
二〇 兒島重太郎
二〇 兒島藤松
二〇 兒島五郎
二〇 兒島周造
二〇 山崎實之助
二〇 最田長太郎
一〇 山崎久男
一〇 山崎信夫
一〇 宮本清太郎
一〇 兒島延一
一〇 中村義衛
一〇 川口淳藏
一〇 大浦弘一
一〇 宮井直吉
五（舊姓鉢内）生馬貞三

田栖川村

五 金森喜一郎

一〇 五百崎英雄
一〇 石井傳次郎
五 太田正
五 岡田庄司
五 坂本芳雄
五 林善衛
一〇 河内清吉
一〇 栖原慶一
一〇 前田茂一
一〇 千川覚助
一〇 野村龍宏
一〇 中尾小良
一〇 松野保
一〇 成田春男
一〇 上山榮一
一〇 嘉成一郎
一〇 前田四郎
一〇 西島爲次郎
一〇 中島明憲
一〇 前田唯一
二〇 近藤喜代博
二〇 水崎精一郎

三〇 松下克已
一〇 玉置俊一
一〇 白水茂
一〇 池田幸太郎
五 宮芝勇
五 登尾正晴
五 嶋田健三
五 宮芝敏彦
一〇 岡崎義雄
五 生駒久七
一〇 橋本幸一

湯浅町

一〇 谷本敏男
五 中孝太郎
五 玉井孫七郎
五 上田健助
五 三橋彌太郎
五 林長一
五 松田豊子
二〇 名島鹿之助

五 中西英雄
五 松田楠雄
五 山口清藏
五 小川龜一
五 案志竹太郎
五 後名米次
一〇 有本佐一
五 小川武一
一〇〇 大谷樫二
一〇 田中米吉
五 横貫義資
一〇 山本儁
五 糸川昇
一〇 佐々木博
五 赤桐友一
五 坂本隆太郎
一〇 竹中正一
一〇 兵野永三
一〇 見矢政吉
五 見矢榮一
五 土岐善一郎
五 松下正二郎
五 横山八郎

五 桝谷定吉
五 後藤武
五 宮井こう
五 西川由喜男
五 佐々木熊男
一〇 栩野新一
五 栩野五爾明
一〇 久保清太郎
一〇 寺柚勘次
五 平林宗興
一〇 岸田賢一次
一〇 菅谷政次郎
一〇 畑彌太郎
一〇 山名由太郎
五 片山榮次郎
一〇 茂井英
一〇 木下長次
一〇 栩野常次郎
五〇 西尾秀
一〇 林七郎兵衛
五 和田堅二
五 奥谷義一
一〇 丸山喜一

稲むらの火の館所蔵 渋谷家文書 資料番号 9

一五五五〇五〇五〇〇〇〇〇五〇五五五五五五五〇

稲小小小宮黍岡玉橋森森蔭法鎌堀山橋根上上片朝小
内川川地原　暨本本　本眼田田田医本来野野山山川
磐川　鳩正労三一勇太三男三秀義祭一健一太医英　黍清良誠
爾　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　
一勇雄義信郎雄藏郎郎雄一一郎三郎郎藏茂夫一一一

五五五〇五〇〇五〇〇〇〇五〇五〇五〇五〇五〇五〇

片入大兒兒生蕉蕉中岩岩岩山船木神土游湯湯道橋加
山野門島島駒岡野野上上本山川崎嘉三久信敬右衛兵
國佐邦高兵夫由武之鉉時正太三鑑四治郎郎藏昇郎郎補二鍛冶一門衛
太太郎郎夫一衛郎顕助郎夫治郎郎藏昇郎郎補二鍛冶一門衛

三〇五〇五〇五五〇五　廣　二〇〇二〇五五〇〇二〇五五五

守花津花成島寺澳山　村　市花花市数中上原加鎮中梶小
法田村手相中村・田　間手間見島田賀俊西野林
禮嘉大廣和高ヌ　光夫太一寄代勝秀玄
治管四太郎志男白ミ　敏俊藤三郎郎市補二亨一一

二五　一二〇五〇〇五〇五〇五〇五〇一三〇五〇一五五

一崎吉西戸矢澁願渠佐上高戸久人寺橋願寺宮数田朝
ノ山田鶴田世傳長　々田垣田徳徳石忠作慶　俊三
瀬貫岩　船谷　山木く佑一幸三喜夫太太　夫
一吉弘補彦郎郎吉濃雄玄夫郎雄郎一郎郎郎　夫郎

五五五〇五〇五〇五〇五〇五〇五〇五〇五〇五〇五〇

見三平中蟹補龍組垣平竹廣湯宮上畑中岡大大見木畑
島尾田崎崎井谷田駒木中田遠辻畑川井野谷願島戸野
恒常貫　　黍三誠康夫　敏雄鷲佐左忠　長願　一貞一
松郎藏琢一郎藏熊郎正郎藏衛門義清二松晃郎茂夫雄

五五五五〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

永佐田東村青竹竹酒酒阿北湯湯畑安安白藤堤堤古岸生角
岡木中田石中井非井頭卯村原原川野野子原田啓崎駒谷
健美敬正貞近中久太千宜兵松傳千正茨泰夫幸清正孫治
二賀夫造二助助德郎秋之衛丘一代一夫佑郎一秀久郎幸助良

五五〇〇五〇五五五五五五五五五五五五五五五五五五

畑九田小玉平武谷木栩玉栩西花桑岡大魚金数成渠柳
・里邊泉匠田本野野匠野端手田根橋谷野見田山瀬
桑太華秀兵利田恭青蕾千太一三謙正　定正紀　光太桑　薯
一藏一夫進衛清代郎郎郎三夫郎雄清男廣治郎信仲一

一五〇〇五五〇五〇〇〇〇五〇〇五〇〇〇〇五〇〇五〇〇五〇〇五〇〇二四

土山斐戸青竹赤鍛山小松北竹西竹岩桑見多楓川川
峻本木津村桐野本賀下村内垣中崎泰田玉飯来口口
繁美瑞葦靖清三義清祐久瑞櫃太欣保　矢嶋房茂典顕兵
松一夫男司夫郎一夫一七登藏郎也三茂郎明吉雄夫吉衛

五　大野久吉　一〇〇
二〇　辻岡光之助　五〇〇
二〇　林義景　二〇
一〇　田邊熊三　二〇
二〇　五島德三　一〇〇
一〇　辻本喜一　二〇〇
五　竹中佐一　五〇
五　赤井貞次郎
一〇　上田光弘　五
五　岩崎勇茂　五
岩崎
一〇〇　覺野庄次郎
五　橋本和一郎　五
一〇　三崎金吾　一〇
五　黍原啓二郎　二〇
五　赤松柳三　一五
一〇　岩崎功　一〇
五　北浦政吉　一〇
二〇　永井徹　一〇
二〇　播磨千代松　五
三〇　浦清兵衛　一五
一〇　飯沼仁一　一〇
一〇　泉平兵衛

南廣村

五　雜賀正晃　一〇
一〇　下出松太郎　一〇
一〇　下出嚴　一〇
一〇　森虎雄　一〇
一〇　中平隆三　一〇
一〇　中平貞夫　一〇
一〇　岩崎厚　一〇
三〇　西出嘉夫　一〇
一〇　西出慶三　一〇
一〇　山口弘市　一〇
一〇　竹中啓二　一〇
一〇　梶原潔　一〇
二〇　森口義補　二〇
一〇　崎山政千代　一〇
一〇　吉水善宏　三
一〇　松下信次　一〇
一〇　直山種吉　一〇
一〇　山本政一男　一〇
一五　前川榮一　一〇
一〇　山本精豊二補　一〇

津木村

一〇　北又安二　一〇
一〇　田中榮一　一〇
一〇　上野山福雄　一〇
一〇　山下龜次郎義文　一〇
一〇　西島傳之助　一〇
一〇　栗山多喜男　一〇
一〇　久保田正雄　一〇
一〇　石原久三　一〇
一〇　崎山定雄　一〇
一〇　長谷隆二郎　一〇
一〇　片山龜補　一〇
一〇　竹中信親　二〇
一〇　西谷久藏　一〇
一〇　寺井亨　三
一〇　柏角治　一〇
一〇　下出源之助　一〇
一〇　畠山信一　一〇
一五　梅本助右衛門　一〇
一〇　久保田四郎　一〇
一〇　丸畑雄次郎

一〇　柳淵寺太郎　一〇
一〇　梅本常吉　一〇
一〇　寺杣定楠　一〇
一〇　古垣內宮次　一〇
一〇　岡崎源太郎　一〇
五　萩延太郎　一〇
一〇　籔內四郎　一〇
六　石原平三郎　一〇
一〇　藤澤彌之助　一〇
五　寺杣懷德　一〇
一〇　菅澤英徵　一〇

藤並村

五　南出一男　一〇
五　西村佑一　一〇
五　後藤惠雄　五
五　田殿村　五
五　生駒又次　一〇
五　青石幸一　五
一〇　古谷久雄　五
一〇　浦木正雄　五
一〇　植田福太郎　一〇
一〇　前田靜夫　五
一〇　鈴木弘宜　五
一〇　矢船茂一　五
一〇　前田正英　五
一〇　岩倉勳　五
一〇　前田紀美雄　五
一〇　森良孝　五
二〇　矢船良彥　五
五　林眞次　五
五　大橋尙　五
五　大木忠雄　五
五　三星田富四郎　五
五　吉信章續　一〇
一五　吉栖正雄　一〇
五　前田俊彥　一〇

一〇　武田保　一〇
五　吉田利雄　一〇
五　二澤忠勝　一〇
一〇　竹中清治　一〇
一〇　田口善哉　一〇
一〇　中西英雄　一〇
一〇　林直次　一〇
五　龜井五郎　五
五　若宮秀彥　五
一〇　花田憲司　五
五　藤田信吉　五
五　岩倉定市　五
五　花田武夫　五
五　花田義一　五
五　三木常太郎　五
五　花田欽次郎　五
五　三木銀一　五
五　三木源太郎　五
一〇　岩倉富造　一〇
一〇　大橋榮一　一〇
五　岩倉善治　五
五　岩倉善一　五
五　嶋田孝逸　五

一〇　岩倉好譽　一〇
五　池浦弘　五
一〇　川崎猛　一〇
一〇　嶋田勝清　一〇
一〇　吉田耕一　一〇
一〇　吉田正嘯　一〇
一〇　吉田豊保次治　一〇
一〇　吉田秀雄　一〇
一〇　大倉茂造　五
一〇　嶋田彌六　一〇
五　嶋田源之助　五
五　菅谷一敏　五
五　川島義治　五
五　三木勳　五
五　松阪東藏　五
五　三木市親　五
五　三木重隆　五
一〇　松阪彌　一〇
五　森正　五
五　水崎正美　五
五　吉田政治　五
五　前田敏夫　五
五　柳本友雄

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

五　光定道次
五　光定清一郎
五　青木俊次
五　柳本完造

御靈村

二〇　芝野とと
二〇　西澤由楠
二〇　石田楠松
二〇　川口渉
二〇　小西菊松
二〇　小林六郎
二〇　松原又次郎
二〇　栗栖國松
二〇　伊藤邦助
二〇　中西松太郎
二〇　高垣主計
三〇　星田義量
二〇　瀧昇
二〇　松山繁次郎
二〇　溝上友一
二〇　畑中紋次郎
二〇　池永熊雄

二〇　亀井幸一郎
二〇　山本伴三郎
二〇　松尾健一
四〇　中井武一
二〇　竹本義一
一〇　門田つや
二〇　吉井俊一郎
一〇　鍛田武重
二〇　川口洋
二〇　川口誠一郎
二〇　小林彦次郎
二〇　神山義郎
五　堀美雄
五　星田龍介
二〇　東尾邦次
二〇　小林三郎
二〇　小林半次郎

生石村

一〇　井爪良一
一〇　山本勝藏
一〇　岩上善吉
一〇　大谷武治

一〇　中西米一
一〇　松本庄三郎
二〇　補部邦彦
一〇　佐々木重邦
一〇　榎本信太郎
三〇　木清
一〇　中西正信
一〇　井爪修二
二〇　井爪宏
二〇　橋爪徹三
一〇　板原淳治
二〇　榎本八郎
二〇　井爪光次
二〇　決得武俊
五　金澤龍
五　井爪雅雄
二〇　下井幸得
二〇　中井正弘
一〇　山添常次
一〇　中井純一
一〇　保井清
五　岩本一郎
五　岩本宏次
五　宮本克
二〇　宮本佳郎

一〇　補部竹次郎
二〇　補部邦彦
一〇　佐々木重邦
三〇　高垣照一
一〇　森田善次
二〇　吉松源次郎
二〇　中井竹次郎
二〇　佐々木定一
二〇　佐々木英雄
二〇　木根孝雄
二〇　新谷善太郎
二〇　船越傳次
二〇　林房補
三〇　森田俊一郎
二〇　中井重太郎
二〇　中井正弘
一〇　中井純一
一〇　中井治八郎
二〇　高垣てる
二〇　補部壽治
二〇　岩垣文治
二〇　森田利夫
二〇　高垣勝

二〇　庄司延鶴
一五　津呂辨次
一〇　河村貫市
一〇　良田秀英
二〇　佐々木善次
二〇　森田清
三〇　佐々木廣海
二〇　石井秀彦
二〇　高垣高太郎
一〇　高垣八三

島屋城村

五　別當太嘉雄
五　江尻登久
一〇　堀口幸雄
五　三輪洋止
二〇　神山德松
三〇　滑德一市
一〇　森田邦千代
一〇　平尾勝
一〇　津田茂生
二〇　前田秀夫
一〇　田端半次

一〇　東田和四
三〇　瀨藤亮平
一〇　芝崎靜女
一〇　川口清
一〇　西本嘉治
一〇　小槇正司
一〇　小槇孝二郎
一〇　馬谷和市
一〇　中井隆一
一五　池尻彌七
一五　川島米一
一〇　井上齊一
一〇　三輪義夫
一〇　大南正雄
二〇　登尾覺一
三〇　高垣英一
一〇　北山谿太
一〇　玉置角次郎
一〇　川村房一

五　平女隆行
二〇　後安貞義
三〇　内芝幸太郎
五　鳥山幸一
一〇　服部恭三
一〇　吉田勇次
五　吉田和夫
一〇　堀畑一雄
一〇　石谷徹
一〇　河合源市
二〇　野田康次
二〇　湯田善一
五　拔井伊右衛門
二〇　石井純治
五　勝丸儀助
一〇　曾根昇治

五西月村

一〇〇　岡本俊一
二五　坂本重三郎
一〇　上松菊右衛門
二五　澤崎乘覺
二五　長柄義光

一〇　壽系武次
一〇　浦政五郎
二五　若林重治
二五　金澤賢吉
一〇　金澤賢治
二五　山本義隆
二五　蔭田良一
二〇　鳥居伊之助
二五　杉本義一
一〇　城山村
五　島彦太郎
五　東金松
五　梶岡新藏
五　早田常一郎
二〇　上北幸隆
一〇　梶岡敬二
一〇　中家源四郎
五　東寇次郎

一〇　平林福壽
三　宇根利平

岩倉村

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 9

五 大磯定樣
五 北本博通
一〇 今井利弘
一〇 山本弘
五 中家芳松
四 赤桐榮一
一〇 保田好孝

八幡村

三 海瀬周一郎
五 保田重藏
五〇 堀江正夫
五 保田俶
五 井本敏
五 尾上敬之助
二〇 古谷八郎
二〇 堀江治

五 村

五〇 山中龜松
五 谷口孝

安諦村

一 早野亮平
五 宮崎努

▲團体ノ部

五〇 有田郡國民學校長協會
一〇〇 耐久中學校職員一同

▲和歌山市ノ部

五 宮下又七郎
五 有本眞治
三 中四郎
一〇 中口春次
五〇 瀧秀信
三 赤桐行三郎
五 上田啓二郎
三〇〇 島村富次郎
一〇〇 生駒茂
一〇 宮田啓二
一〇 三井茂
五 湯田圭一
一〇 土岐政藏
二〇 松本憲二
一〇〇 御前慶造
五 森田重雄
一〇 室長之助

▲海草郡ノ部

五 岡室平八
五 井上永次
五 利光平三郎
五 薄美濃幸雄
五 良田秀觀
二〇 西本廣吉
二〇 中村春松
三〇 井筱寛治
一〇〇 金子明
五 野田眞夫

▲日高郡ノ部

一〇 木谷義信
五 井原康隈
五 藤本俊雄
五 楠本英二
五 岡鋭男
五 薄井一彦
五 吉水靈瑞
五 加辻喜一
五 角本忠一
五 森澤円一
五 塩崎秀松
一〇 鈴木啓市
一〇 金谷武次郎
一〇 川端秀吉
一〇 久堀武親
一〇 岩崎清太郎
一〇 中塚助治郎
一〇 都甲格
一〇 谷口三喜藏
一〇 富永峯吉

一〇 乾風仙右衛門
一〇 川崎良逸
一〇 瀧本ユキ
一〇 岩崎時松
五 濱上常次郎
一〇 見上マス
一〇 見上善太郎
一〇 中田甚平
一〇 山名龍太郎
五 前田幸一
一〇 川端磊三
五 垣内常助
一〇 橋本竹藏
五 岡本新太郎
一〇 太田彌四郎
五 岩畑長太郎
五 村田市太郎

▲西牟婁郡ノ部

五 尾崎正治
一〇 西正胤

▲大阪府ノ部

一〇 楠部敬一郎
一〇 佐藤新
三〇 湯川繁次郎
五 佐野純三
三 南照雄
一五 雑賀貞淨
五 谷口陸之助
一〇 板谷義信
五 長谷川道正
五 武内龍二
一〇 湯田保楠
五 境幸一
五 津々見稔
五 秋田正徹
五 秋田雄
五 橋本竹次郎
五 竹本正光
五 菅原恂
五 鈴木清
五 御前重忠
二〇 岡本宗明
五 杉田忠義
五 中野宗弘
五 額田英一郎
一〇 栗山升二
一五 栗山芳雄
一〇 林昌治

▲兵庫縣ノ部

五 瀬戸保三
一〇 垣内良雄
五 妻木隆三
五 宮井佐兵衛
二〇 吉田知邦
一〇 上山武夫
一〇 石田豊三
五 椿本忠兵衛
五 田中榮次
二〇 勝丸久視
二〇 中良之助
二〇 久徳幸一
二〇 松本續
二〇 楠山武雄
二五 栩野藤太郎
二〇 玉置佐一郎
一〇 山本忠太郎
一〇 石城才藏
一〇〇 坂本憲三
一〇 清水房吉
三〇 久保不二太郎
五 上中利雄
五 吉田正作
五 井原順三
五 竹中新次郎
五 吉田健吉
一〇 宮井實三郎
五 枠谷與一郎
一〇〇 森口源十郎
一〇 黒岩文一
三 菅原美之
一〇〇 平山峯雄
一〇〇 尾形和七郎
五〇 玉井友太郎

▲京都府ノ部

一〇 神山米千代
五 高城雅良
二〇 鈴内庄三

稲むらの火の館所蔵 渋谷家文書 資料番号 9

五〇　川口遜
五　籔田秀一
一〇　武内英德
一〇　鳥淵信千代
五　川瀬貞三

▲奈良縣ノ部
五　細平利雄
三　峩山重次
一〇　西川良三郎

▲德島縣ノ部
一〇〇　佐藤安一
一〇　山丸晃

▲廣島縣ノ部
二〇　倉田舜一
倉田耕志

▲三重縣ノ部
三　木下守夫

▲鳥取縣ノ部
二〇　田中道夫

▲大分縣ノ部
五　津村慶四郎

▲東京市ノ部
一〇　池下貫夫
二、五　久堀俊隆
二、五　谷中元一
五　久保田秀夫
五　上野富造
三　小山元一
小山軍之助
六〇　榎本勝吉
一〇　狩野政次郎
一〇　堀武芳
五　法眼晋作
一〇　千川忠雄
二〇　津村利光
三　小川道郎
三　岡本豊
三　木下繁
三　勝丸重雄
三　岡善一
三　奥井實積
三〇〇　濱口儀兵衛
三〇〇　稲葉淺吉
二〇〇　榊原龍之助
一〇〇　楠間龜楠
三〇〇　遠山清太郎
三　大江亮

▲千葉縣ノ部
三〇　菖蒲谷義郷
一〇　堂野前維厳郷
八〇　山崎善一
一〇〇　水崎鐵次郎

▲北海道ノ部
五　東道夫
一〇　吉村敦

▲神奈川縣ノ部
一〇　永廣武信
二〇〇　土井眞三次

▲茨木縣ノ部
五　森弘

▲宮城縣ノ部
五　金森誠之

▲朝鮮ノ部
五　渡邊武四郎
二〇　近藤信慶
五　持田千洲
一〇　龜石豊太郎
二〇　狩野辰雄
五　赤坂安藏

▲臺灣ノ部
二〇〇　安田芳助
五　薗悌次郎

▲滿洲ノ部
三　藏野喜介
一〇〇　山田良吉
一〇　松下貫一
一〇〇　平松道夫
一〇〇　宮本榮太郎

▲支那ノ部
一〇　岩崎俊雄
一〇　岩崎茂助
五〇　上松蕭

▲昭南市ノ部
二〇〇　采女美員

事變日誌

（承前）

昭和十五年　十月

三日　閑院參謀總長宮殿下御離任、後任に杉山元大將親補さる

四日　獨軍、ルマーニヤに進駐開始

七日　佛印進駐の皇軍河内に入る

八日　クレーギ英大使、雲南ビルマ、ルート再開を通達、アメリカ政府、極東在住婦女子に引揚げ方勸告。カナダ日本向け銅の輸出禁止

十七日　香港政廳當局援蔣香港ルート再開の旨發表

十八日　天皇・皇后兩陛下靖國神社に御參拜

十九日　安藤利吉中將に代り後宮淳中將南支方面陸軍最高指揮官に決定

廿一日　天皇陛下親臨の下に紀元二千六百年記念觀兵式擧行さる

廿二日　松宮大使とドクター佛印總督間に會談開始

廿六日　去る八月二十九日伊號第六十七潜水艦、東京灣南方洋上で遭難せる旨公表

十一月

一日　小林蘭印特派使節歸朝

六日　ルーズヴェルト大統領に三選

九日　チェンバレン前英首相逝く享年七十二

十日　天皇・皇后陛下臨御の下に紀元二千六百年式典執り行はせらる

十五日　泰國の失地回復要求に對し佛印側强硬態度を表明

廿三日　日獨伊三國同盟にルーマニア參加

廿七日　新台灣總督長谷川清大將および新駐米大使野村吉三郎大將親任式擧行

廿九日　國民政府代理主席汪精衛氏の主席就任式擧行

三十日　蘭印使節の後任として芳澤謙吉氏を派遣に決定

十二月

一日　ルーマニア國、滿洲國を正式承認

五日　故西園寺公望公國葬

七日　新中支方面海軍最高指揮官に細萱戊子郎中將補せらる。新駐支大使に本多熊太郎氏親任

十日　イギリス當局蔣政權に對し一千萬ポンドの借款供與を決定

十一日　帝國と泰國イラン國との國交修好條約樞府本會議で可決

十二日　獨ソ兩政府、舊ポーランドの新國境線を正式に承認調印を完了

十四日　北阿戰線の英軍ソルム占領

廿三日　日泰友好和親條約バンコックに於て批准交換調書に調印

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

三十日　日佛印東京會談開始

昭和十六年　一　月

三　日　援英アメリカ第七十七議會開會

五　日　英軍北阿バルディア占領

八　日　東條陸相は戰時道德昂揚のため「戰陣訓」を全軍に示達

ノックス米海軍長官、來る二月一日より米艦隊を太平洋、大西洋およびアジヤ三艦隊に編成替へする旨發表

十五日　メコン河右岸で泰佛印軍交戰

二十日　日ソ漁業暫定協定成立

廿六日　松岡外相議會で對米方針開明

廿七日　時艱克服決議案本會議で可決

廿九日　泰佛印停戰會議サイゴン洋上の帝國軍艦上で開く

卅一日　山下奉文中將一行ヒツトラー獨總統を訪問。泰佛印協定成立

二　月

二　日　六十八億圓の明年度一般會計豫算可決、アフリカ戰線の英軍バレンツ占領

四　日　アメリカ政府鐵鋼、鐵鋼製品の輸出制限品目を百四十八種にわたり再指定

七　日　蘭印政府錫ゴムの敵地向輸出制限令を發表、米大統領特使カリ重慶入り

九　日　イギリス政府はルマーニア政府に對し外交關係決裂を通告

十一日　野村駐米大使ワシントンに着任

十二日　フアンデン漠洲代理首相全國民に太平洋の危機切迫を警告

十五日　アメリカ下院ダアム、サモア等太平大西兩洋の海軍基地强化案を可決

十六日　イギリス海軍省シンガポール海峽東入口に機雷を敷設する旨發表

十七日　日ソ通商交渉モスクワにて再開、ブルガリア、トルコ兩國の不侵畧共同宣言發表

三　月

一　日　支那派遣軍總司令官に畑俊六大將親補、ブルガリア日獨伊三國同盟に正式參加、獨軍ブルガリアに進駐開始

十　日　滿獨貿易協定、批准交換を了し發効

十一日　泰佛印の紛爭調停成立、三國共同コンミユニケ發表

十二日　松岡外相訪歐の途につく

十九日　獨空軍ロンドン大空襲敢行

廿五日　ユーゴースラヴイアも三國條約に參加

松岡外相一行ベルリン入り

廿七日　ユーゴー軍部クーデターを敢行

廿九日　三笠宮殿下と高木正得子二女百合子姫と御結婚の儀勅許あらせらる

卅一日　松岡外相ローマ入り。獨伊、アメリカ政府の樞軸國船舶拿捕に關し抗議提出

四　月

一　日　六大都市にお米の通帳制實施。パナマ運河防備に米軍防衛協定成立

四　日　南支方面海軍最高指揮官に親見政一中將就任。アプガニスタン經濟使節國入京

五　日　ソ聯、ユーゴー間に不侵畧條約成立

六　日　獨軍、ユーゴースラヴイア、ギリシヤ兩國に進擊開始

八　日　アメリカ諸港に碇泊中の獨伊船舶を米統領言明

十一日　ハンガリア、ルーマニアの兩軍、ユーゴーに進擊を開始、ドイツ當局クロアチヤの獨立宣言を公表。デンマーク政府對米グリーンランド協定は無効と宣言

十三日　松岡外相、モロトフ外相との間に日ソ中立條約に調印を了す

十四日　北阿の獨伊軍ソルムを占領

十五日　ブルガリア、ユーゴー國交斷絶

廿二日　松岡外相帝都に歸還

廿五日　アメリカの哨戒水域を擴大し必要とあらば七つの海にまで及ぼす旨聲明

廿六日　訪日獨經濟使節團一行入京

三十日　獨軍の封鎖區域に入る艦船は國籍の如何を問はず撃沈する旨言明

五　月

五　日　バタヴイア滯在中のオランダ外相、東亞共榮圏に蘭印不參加を聲明

九　日　泰佛印平和條約正式に調印

十　日　ブルガリア政府、滿洲國を承認

十三日　ドイツ政府紅海を作戰區域に指定宣言

廿四日　北大西洋上で獨英兩艦隊遭遇、獨主力艦ビスマルク號は英艦フツド號を撃沈

廿七日　ビスマルク號撃沈さる

六　月

四　日　ドイツ廢帝ウイルヘルム二世オランダに逝く

八　日　英軍およびドゴール軍シリアに侵入

十一日　日ソ通商貿易協定成る

十四日　米大統領は獨伊および歐洲の被占領國の在米資金凍結を命令

十七日　中華民國國民政府主席行政院長汪精衛氏訪日晴れの入京。日蘭會商不調の聲明發表

廿二日　ドイツ政府、ソ聯に對し宣戰布告し直ちに進擊開始。イタリアも對ソ宣戰を布告。チャーチル英首相、ソ聯援助を聲明

廿四日　モスクワ在住邦人婦女子引揚げを決定

廿五日　フインランド、對ソ宣戰を布告。デンマーク、對ソ外交關係斷絶を聲明

七　月

一　日　獨、伊、ルーマニア、スロヴアキア、クロアチア、スペイン、ハンガリア、ブルガリアの樞軸八ケ國は國民政府を承認

五　日　ペルー、エクアドル兩國交戰狀態に入る

七　日　アメリカ海軍艦艇、アイスランドに進駐揚陸の旨發表

十　日　關門海底トンネル開通式

十二日　ソ聯政府より日本海に航海危險水域設置の旨通告

十三日　北支方面海軍最高指揮官に杉山六藏中將就任

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

十五日　獨軍中部戰線のキエフ市に突入
十八日　第三次近衛内閣成立。アメリカ政府パナマ運河修理を口實に
　　邦船の通航を禁止
十九日　フインランド政府、滿洲國を承認
二十日　初の「海の記念日」
廿二日　中支方面海軍最高指揮官に小松輝久中將補せらる
廿五日　米大統領、在米日本資産の凍結を命ずカナダ政府も在加日本
　　資産に凍結令を適用
廿六日　日佛印共同防衛成り聲明を發表、イギリス政府全版圖内にお
　　ける日本資産凍結を發表。日英通商航海條約を破棄する旨イギ
　　リス政府發表
廿八日　蘭印政廳、日本資産を凍結

八　月

一　日　日泰間に一千萬バーツの借款成立。泰國滿洲國を承認
五　日　ペルー、エクワドル國境紛爭に關するデマにわが外務當局エ
　　國に抗議
七　日　印度詩聖タゴール翁逝く、享年八十一
十六日　泰國駐在初代大使に坪上貞二氏親任さる
廿五日　英ソ兩軍呼應しイラン國境を突破、テヘランへ進擊を開始
廿八日　野村大使、太平洋問題につき帝國の所信を近衛首相のメッセ
　　イジとして手交

九　月

九　日　皇軍岳州東方の作戰を完了

十　日　佛印への特派大使に芳澤謙吉氏任命
十一日　ル米大統領、海洋の自由と防禦水域の哨戒強化を放送確言
十八日　ソ聯機雷の日本海流失に嚴重抗議
廿一日　皇軍湖南殲滅戰に呼應、西江方面に新作戰展開。中支戰線一
　　萬余キロに皆既日食
廿七日　獨軍クリミア半島進擊

十　月

二　日　九州北西海面において水上艦と衝突、伊號第六十一潜水艦沈
　　沒す
四　日　皇軍郴州を占領
十五日　滿蒙國境確定
十六日　近衛内閣總辭職、獨軍オデッサ占領
十八日　東條内閣成立
廿二日　三笠宮崇仁親王殿下、高木百合子姫と御結婚あらせらる。米
　　スターク作戰部長英國内に海軍根據地を建設中と發表
廿四日　臨時議會召集。獨軍ハリコフ占領。日米間の衝突は不可避と
　　ノックス米海軍長官言明
廿九日　獨軍クリミヤ半島へ突入

十一月

五　日　來栖大使、野村大使援助のため米國に派遣さる
六　日　氣比丸事件に關し、我が方ソ聯に嚴重抗議す
十　日　第七十八帝國議會召集の詔書公布さる
廿二日　本年度の國民貯蓄目標額百七十億圓に增額と決定。ハル米長
　　官、英、蒋、蘭、重慶代表と會談
廿六日　日米第四次會談、ハル長官より日本側に文書を手交
廿七日　日米第五次會談。新任中華民國特命全權大使徐良氏信任狀を
　　捧呈
廿八日　芳澤特派大使ドクー佛印總督と會談

十　二　月

一　日　日米第六次會談
二　日　日米第七次會談。坪上駐泰大使ピブン首相と會談。英東亜艦
　　隊を編成の旨シンガポール軍當局公表
八　日　**米英兩國に宣戰の詔書渙發さる**。帝國陸海軍八日未明西太平
　　洋において米英軍と戰鬪狀態に入る。海軍航空部隊長驅ハワイ
　　を急襲、グアム島、ウエーク島を猛爆、比島の航空兵力並びに
　　主要飛行場、シンガポール附近のテンガー、セレタ兩空軍基地
　　および空軍司令部を爆擊す。海軍艦艇ミッドウエーを急襲。帝
　　國潜水艦ホノルル沖において航空母艦エンタープライズ號を擊
　　沈
　　陸海軍協力マレー半島に奇襲上陸を敢行。支那方面艦隊香港
　　方面の金沿岸を封鎖。帝國海軍上海において英砲艦ペトレル號
　　を擊沈、米砲艦ウエーク號を降服せしむ
　　現地陸海軍部隊北京、天津、秦皇島、上海、沙面各租界に進
　　駐、敵國權益の處理を開始
九　日　陸軍部隊北部マレーの要地を占領。防衛總司令官に東久邇大
　　將宮殿下を御親任

十　日　陸海軍部隊比島に敵前上陸を敢行。海軍航空部隊マニラ方面
　　大空襲、比島航空兵力の大半を擊碎す
　　英東洋艦隊旗艦プリンス・オブ・ウエールス、戰艦レパルスを
　　轟沈、わが損害飛行機三
　　陸海軍部隊グアム島に上陸
　　海軍の偉功（ハワイ海戰）を嘉し山本聯合艦隊司令長官に勅語
　　を賜ふ
十一日　日泰攻守同盟の原則につき意見一致。獨伊兩國對米宣戰を布
　　告、日獨伊三國同盟强化の新協定調印なる
十二日　陸軍部隊香港對岸の九龍一帶を完全占領
　　陸海軍部隊ルソン島南部に上陸、挾擊態勢成る
　　陸海軍部隊グアム島を完全占領
　　海軍航空部隊の偉勳（マレー沖海戰）を嘉し山本聯合艦隊司令
　　長官に勅語を賜ふ
　　對米英戰を支那事變を含め大東亜戰爭と呼稱の旨情報局發表
十四日　陸軍部隊ビルマ領ヴイクトリア飛行場を攻略
十六日　天皇陛下第七十八帝國議會開院式に行幸あらせられ、優渥な
　　る勅語を賜ふ
　　改正國民徴用令公布實施さる
　　陸海軍部隊緊密なる協同の下に英領ボルネオに敵前上陸を敢
　　行
十八日　現地陸海軍最高指揮官、香港總督に對し二回に亘り降伏を慫
　　慂したるもこれを拒絶したるを以て敵の猛射を冒して夜半香港

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号 9

島要塞に上陸作戰を敢行
十九日　陸軍部隊マレー西海岸のペナン島を攻略
二十日　陸軍部隊、海軍と相協力してミンダナオ島に上陸、首邑ダヴアオを完全占領
廿一日　日泰同盟條約締結
廿二日　陸軍大部隊ルソン島新方面に上陸を開始
廿三日　海軍部隊濠洲を冒しウェーク島に敵前上陸を敢行完全占領す
廿四日　陸海軍部隊ラングーンを急襲
廿五日　陸軍航空部隊英領ボルネオ西南地區に上陸
廿八日　陸軍航空部隊第三次ラングーン空襲敢行陸軍部隊香港全島の占領を完了
廿九日　陸軍部隊マレーの要衝イポー攻略
三十日　海軍航空部隊マニラ灣コレヒドール島要塞を猛爆
卅一日　陸軍部隊マレー要衝クワンタンを占領

昭和十七年　一　月

二　日　大詔奉戴日（毎月八日）設定を初閣議で決定皇軍マニラを完全占領
三　日　米英兩國西南太平洋防衛最高司令官にウェーヴェル大將就任
四　日　長沙を完全占領
十一日　陸軍部隊マレー首都クアラ・ルムプールを完全占領
帝國陸海軍部隊蘭印に敵前上陸敢行
十二日　帝國潛水艦ハワイ西方に於て米航空母艦レキシントン型（三〇〇〇トン）一隻を撃沈
十八日　日獨伊三國ベルリンに於て新軍事協定に調印
廿三日　陸海軍部隊ビスマルク諸島に敵前上陸を敢行
三十日　占領地の軍政機關顧問に永田秀次郎、村田省藏、砂田重政、德川義親侯の四氏任命さる
卅一日　陸軍部隊ジョホール・バールを完全占領、ビルマのモールメンを占領

二　月

三　日　海軍航空部隊ジャヴア島を初空襲
四　日　皇軍シンガポール軍港の攻撃開始
六　日　占領地の海軍軍政顧問に藤原銀次郎外五氏就任
九　日　陸軍部隊シンガポールに敵前上陸を敢行
マレー方面陸軍最高指揮官は山下奉文中將と發表
十一日　午前八時シンガポール市街に突入
十五日　シンガポール島要塞陷落
南方方面陸軍最高指揮官は寺内壽一大將と發表
十七日　シンガポール島（港）を昭南島（港）と改稱の旨發表
十九日　陸海軍部隊バリー島に上陸
海軍航空部隊濠洲ポートダーウインを猛爆
二十日　陸海軍部隊チモール島に自衛作戰を開始
卅一日　帝國艦艇昭南島に入港
廿二日　在敵印度國民會議派チャンドラ・ボース氏日本の支援下、印度解放へ邁進の旨日本國民に對し聲明

廿四日　帝國潛水艦アメリカ・カリフオルニア州沿岸の軍事施設を砲撃
廿八日　駐ソ大使に佐藤尙武氏親任さる

三　月

一　日　皇軍ジャヴア島に强行敵前上陸を敢行海軍部隊二月二十七日以來ジャヴア海において米英蘭濠の西南太平洋聯合艦隊を潰滅
二　日　西南太平洋總司令官ウェーヴェル罷免の旨英當局發表
五　日　陸軍部隊バタヴイアを完全占領
六　日　ハワイ海戰に偉勳輝く特別攻撃隊に關し大本營發表
八　日　皇軍ラングーンを完全占領
陸海軍部隊ニューギニア島へ敵前上陸を敢行ジャヴア島の敵無條件降伏
十二日　戰捷第二次祝賀日
二十日　日ソ漁業暫定協定なる
廿三日　陸海軍部隊アンダマン島に奇襲上陸
廿七日　關門鐵道海底トンネル全通

四　月

二　日　印度國民會議派運用委員會英國政府提案の拒絶を決議
三　日　皇軍バタン半島の敗殘米比軍に猛攻を開始
五　日　海軍航空部隊コロンボその他を猛爆
六　日　東條首相インド洋方面作戰開始に當り帝國の眞意を闡明
十一日　バタン半島を完全占領
英印交渉決裂
十八日　米機東京・名古屋・神戸方面を空襲ラヴアル佛新内閣成立
廿一日　日泰經濟の協力に關する原則的諒解成立し圓バートの等價制を實施
廿五日　日泰同盟慶祝泰國特派使節團一行入京
廿六日　ヒトラー總統、春季攻勢開始を宣言、完全なる獨裁權を掌握

五　月

一　日　皇軍マンダレーを完全占領
四　日　汪國民政府主席滿洲國訪問
五　日　コレヒドール島要塞に敵前上陸を敢行英軍、佛領マダガスカル島に侵攻
七　日　コレヒドール島その他マニラ灣内の全要塞を完全攻略
八　日　海軍部隊珊瑚海において米空母サラトガ型、ヨークタウン型各一隻を撃沈、ケルチ（クリミア半島）地方に新作戰を展開
十一日　高松宮殿下、南方戰線を御視察
十三日　印緬國境で英軍主力を撃滅
廿六日　高松宮殿下、御渡滿の途につかせらる
廿七日　泰國軍、日泰共同作戰を開始、二十六日ケンタンを占領の旨發表
三十日　關門海底トンネル貫通

六　月

五　日　帝國海軍特殊潛航艇五月二十一日マダガスカルおよびシドニー港を奇襲の旨大本營發表
六　日　帝國海軍部隊、五月下旬ならびに六月上旬東京灣、潮岬南

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

方、九州西南方において敵潜水艦四隻を撃沈の旨發表
十　日　帝國海軍部隊のアリューシャン列島强襲（四日、五日）ミッドウェー海戰（五日）ならびに陸海軍協同のアリューシャン列島の攻略（七日以後）に關し大本營發表
十一日　英ソ同盟ならびに米ソ協定締結に關し三國政府發表
十二日　陸軍航空部隊桂林を急襲、援蔣米機九機を撃墜
十五日　インド獨立大會をバンコックで開催
十六日　ダーウインで敵四十六機を撃墜
十九日　帝國潜水艦ヴアンクーヴアー島を砲撃
廿一日　帝國潜水艦オレゴン州西海岸を砲撃
廿二日　セバストポリ全要塞を占領の旨獨軍當局發表
廿五日　陸海軍部隊アリューシャン列島のキスカ島、アッツ島を奇襲占領引續き附近の諸島を掃蕩中
廿七日　渡米中のチャーチル、ロンドンに遊る
三十日　遣タイ特派大使廣田弘毅氏一行出發

七　月

一　日　帝國海軍部隊インド洋の第一關門ニコバル群島を完全占領
三　日　エジプト獨立の保障に關し獨伊共同聲明
七　日　タイ國、國民政府を承認
獨軍ドン河を渡河
十一日　泰、佛印國境劃定調印式をサイゴンで擧行
十三日　天皇陛下霞ケ浦、土浦兩航空隊に行幸あらせらる
廿三日　ローレンソ、マルケス（東アフリカ）において日米外交官らの交換を完了
廿四日　獨軍ロストフを占領
廿一日　陸軍航空部隊衡陽飛行場を猛爆、米機十三機を撃墜破
海軍航空部隊タウンス・ビル（オーストラリア）を初爆撃
日英外交官らの引揚げ交換の協定成立に關し外務當局談を發表

八　月

一　日　ビルマ行政府成立し飯田最高指揮官より行政長官にバ・モ博士を任命
四　日　海軍航空部隊、ヘッドランド（オーストラリア）を初爆撃
獨軍、ウオロシーロフスクを占領　クーバン河を强行渡河
五　日　陸軍航空部隊、衡陽で米機九機を撃墜
六　日　海軍部隊、アラフラ海上の諸要地を攻略の旨大本營發表

編輯後記

◇茲に昭和十七年の終末に當り、遲延ながら本校創立九十周年記念諸行事の總結集たる本誌を送り得ましたことは誠に欣快に存じます。

◇顧みれば宣戰の大詔を拜しましてより正に一年、思ひ出す數々の輝かしい戰果の中に、大東亞戰一周年の記念すべき日も過ぎました。そして今靜かにこの戰局の前途と、愈〻深刻化しつゝある世界情勢とに思を致す時、思ひ出さるゝものは本校創設當時に於ける我國の情勢と本校創立の精神とであります。時運際會實に九十年、「御民われ……」の感慨を深くすると共に、濱口山に眠る翁の志に報いなければならぬ秋と存ずるのであります。

◇本號編輯の目安も亦此處に存するのでありますが、その間幾多本校につながる先輩各位の御厚意に對し深く感謝致します。別して御繁忙中、講演筆記に入念なる御校閲を下された土岐先生、特に本號の爲に玉稿を辱うしました香川先生・廣瀬先生・佐藤先生に對しましては、何とも感謝の言葉もない次第であります。實は九月中に完成を目指して諸般の準備にかゝりました處、止むを得ず事情の爲、暫く待機せねばならぬ破目になり失禮申上げました点は誠に恐縮に堪へません、こゝに深くお詫び申上げます。

◇記念事業はその後着々と進んでゐる次第でありまして、誌上掲載の外に歴代校長先生の御寫眞も近く完成講堂に掲げることになつてゐます。寄附者御芳名もその後篤志家の方々から意外の嬉しい御援助などありまして心强い次第でありますが、一先づこの邊で中間御報告を致さねばならぬと存じた次第であります。

◇裏紙並に扉は「修文錬武」に因んだもので、齋藤醫伯の勞筆、そのかみの耐久舍を髣髴させる懐しい場面であります。

尙卷頭言を御執筆下さいました瀧田校長先生をはじめ、記念記事の寄稿を戴いた諸先生に對しこの際厚く御禮申上げます。

◇卷末の耐久中學校沿革年表は、資料もなく從つて杜撰なもので、殆ど試案の域を脱しない程度のものでありますが、皆様の御校閲を得て漸次修正完璧を期してゐる次第でありまして何卒今後共御示教を仰ぎたいと存じます。

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9

—昭和十七年度—

昭和十七年十二月二十日印刷
昭和十七年十二月廿四日發行

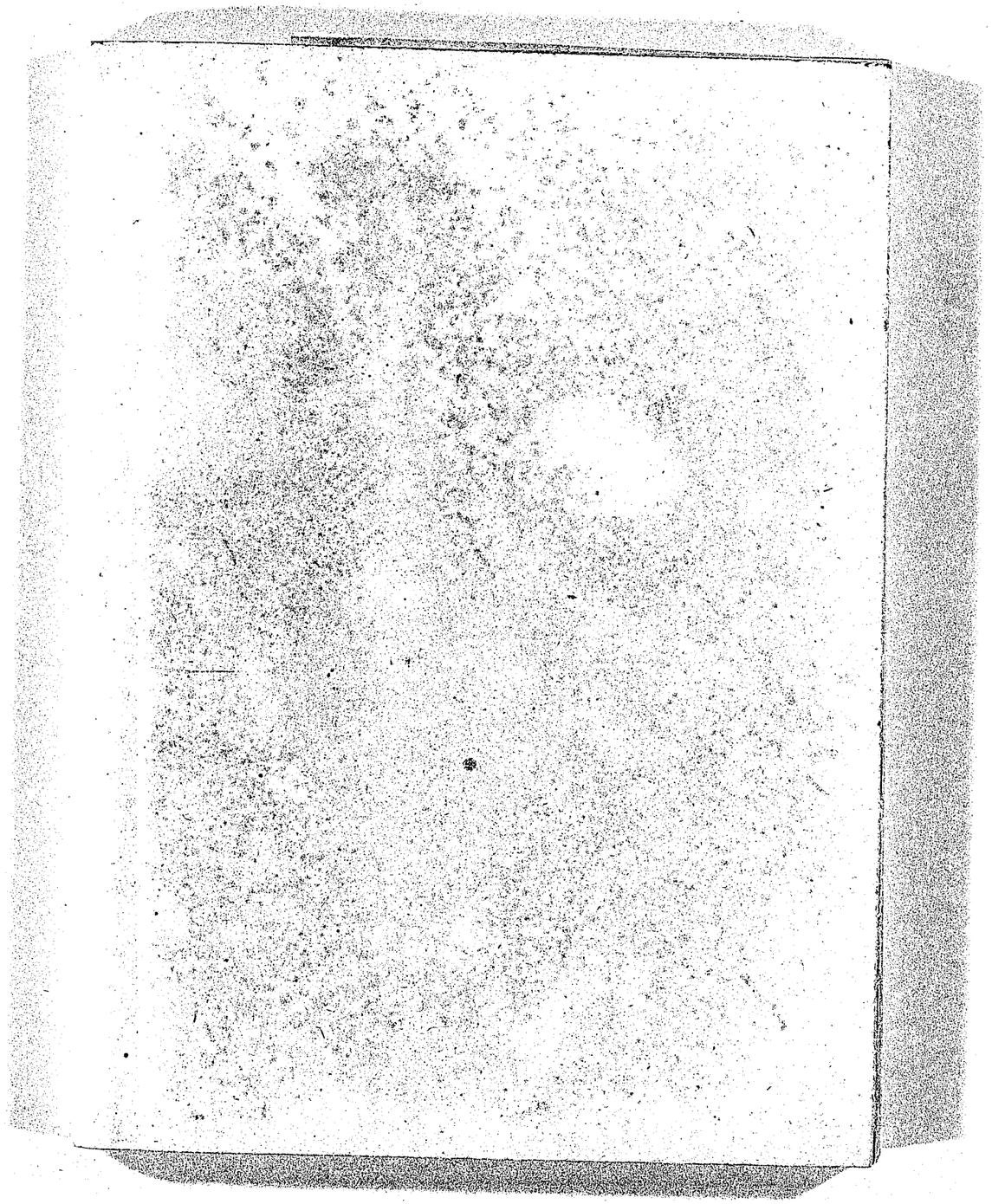
編輯兼發行者　和歌山縣立耐久中學校內　河內貞次郎

印刷者　和歌山市眞砂町一丁目一番地　林孝一

印刷所　和歌山市眞砂町一丁目一番地　林正文行

發行所　和歌山縣立耐久中學校

稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書　資料番号　9



稲むらの火の館所蔵　渋谷家文書 資料番号 9